

No	遺構・区	層	調査および文様	出土 (層)	色 調	備考
184	B-14	N	⑤微隆起縦文 ⑥ナデ		⑨にぶい橙・にぶい黄緑 ⑩浅黄緑・灰黄緑	
185	E-11	N	⑤微隆起縦文・横方向山形押型文 ⑥ナデ		⑨灰褐 ⑩にぶい黄緑	
186	B-14	N	⑤微隆起縦文 ⑥⑦山形押型文		⑨灰褐・黒褐 ⑩灰褐	
187	E-9	N	⑤微隆起縦文 ⑥抛承文?	B	⑨⑩にぶい黄緑	
188	B-12	H	⑤微隆起縦文 ⑥ナデ	B	⑨にぶい褐 ⑩にぶい橙	
189	C-13	N	⑤沈線文 ⑥ナデ	B	⑨褐・にぶい褐 ⑩にぶい橙・棕	
190	C-8	N	⑤沈線文 ⑥ナデ・横方向山形押型文 ⑦山形押型文		⑨⑩にぶい黄緑	
191	B-14	N	⑤沈線文 ⑥ナデ	D	⑨にぶい褐 ⑩にぶい黄緑	
192	E-12	N	⑤(貼付突帯)山形押型原体刺突文 ⑥ナデ		⑨にぶい黄褐・灰黄褐 ⑩黒褐	
193	E-10	V	⑤(貼付突帯)刺突文・凹縫文 ⑥ナデ ⑦刻目		⑨黒褐 ⑩浅黄緑・灰黄褐	
194	B-14	H	⑤刺突文・凹縫文 ⑥ナデ		⑨にぶい黄緑 ⑩浅黄緑	
195	C-11-13	N	⑤(貼付突帯)刺突文・凹縫文 ⑥ナデ		⑨にぶい黄緑・褐 ⑩にぶい黄緑	
196	D-12	N	⑤凹縫文 ⑥ナデ	B	⑨にぶい黄褐・褐灰 ⑩にぶい黄緑・褐灰	
197	F-10	V	⑤抛承文・凹縫文 ⑥ナデ		⑨⑩にぶい黄緑	
198	R-11	N	⑤(貼付突帯)刺突文・山形押型文・凹縫文 ⑥工具ナデ	B	⑨浅黄緑・灰黄褐 ⑩にぶい黄緑	
199	B-14	N	⑤(貼付突帯)刺突文・抛承文?・凹縫文 ⑥ナデ		⑨⑩にぶい黄緑	
200	E-11	N	⑤(貼付突帯)刺突文・凹縫文 ⑥ナデ	B	⑨⑩浅黄緑・にぶい黄緑	
201	E-7	N	⑤沈線文 ⑥ナデ	A・C	⑨にぶい黄緑 ⑩にぶい黄緑・にぶい黄褐	
202	D-E-11	N	⑤沈線文・新方向山形押型文 ⑥ナデ		⑨灰黃 ⑩にぶい黄	原体長3.5cm
203	E-11	N	⑤沈線文・横方向山形押型文 ⑥ナデ		⑨淡黄 ⑩灰黄	202と同一個体
204	C-12	H	⑤凹縫文 ⑥ナデ	B	⑨浅黄緑 ⑩にぶい黄緑	
205	E-9	N	⑤(貼付突帯)刺突文・抛承文?・凹縫文 ⑥ナデ		⑨にぶい黄緑 ⑩浅黄緑	
206	D-12	N	⑤(貼付突帯)刺突文・凹縫文 ⑥丁寧なナデ		⑨にぶい黄緑・灰黄褐 ⑩にぶい黄緑	
207	B-12	H	⑤凹縫文 ⑥ナデ		⑨にぶい褐 ⑩褐灰	
208	D-11	N	*	A	⑨にぶい橙・黒褐 ⑩にぶい褐	

表10 土器観察表(8)

No	遺構・区	層	調整および文様	出土 (個人形)	色 調	備考
209	B-14	E	◎凹線文 ◎ナデ		◎◎にぶい橙	地文様があるもののみ明瞭
210	D-8 E-12	V II	*	A	◎橙・灰褐 ◎にぶい褐・灰褐	208と同一個体?
211	B-14	II	◎貝殻模様(江戸文・凹線文) ◎ナデ	B	◎にぶい橙・黒褐 ◎にぶい橙	
212	F-9	IV	◎ナデ・(貼付突帯)刺突文・凹線文 ◎ナデ	A	◎◎橙	
213	D-12	IV	◎刺突文・凹線文 ◎ナデ	B	◎橙 ◎にぶい橙	
214	C-12	IIa	*	A	◎◎黄橙	
215	C-13	IV	◎3本単位平行凹線文 ◎ナデ		◎灰褐・にぶい褐 ◎灰褐	
216	B-13	V	◎(貼付突帯)刺突文・山形押型文 ◎ナデ ◎剣目		◎◎にぶい黄褐	
217	D-12	IV	◎(貼付突帯)刺突文 ◎ナデ ◎剣目		◎橙・にぶい黄橙 ◎にぶい黄橙・灰黄褐	
218	B-7	V	◎(貼付突帯)刺突文 ◎ナデ	A	◎にぶい赤褐 ◎橙・にぶい赤褐	
219	B-13	V	◎(貼付突帯)刺突文・凹線文 ◎ナデ		◎橙 ◎灰褐・にぶい橙	
220	F-9	IV	*		◎◎にぶい橙	
221	C-12	IV	◎(貼付突帯)刺突文 ◎丁寧なナデ		◎橙 ◎にぶい橙	
222	C-12	II	◎(貼付突帯)刺突文・捺点文 ◎ナデ ◎剣目		◎浅黄橙 ◎にぶい黄褐	
223	E-12	II	◎(貼付突帯)山形押型裏体制突文 ◎ナデ		◎褐 ◎灰黄褐	
224	B-14	IV	◎(貼付突帯)剣目・捺点文 ◎丁寧なナデ ◎剣目	D	◎にぶい褐 ◎にぶい褐・明褐色	
225	C-13	II	◎(貼付突帯)刺突文・捺点文 ◎ナデ		◎淡黄・暗灰黄 ◎淡黄	
226	C-13	IV	◎(貼付突帯)刺突文・繩文(2段L R) ◎ナデ ◎剣目		◎淡黄 ◎浅黄	
227	C-13	IV	◎(貼付突帯)刺突文・繩文(2段L R) ◎ナデ ◎剣目		◎浅黄橙 ◎にぶい黄橙	
228	D-12	IV	◎(貼付突帯)竹管状工具刺突文 ◎ナデ	B	◎暗褐・にぶい黄褐 ◎にぶい黄橙	
229	B-14	IV	◎(貼付突帯)剣目・捺点文? ◎ナデ ◎剣目	D	◎にぶい黄褐 ◎灰黄褐	
230	B-C-13	IV	◎(貼付突帯)刺突文・繩文(2段L R) ◎丁寧なナデ ◎剣目	D	◎にぶい橙 ◎橙	
231	D-12	IV	◎(貼付突帯)刺突文・繩文(2段L R) ◎ナデ ◎繩文	D	◎◎明黄褐	26と同一個体?
232	D-11	IV	◎(貼付突帯)刺突文・繩文(2段L R) ◎ナデ ◎繩文	A	◎灰白・淡黄 ◎淡黄	瘤状突起
233	D-12	II	◎(貼付突帯)刺突文・繩文 ◎ナデ ◎繩文?	D	◎淡黄 ◎灰白	風化、232と同一個体

表11 土器観察表(9)

No	遺構・区	層	調査および文様	出土 (個人蔵)	色 調	備考
234	B-13	V	④(貼付突帯)刺突文・縄文(2段LR) ④ナデ		④灰黄褐・にぶい黄橙 ④にぶい黄橙・灰黄褐	
235	D-11	III	*		④灰黄	
236	C-D-12	IV	④(貼付突帯)刺突文・縄文(2段LR) ④工具ナデ	A	④橙 ④黒褐・にぶい橙	
237	B-13	V	④(貼付突帯)刺突文・縄文(2段LR) ④ナデ		④④橙	
238	D-12	IV	*		④橙 ④にぶい橙	
239	D-12	IV	④(貼付突帯)押山縄文・縄文(1段R) ④工具ナデ		④にぶい黄橙 ④にぶい黄橙・灰黄褐	突帯同様塗り
240	D-12	IV	*		④④にぶい黄橙・灰黄褐	
241	D-12	IV	*		④にぶい黄橙・灰黄褐 ④にぶい黄橙	239と同一質体、突帯同様塗り
242	F-10	V	④結節縄文(2段RL) ④工具ナデ	D	④④にぶい黄橙	
243	D-10	IV	④(貼付突帯)刺突文・縄文(2段LR) ④ナデ	C	④明黄褐 ④にぶい黄橙	
244	E-9	V	④結節縄文(2段LR) ④ナデ		④④橙	
245	B-14	III	④(貼付突帯)麻全体・刺突文・縄文(2段RL) ④ナデ	D	*	
246	B-14	IV	④縄文(2段LR) ④ナデ		④にぶい橙 ④橙	
247	B-14	II	④(貼付突帯)刺突文・縄文(2段RL) ④ナデ		④④にぶい黄橙	
248	C-12	-	④④平行波線文 ④ナデ		④にぶい黄橙 ④浅黄褐	
249	C-7	IIa	④刺突文・凹縄文 ④ナデ 巻凹縄文	A	④④橙	
250	D-12	IV	④(貼付突帯)刺突文・凹縄文 ④ナデ	A	*	
251	B-C-13	IV	④ナデ・貝殻腹縫压痕文 ④工具ナデ	A・擦	④褐・にぶい黄橙 ④にぶい黄褐	
252	B-14	II	④ナデ・貝殻腹縫压痕文 ④ナデ		④④にぶい黄橙	
253	B-13-14	IV	*		④にぶい黄橙 ④にぶい黄褐	
254	D-11	III	④ナデ・貝殻腹縫压痕文 ④工具ナデ		④橙 ④にぶい橙	
255	D-13	IV	④ナデ・貝殻腹縫压痕文 ④ナデ	A	④にぶい黄橙 ④明黄褐	
256	B-13	IV	④工具ナデ・貝殻腹縫压痕文 ④工具ナデ		④④にぶい橙	
257	F-9	V	④貝殻腹縫压痕文 ④ナデ ④貝殻腹縫压痕文	A	④橙 ④にぶい橙	
258	B-14	IV	④ナデ・貝殻腹縫压引状压痕文 ④ナデ		④橙 ④にぶい黄橙	

表12 土器観察表(10)

No	遺構・区	層	調査および文様	地土 (注入物)	色 調	備考
259	B-14	N	⑤ナデ・貝殻模様圧痕文 ⑥工具ナデ	礫	④にぶい黄橙 ⑤にぶい黄褐	
260	SE1		⑤ナデ・貝殻模様圧痕文	A	④にぶい赤褐 ⑤にぶい棕	
261	B-14	N	⑤貝殻模様圧痕文・平行押引文 ⑥工具ナデ		④にぶい棕 ⑤棕	圧痕文と押引文同一原体?
262	—		⑤ナデ・貝殻模様圧痕文 ⑥ナデ		④明褐色 ⑤にぶい褐・褐灰	圧痕文と条痕文同一原体?
263	E-11	N	⑤ナデ・貝殻模様圧痕文・二条単位の条痕文 ⑥(只般?)ナデ		④⑤浅黄棕	圧痕文と条痕文同一原体?
264	E-7	N	⑤ナデ・条痕文・貝殻模様圧痕文 ⑥ナデ		④棕・褐灰 ⑤にぶい褐・褐灰	圧痕文と条痕文同一原体?
265	C-13	N	⑤工具ナデ・貝殻模様圧痕文 ⑥工具ナデ		④にぶい棕・棕 ⑤棕	
266	C-13	N	⑤ナデ・刺突文 ⑥ナデ	礫	④にぶい黄棕 ⑤にぶい棕	
267	C-13	N	⑤ナデ・貝殻模様圧痕文・沈縫文 ⑥ナデ		④にぶい黄棕 ⑤明黄褐	
268	B-14	E	⑤短沈縫文 ⑥ナデ	D	④灰黄 ⑤浅黄	
269	B-14	N	⑤短沈縫文 ⑥丁寧なナデ・工具ナデ	D	*	
270	B-13	I	⑤短沈縫文 ⑥ナデ	D	④⑤灰黄褐	
271	B-14	N	⑤押引文 ⑥条痕		④浅黄褐 ⑤にぶい黄棕	
272	D-13	I	⑤条痕状沈縫文 ⑥工具ナデ		④⑤にぶい黄棕	
273	B-14	N	⑤ナデ・条痕状沈縫文 ⑥工具ナデ		④棕 ⑤にぶい黄棕	
274	B-14	N	*		④明黄褐 ⑤にぶい黄棕	
275	B-14	N	⑤ナデ・沈縫文 ⑥工具ナデ		④にぶい褐・棕 ⑤棕	
276	D-10	N	⑤ナデ・貝殻模様圧痕文・沈縫文 ⑥工具ナデ		④⑤にぶい棕・灰	
277	D-10	N	⑤沈縫文 ⑥工具ナデ		④にぶい黄棕 ⑤浅黄棕・にぶい黄棕	276と同一原体
278	D-10	N	⑤ナデ・沈縫文 ⑥工具ナデ		④にぶい棕 ⑤にぶい黄棕	276と同一原体
279	D-10	N	⑤沈縫文 ⑥工具ナデ		*	276と同一原体
280	D-7	Ea V	⑤ナデ・沈縫文・網目透糸文 ⑥丁寧なナデ・刺突文		④灰褐・淡黄 ⑤黄・黄灰	
281	B-13 D-10	N N	⑤沈縫文・網目透糸文 ⑥ナデ		④にぶい黄棕・黒褐 ⑤灰黄褐	280と同一原体 スス付着らしい
282	E-7	N	⑤ナデ・沈縫文・撚糸文 ⑥工具ナデ	A	④棕・褐灰 ⑤にぶい褐	
283	D-10-11	N	⑤工具ナデ・ナデ ⑥工具ナデ		④にぶい黄褐 ⑤浅黄棕	

表13 土器観察表(11)

No	遺構・区	層	調査および文様	出土 (個人割)	色 調	備考
284	D-11	IV	④工具ナデ ⑤刻目		④⑤にぶい黄桜	
285	G-3	I	④条文文 ⑤(貝殻?)条痕文 ⑥刻目		④灰黄褐 ⑤にぶい黄桜	
286	B-14	IV	④⑤ナデ・工具ナデ		④にぶい黄褐・にぶい褐 ⑤にぶい褐	白色物付着
287	E-12	II	④工具ナデ ⑤ナデ		④にぶい黄桜・灰黄褐 ⑤桜	
288	B-14	II	④⑤ナデ		④⑤にぶい黄桜	
289	B-14	IV	④⑤ナデ	B	④⑤淡黄	
290	B-14	II	④⑤ナデ ⑥工具ナデ	A	④⑤にぶい橙 ⑥橙	
291	C-8	IV	④⑤⑥ナデ		④⑤橙 ⑥にぶい黄褐	
292	E-8	IIIa	④微隆起突帯 ⑤貝殻条痕	A	④灰 ⑤浅黄	スヌ付着著しい
293	SA40		④貝殻複縫任直文・凹線文 ⑤工具ナデ ⑥押圧刻目		④にぶい橙 ⑤にぶい黄桜・にぶい橙	

表14 土器観察表(12)

#### (14) 石器

本遺跡で出土した石器類は、旧石器時代の石器として報告したものを除き、第3節で述べたとおり縄文時代と旧石器時代の遺物が混在している可能性がある。また、アカホヤ上より出土したものに関しては、轟式などの出土の事実から縄文時代前期の遺物も混在している可能性もある。しかしながら、現時点ではそれらを判別する方法もなく、出土土器のほとんどが早期に属することから、特記するもの以外はやむを得ず縄文時代早期の遺物として取り扱っている。

縄文時代の石器類は総数17,940点であり、その内の416点は出土位置を記録しているが、他はグリッドと層位ごとに一括して取り上げている。これらの器種と石材ごとの点数は表15に示したとおりである。

また、石器の分布状況は、図61に各グリッド出土数の石器類総数に対する割合を示した。ただし以下の理由により、図61は、石器の分布範囲やその疎密から人間の行動を捉えるには精度に欠けることを念頭に入れて参考すべきものである。すなわち、早期の包含層IV・V層は堆積状態が一定していないことと、二層とも調査区全面にわたって調査していないこと、さらに包含層以外のI～IIIa層出土遺物は、移動している可能性があるため厳密に言えば出土グリッド内の中物数に加えるべきではないことである。

定形石器以外の遺物については器種分類が不十分な点もあるが、ここでは、以下、各石器の現段階での分類整理の内容と概要を報告するにとどめ、より詳細な分析は後の機会に譲りたい。

##### 石鏃 (294～305)

石鏃は丘陵(調査範囲)南半の、特に尾根上に集中して出土しており、各グリッド出土数の石鏃総数519点(うちV層出土数50点)に対する割合を見ると、D11が最多で9.7%、以下、D8が8.9%、D9、E8、C12が7.3～7.9%、E9、D10・12、C13が4.8～6.2%、その他のグリッドは丘陵南半部が0.6～3.9%、北半部が0.2～0.9%である。

石鏃は、形態および加工状態により次の5型類に分類した。実測図は代表的なもののみ掲載している。石材は黒曜石が77.0%、チャートが16.8%である。

I類は平基の二等辺三角形を呈する鏃で、142点出土している。さらにこれらは、比較的大型(最大長26cm前後)のもの2点(Ia)、正三角形に近く、素材剥片の表裏または片面を丁寧に加工しているもの119点(Ib、294・295)、形態はIbと同様であるが、素材剥片の二辺または三辺の縁辺を加工しただけのいわゆる「剥片鏃」21点(Ic、299)の三つに分けられる。Ibの295は表裏の中央部を研磨した局部磨製石鏃で1点のみ出土している。

II類は基部全体を内弯状に浅く抉るように加工しているもので、191点出土している。こ

器種	数量	黒曜石	チャート	赤色珪岩	安山岩	砂岩	頁岩
石錐	519	397	88	9	18		2
石錐未製品	251	209	22	11	4		2
尖頭器	10	2	5		2		1
石槍	3				2		1
石錐	3	2			1		
石錐または石錐の未製品	5	3	2				
石匙	21	2	6		9		2
スクレーバー	44	11	16		9		4
抉入石器	5	1	1		2		1
楔形石器	11	8	3				
打製石斧	5						5
磨製石斧	2					1	1
環状石斧	1					1	
磨石	20					13	
敲石	3					1	
凹み石	1						
螺旋器	1					1	
石器の破片	3	1		1	1		
石器未製品	9	6	1	1			1
不定形石器	92	62	13	6	7		2
黒形石器	3	3					
二次加工のある剥片	65	27	22	1	5		5
石核的加工のあるもの	68	60	2	5			
石核	290	253	10	13	2		
複数剥離のある原螺旋	242	242					
単数剥離のある原螺旋	97	97					
原石(原螺旋)	1,256	1,253	1	2			
人為的か否か判別不可 の剥離のある原螺旋	39	33	6				
転石	51	50					
剥片・碎片	14,766	11,893	1,511	686	285	24	166
風化摩耗剥片又は原石	70	70					
総 数	17,956	14,686	1,708	735	348	40	194

表15 桶文時代の石器組成表

流紋岩	碧荷色流紋岩 (同一石材)	水 品	石 英	真 珠 岩	凝灰岩	溶 岩 磨	珪 質 岩 (岩石不明)	そ の 他
1			2				2	
			1	2				
2								
3	1							
2								
2			2	1				
	1							
2		1	6	2				1
1								
67	15	1	25	55			32	5
80	17	2	36	60	4	6	34	6

表15 繩文時代の石器組成表

れをさらに分類すると、比較的大型のもの10点（II a、296）、形態および加工状態がそれぞれI b、I cと同じII b147点、II c15点（300）、高さが底辺の1.5倍を越える細長の二等辺三角形を呈するもの19点（II d、297）の四つに分けられる。II bについてはI bとの分別に迷う中間的なものもあるが、基部の加工状態が平基を意識していると判断できるもの以外はII bに含めた。

III類は基部両端を脚状に残し、中央のみ内弯状に抉り込んだもの（298）で、6点出土している。II類に準じるものであるが、ここでは細分を避けた。

IV類はV字状または深く内弯する抉りをもつもので、24点出土している。さらに分類すると大型のもの1点（最大長3.02cm、基部幅2.10cm）、正三角形に近いもの15点（301）、比較的細長の二等辺三角形のもの8点である。

V類はU字状の抉りをもつもので84点出土し、抉りの浅いもの26点（V a、302）と深いもの58点（V b）がある。V bには、いわゆる「鉄形鐵」と呼称されるもの（303）が含まれるが、その形態の定義が曖昧なため、特に分類しなかった。

以上のお他、鋸歯状の側縁部を持つものでII類的な1点（305）とIII類的な2点（304）がある。また、どの型類にも属さないものとして、円基に近い形状や左右非対称のいびつな形状になったものなど29点がある。これらには、加工の状態がIの平基三角形鐵を意識した可能性の高いものが多く見受けられるが、製作モデルと製品形態の不整合は、素材の石質や形状からくる制約や、入念さを欠く加工によるようである。また、分類できない資料として破片42点がある。

ここでは石鐵全資料の計測表を掲載することができなかったが、計測結果を見ると次のような傾向が窺えた。

完形品および先端部をわずかに欠損するものを対象に重量の分布を見ると、各型類ごとの集中範囲は、I b 0.2~0.4g、I c 0.2~0.3g、II b 0.25~0.4g、II c 0.3g、II d 0.4~0.45gで、他は、IV 0.3~1.45g、V a 0.2~3.7g、V b 0.2~1.6gの間で、それぞれらつきがある。長さ×・幅×・厚さの計測値に集中傾向の認められるものはI b・II bとI cで、前者は1.4×1.3×0.3cm、後者は1.15×1.15×0.2cmの大きさを製作の基準の一つにしている。欠損部位は、古い欠損面を持つもののみを対象にすると、先端部のみ50点、片脚のみ56点、両脚のみ17点、先端部と片脚86点、先端部と両脚55点である。

#### 石鐵未製品（306~308）

本遺跡では、石鐵の未製品が251点出土している。石材は黒曜石が84%で圧倒的に多い。未製品の加工状態を見ると、ここでの石鐵の製作には概して2種類の方法がある。一つは剥片を素材として縁辺から剥離調整を加えるもの（307・308）、もう一つは扁平な厚さ5mmほどの原礫に直接剥離調整を加えるものである（306）。前者に相当するものが224点、後者が

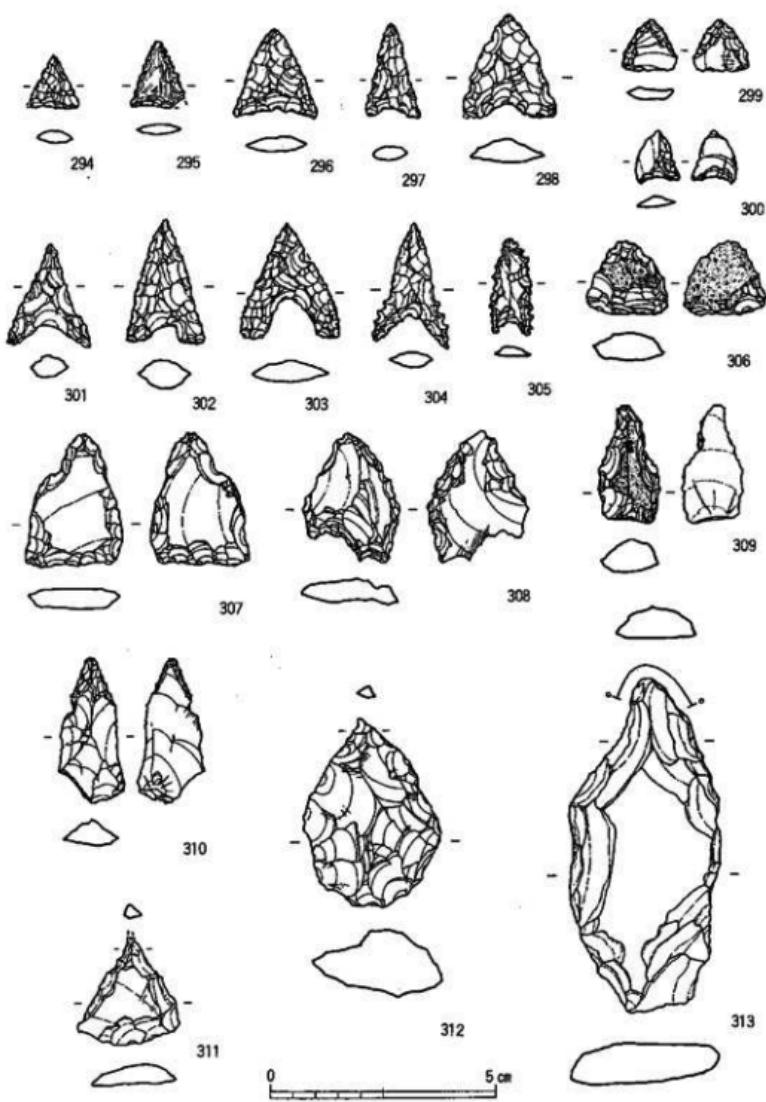


圖57 石器実測図 (4/5)

点出土している。308は素材が比較的厚いにもかかわらず平坦剥離による器厚調整を行なわずに左右両辺に刃溝し的な加工を施して形状調整を行なっている。このような一見旧石器的な加工を施されたものは他に2点存在する。

石鎚未製品には素材に加工を加え始めたものから完成品に近いものまで様々あるが、それぞれどの型類の石鎚に属するものは未分類である。

#### 尖頭器（312・313）

尖頭器10点は台地南半に散在して出土したが、うち3点はE11グリッド内出土である。尖頭器の形態を見ると、完形品に、三角形の胴部に丸みのある基部を持った水滴状とも言うべきものが2点と、これを幅広に丸くしたような形態で先端が尖るもの（312）2点がある。欠損により全体の形態が不明のものに両側縁から抉入加工を施した茎状の基部1点、三角形の先端部片2点があり、原礫に調整加工を施した未製品が2点出土している。313は当初石槍として分類していたものであるが、先端部に使用による摩耗が観察されたことから他の器種であることが判明した。石槍の転用品の可能性もあるが、ここでは彫器的あるいは石錐的に用いられた尖頭器として仮に分類している。実体顕微鏡により主として横方向、一部縦方向の使用痕が観察される。

#### 石槍

石槍は3点出土し、丘陵最先端部のB13・14、丘陵中央のF7グリッドに一点ずつ出土している。うち1点は頁岩製のやや幅の広い木葉形の扁平なもの（最大長7.2×最大幅3.2cm）で、この他、安山岩の縦長剥片に縁辺から調整加工を施している未製品1点（同5.3×3.2cm）、細型の柳葉形と考えられるものの破片（現存2.7×1.8cm）1点がある。

#### 石錐（309～311）

石錐は、B13、D9、E8の各グリッドから1点ずつ計3点が出土している。うち1点はつまみ部の破片で姫島産黒曜石製である。他の2点は、石鎚に形態がよく似る三角形のもの（311）と縦長剥片の打面側を基部にして背面縁辺に加工を施したもの（309）である。後者は素材背面に自然面を残すが、腹面も風化が著しいことから剥片状の原礫か製作時以前の風化した剥片を用いたことも考えられる。石錐の未製品と考えられるものが3点あるが（310）、いま一つ確証に欠け、石鎚未製品である可能性を否定できない。

#### 石匙（314～317）

石匙は総数21点で、その分布は、D8・E7で3点ずつ出土している他は丘陵南半部にまんべんなく散在している。形態により横型13点と縦型5点に二分類できる。さらに横型は、つまみ部が中央にあり、その主軸が刃部に対して直角に近い方向になるもの 点（314）と、つまみ部が片方に寄った位置にあり、その主軸が刃部に対して斜方向になるもの 点（316）に分けられる。また、縦型は、縦長剥片の打面側に抉りを入れてつまみ部とし、縁辺に刃部

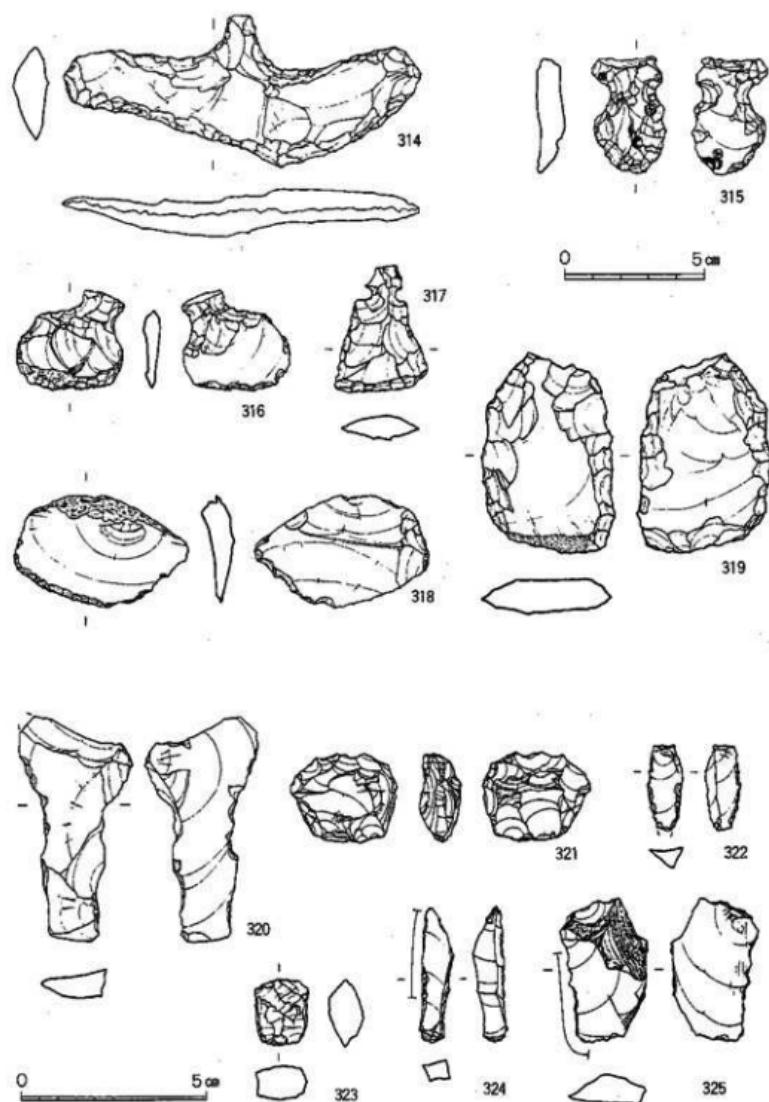


図58 石器実測図 (1/2), (2/3)

を作り出したもの 3 点 (315) と、本体の形態が方形を呈するもの 3 点 (317) に分けられる。これらの他、本体が三角形を呈しつまみ部が最短辺につく縦型と横型の中間的なもの 2 点がある。残る 1 点は破片である。

#### スクレイパー (318・319・322)

スクレイパーは調査区全域に散在しており、44点中 8 点は V 層出土である。刃部加工の位置により分類し、各点数を示すと、剥片の一辺に加工したもの 13 点、木葉形の横長剥片の打面を除く縁辺に加工したもの (318) 2 点、相対する二縁辺に加工したもの (319) 3 点、打面以外の三縁辺に加工したもの 3 点、刃部を抉入状に内弯させたもの 5 点、ラウンドスクレーパー 2 点、小型の縦長剥片の両縁辺に加工したもの 1 点 (322) である。322は尖頭器の可能性もある。以上の他は破片または未製品である。

#### 抉入石器 (320)

抉入石器は、丘陵南部に散在して 5 点出土した。局部的な抉入加工の位置は剥片縁辺の両側にあるもの (320) 2 点と片側のみにあるもの 3 点がある。

#### 楔形石器 (321・323・324)

楔形石器は 11 点出土し、丘陵最南部の B～C-12-13、C14、D13 の各グリッドから 1 点ずつ、D11 で 2 点出土している他は散在している。加工の状態により次の 3 つに分類できる。I は上下左右に刃部を持つもの (321) で 3 点ある。II は上下のみ刃部があり断面が紡錘形を呈するもの (323) で、チャート製の 2 点がこれに属する。III は適当な大きさの原礫に簡単な加工を加えて刃部を設けたものや原礫自然面を背面に持つ剥片をそのまま利用しているもので、前者が 2 点、後者が 3 点ある。長さは 1.6～2.5cm である。以上の他、幅狭で上下の刃部の方向が直交するもの 1 点 (長さ 2.4、幅 0.7cm) がある。なお、使用時の衝撃による破片を刃器として再利用した「使用痕のある剥片」が 1 点 (324) ある。

#### 打製石斧 (326)

打製石斧は完形品の出土を見ず、小型石斧の未製品 1 点 (326)、未製品または破片と考えられるもの 1 点、破片 3 点の計 5 点が出土したのみである。石材はいずれも頁岩である。

#### 磨製石斧 (329・330)

2 点のみで、329は古墳時代の包含層Ⅲa 層から、330は S A12 で古墳時代の土器とともに出土した。いずれも形態から縄文時代の遺物である。

#### 環状石斧 (327)

1 点のみ B14 グリッド IV 層で出土した。粗粒砂岩製で、敲打と研磨により丁寧に作られている。刃部は随所に使用による刃こぼれがあり、右半は欠損しているので不明だが、左縁中位の表側は特に使用された部分である。

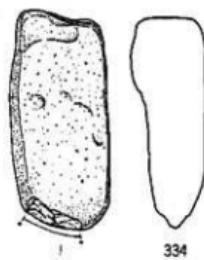
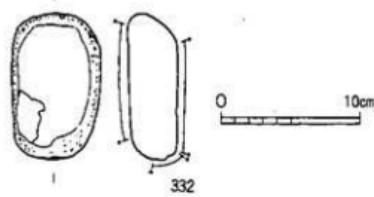
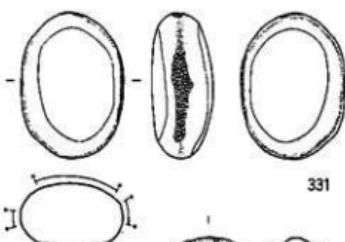
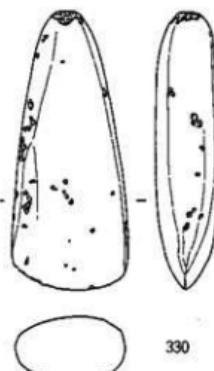
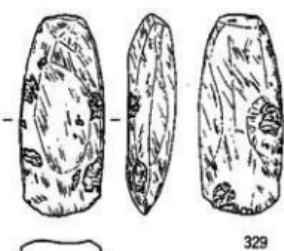
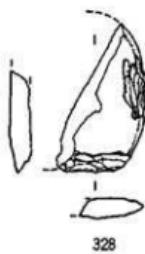
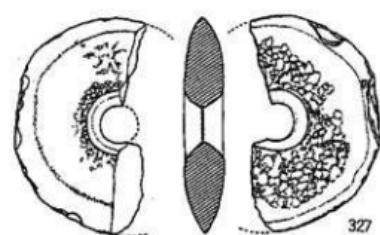
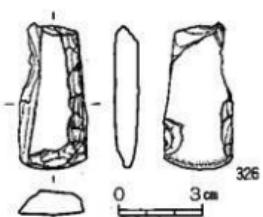


図59 石器実測図 (1/2), (1/3), (1/4)

### 礫器 (328)

1点のみB12グリッドで出土した。極細粒砂岩の扁平な円礫の一端に刃部をもうけ、側縁にも加工したもので、左半を欠損している。

### 磨石・敲石・凹み石 (331-334)

磨石は丘陵南半緩斜面に散在しているが、とくにD11-13、C12に集中しており、この地点だけで15点を数える。総数20点中、9点は敲打具の機能を合わせ持ったものである。

完形品の計測値をみると、最大長9.5-11cm、最大幅7-9cm、重さ400-650gの範囲に集中しており、これが手に握りて使用するのに適した大きさであったと思われる。ほとんどが椭円状の円礫を用いたもの(331)だが、方形を呈する礫を用いたもの(332)が2点ある。本遺跡では磨石に対応する石皿や台石は出土していない。ただ、散礫中にかなり大型の扁平な礫が数点出土しており、これが台石として使用された可能性はあるが、石器と確認できるほどの使用の痕跡がないので断定できない。

敲石は3点出土した。いずれも丸みのある礫の一端を使用している。334は長方形を呈する礫を用いている。他の2点は一部を欠くが完形復元時の重さは約850gと約700gと推定される。

凹み石(333)は1点のみ出土している。凝灰岩のややいびつな円礫を使用している。

### 異形石器 (図版26)

特定の名称を与えない石器が3点出土している。石鎚と同様に脚を持つが、先端部が尖らずに整状に平らになっているもの2点と、一見石鎚の製作中途で失敗したもののように見えるが、よく観察すると意図的に抉り部を作り出しているとわかるもの1点である。いずれも用途が判然としない。

### 不定形石器 (324-325・335-338)

ここでいう不定形の石器とは、明確な刃部加工をともなうスクレイパーや抉入石器を除外した狭義の不定形石器、すなわち剥片の鋭利な縁辺を刃器として利用したものである。使用痕のある剥片(324-325)90点、使用痕のある石核1点(338)、剥片の側縁を加工して整形し、打面と反対側の縁辺をそのまま刃部にしたスクレイパー的なもの1点(335)がこれに含まれる。石器縁辺に小剥離が連続的にまたは刃こぼれ状に観察されるものを使用痕と認定したが、新しい剥離との判別は、肉眼または実体顕微鏡により剥離面の光沢を観察して行なった。どちらとも判別できないものは剥片・碎片とした。また、使用痕のある剥片と判断したものの中にはかなり小さい剥片も含まれる。それらの剥離が土中の移動による可能性もあり得るが、判別是不可能である。

### 二次加工のある剥片 (339)

ここでいう二次加工のある剥片とは、剥片に二次的な加工を加えているが、道具としての

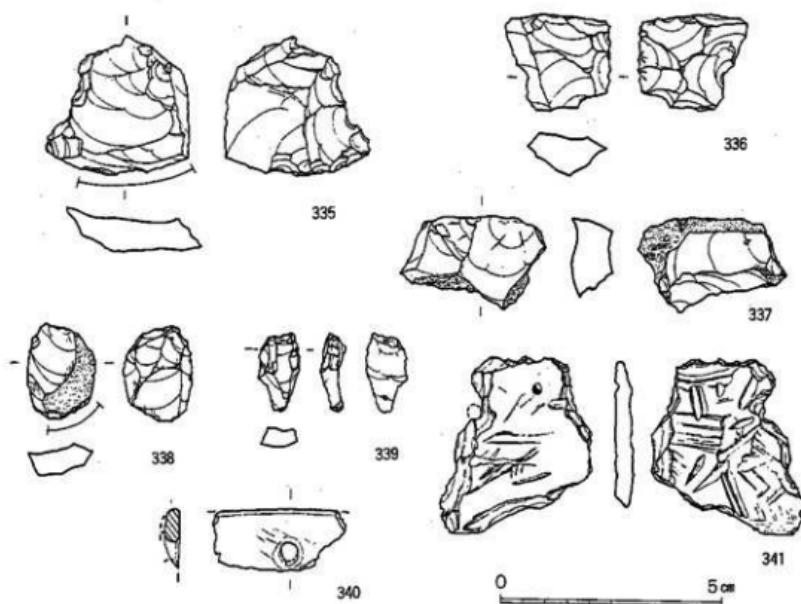


図60 石器実測図 (2/3)

石器とは認定しがたく、石器未製品とも断定できないものである。加工状態を見ると、剥片縁辺に小剝離を加えた刃部加工的なものや、剥片周囲に形状調整的に剝離を加えたものがあるが、どれも製作者の明確な意図が捉えにくい。中には刃潰し的な加工を施したもの（339）が2点あるが、こうした剝離の状態は本遺跡の石器類には散見されるので、ナイフ型石器と断定するには躊躇してここに分類した。

#### 石核（337、図版26）

石核290点中223点は、形状調整や打面調整を行なわずに直接原礫から素材剥片を剥出していいるものである。原石Ⅰ類（原石の項参照）を石核としているものには、ただ二分割しただけといったものも見受けられる。337は原石Ⅱ類の平坦面をそのまま打面として利用している。次項の三種の遺物との境界的なものもあるが、石礫の素材として利用可能な大きさの剥片を一片以上剥出しているものは石核とみなした。

### 石核的加工のある石器（336）・複数剥離のある原礫・単数剥離のある原礫

この三種は、剥出された片が小さすぎて、石器素材を獲得するための石核には分類できないものである。「石核的加工のある石器」は、加工面に囲まれて原石・片のどちらを利用したか不明確である。「複数剥離のある原礫」は、原礫に数度の加工を施しているもので、随所に自然面を残す。石核的加工のある石器につながるものか、石核として利用する前段階のものなのか不明である。両者の加工は恣意的に行なわれており、石器の未製品としても分類できない。「単数剥離のある原礫」は原礫に一度だけ人為的な剥離を加えたもので、この後どのような加工がなされるはずだったのか不明である。

### 原石（原礫）（図版26）

原石は、チャート1点、赤色珪岩2点の他はすべて黒曜石で、1,253点とかなり多数出土している。黒曜石の原石は、形状や風化面の状態により数種に分けられるが、最も多數の多い二種をI・II類とした。I類は自然摩耗風化面に開まれた球状～多面体的な原礫で862点、II類は自然風化面に開まれた原礫で286点出土している。I類は鹿児島県の桑ノ木津留産の可能性が極めて高く、II類も同地産と推定されるが、その他については分類中途で産地には言及できない。

### 転石

ここで転石と呼ぶものは、一見石核のようだが複数の打点のない「割れ」面を持ち全体に軽い摩耗が見られるもので、原礫や石塊が転落や土の移動による連続的な衝撃で割れを生じたものと考えられる。ほとんどが黒曜石である。丘陵南半にまんべんなく出土している。

### 剥片・碎片

剥片・碎片には、石器素材になるもの、調整加工時に剥出したもの、人為的でない衝撃により割れた石片等があるが、これらを確実に分別する方法がないので一括した。

### 風化摩耗剥片または原礫

黒曜石原石I類の中には、とうてい石器材料として役立ちそうにない、かなり小さいものが混在する。採取時または入手時に意図的にそのようなものも含めたのか、やむなく混入してしまうような採集方法をとっているのか不明であるが、こうした事実から無視できないのが著しく摩耗した小剥片状の黒曜石塊で、70点出土している。剥片状だが縦線やリングは摩耗し、どの面にも原礫同様ぬめり感のある風化被膜がある。これらは現時点では原礫なのか剥片が摩耗・風化したものなのか判別に迷うので、分類保留分として一括している。

以上縄文時代の石器について報告したが、他に、人為的にこの地に運び込まれたのは確かであるが石器と判断できないものとして、円礫の破片で剥片の可能性のあるもの、磨石に用いられたと同様の円礫の破片、台石として使用された可能性のある扁平な角礫・円礫、人為的か否か判断の難しい割れ面のある礫、等がある。

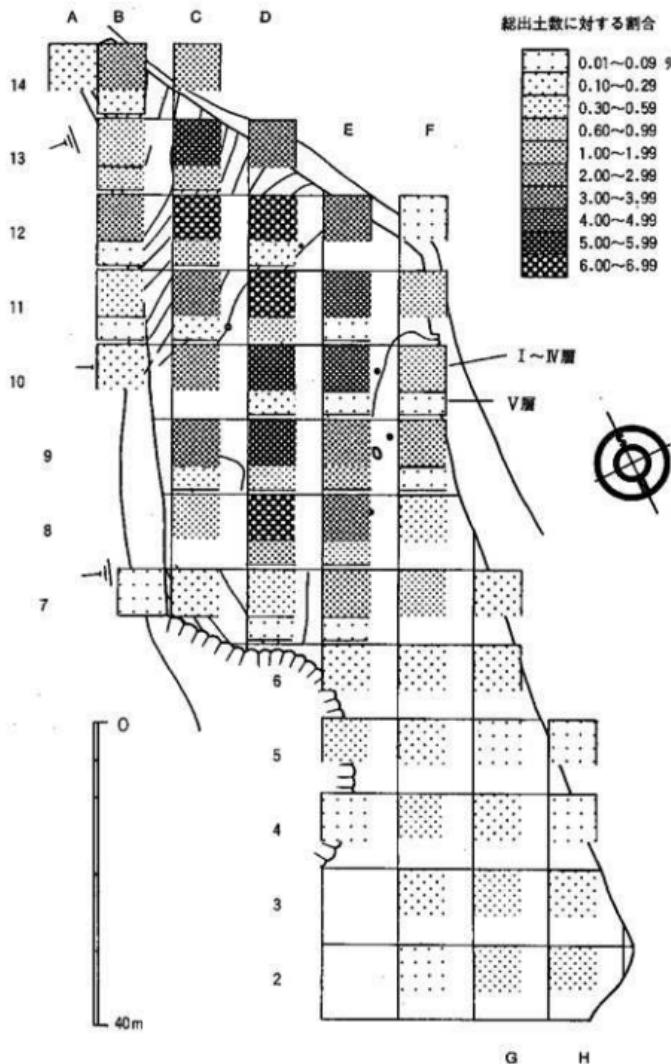


図61 縄文時代の石器の分布

なお、出土石器中、加工状態や形状から弥生時代の石包丁の一部には間違いないと思われる石製品が2点ある(図60 340・341)。しかし、本遺跡では他に弥生時代と特定できる土器等の遺物が出土していないことから、便宜上、本書では別節を設げずにこの項で取り扱うこととした。この2点の石材はともに石包丁によく用いられる緑灰色の頁岩である。340は穿孔のある石包丁上部の破片で裏側表面を欠損している。341は石包丁またはその未製品の破片に研磨と穿孔を加えて別の製品にしようとしたもので、加工は途中で放棄されている。左下裏面に刃部が残り、右側縁の抉りは石包丁抉り部に相当すると思われる。以上2点は表15の計数には加えていない。

No.	器種	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
294	石錐	III a	1.19	(1.10)	0.24	(0.20)	黒曜石
295	タ	SA10	1.46	(1.20)	0.22	(0.35)	タ
296	タ	IV	1.91	1.86	0.38	0.90	タ
297	タ	V	2.07	1.24	0.30	0.50	タ
298	タ	IV	2.32	2.06	0.52	1.60	タ
299	タ	SE 1	1.13	1.23	0.29	0.30	タ
300	タ	IV	1.17	1.10	0.25	0.20	タ
301	タ	III	2.29	1.88	0.49	0.95	安山岩
302	タ	SA 7	2.76	1.78	0.81	2.60	頁岩
303	タ	IV	2.57	2.22	0.53	1.60	黒曜石
304	タ	III a	2.72	1.73	0.35	0.90	安山岩
305	タ	II	2.16	1.02	0.30	0.50	チャート
306	石錐未製品	II	1.62	1.83	0.66	1.75	黒曜石
307	石錐未製品	-	3.00	2.17	0.48	4.00	チャート
308	タ	IV	2.93	2.26	0.51	3.15	黒曜石
309	石錐	III a	2.75	1.37	0.70	2.40	タ
310	石錐又は石錐の未製品	V	3.27	1.56	0.51	2.20	チャート
311	石錐	I	(2.44)	2.34	0.51	(2.45)	安山岩
312	尖頭器	IV	4.32	3.17	1.49	16.15	タ

表16 石器計測表

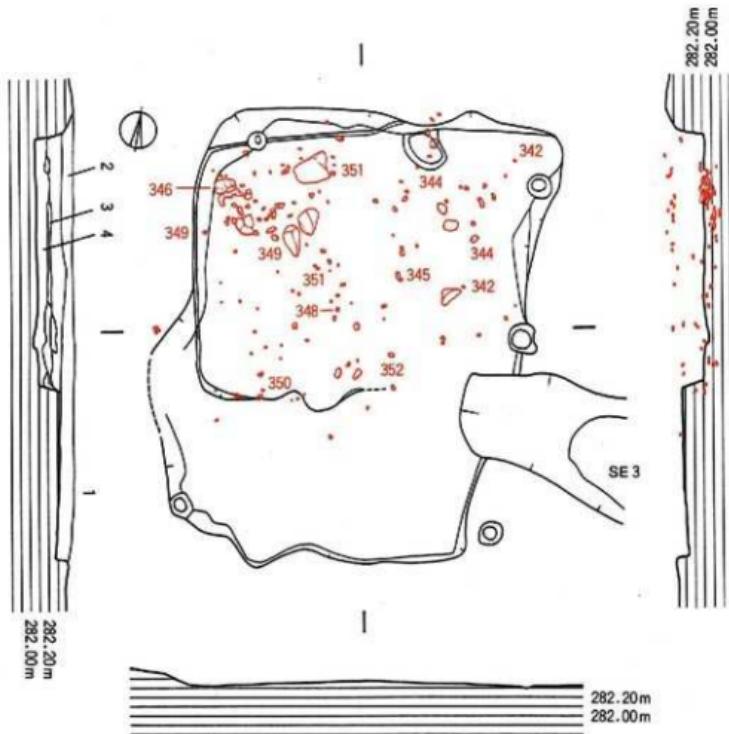
No.	器種	層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材
313	尖頭器	IV	7.51	3.46	0.89	29.95	頁岩
314	石匙	IV	12.75	5.40	1.40	61.45	安山岩
315	々	I	4.18	2.59	1.22	11.00	黒曜石
316	々	IV	3.58	3.82	0.83	9.55	チャート
317	々	IV	4.50	3.36	0.80	10.10	安山岩
318	スクレーパー	IV	4.09	6.25	1.11	23.85	々
319	々	V	7.02	5.10	1.41	63.0	々
320	挿入石器	I	6.16	3.13	0.83	11.05	々
321	楔形石器	II	2.52	2.97	1.10	7.30	黒曜石
322	スクレーパー	IV	(2.36)	0.95	0.55	(1.10)	頁岩
323	楔形石器	SA18	1.84	1.52	0.96	3.65	チャート
324	使用痕のある剝片	III	3.71	0.95	0.63	1.80	黒曜石
325	々	II	4.02	2.47	0.86	6.55	々
326	小型石斧未製品	IV	5.24	2.50	0.91	17.6	頁岩
327	環状石斧	IV	11.49	(6.79)	2.16	(221)	粗粒砂岩
328	穢器	IV	(8.54)	(4.21)	1.08	(46.3)	頁岩
329	磨製石斧	III a	11.12	4.82	2.63	220	々
330	々	SA12	15.15	6.29	3.55	486	砂岩
331	磨石	II	10.48	7.55	4.56	439	凝灰岩
332	々	IV	10.53	6.43	3.47	376	安山岩質溶岩
333	凹み石	SI 7	7.58	6.19	4.43	247	凝灰岩
334	敲石	III a	15.48	6.93	5.31	940	安山岩質溶岩
335	不定形石器	IV	3.30	3.24	0.67	9.15	チャート
336	石核の加工のあるもの	V	2.22	2.44	0.98	5.00	黒曜石
337	石核	V	2.21	3.23	1.00	6.70	々
338	使用痕のある石核	IV	2.23	1.54	0.73	2.60	々
339	二次加工のある剝片	V	1.80	0.94	0.42	0.70	々
340	石包丁	I	(1.34)	(2.96)	(0.35)	(1.75)	頁岩
341	石包丁再加工品	III a	3.72	3.72	0.47	8.40	々 (粘板岩)

表16 石器計測表

## 第4節 古墳時代の遺構と遺物

### (1) 概要

本遺跡の古墳時代の遺構は概して残存状況が良好とは言えない。その要因として、植林な



- |         |  |
|---------|--|
| SA 2 種土 | 1 IIIa層と同質<br>2 炭化物小粒を含む褐色土<br>3 二次床面の硬化土 黒褐<br>4 二次床面貼り土 Ahブロック 炭化物粒混 |
|---------|--|

図62 SA 2 (1/60)

どの人為的影響も無視できないが、加えて層位横転や斜面近くでの土壤流失など、自然の營力も大きく働いている。そのため、規模の正確に判明するものは少ない。遺構の覆土は、基本的にⅢa層に似た、アカホヤ火山灰の土壤化層で、遺構検出面はⅢb層（プライマリーな「アカホヤ」層）であった。おたがいの色調がそれほど違わない上に、該期の文化層の存在を当初予期していなかったこともあり、SA4を破壊して、Ⅲb層以下の調査を進めている最中にその存在に気がついた、という経緯がある。

## (2) 壇穴住居

計42基検出しており、ほとんどが方形プランとなる。柱穴は概して不明瞭で、しっかりした2本柱・4本柱と認定できる遺構は少ない。壁帶溝を有するものは皆無である。

分布状況を見ると、略北方向から南に向かって帯状に連なっている。もっともこれは、遺跡の立地する丘陵の幅の狭さに制約を受けてのことであろう。その中で、G・H-2・3区とE・F-5区、そしてD・E-8・9区付近が特に集中している箇所となる。B-10区からF-12区にかけてのびるSE1（中世期）の南側には見られない。

### SA2（図62）

D・E-9・10区で検出されている。東側の壁の一部はSE3により切られる。この住居は拡張した形跡がある。まず、V層まで掘り込んだ後、貼床を施して（「アカホヤ」ブロック・炭化物を含む）床面を形成し（一次床面）、その後、再びたたきしめ、さらに南側に拡張して床面（二次床面）を形成していく状況が看取できる。

平面規模は、一次床で3.0m×3.7m、二次床で4.8m×3.9m、検出面からの深さは一次床で50cm、二次床で15cmを測る。床面積は一次床面9.83m<sup>2</sup>、二次床面15.68m<sup>2</sup>である。主軸は一次床がN-10°-Eを、二次床が略N-S方向を示す。柱穴は、二次床の周囲に4基認められるが、いずれも深さ10~30cm程であり、主柱穴と認定するには、若干の疑問が残る。炉などの施設は検出されなかった。

一次床・二次床とともに、遺物は、北西隅の356~359の比較的まとまる個体を除いて、覆土中に散在している状況である。351などは図示した地点以外にも破片が数箇所に散在している。

### SA2出土遺物（図63~65）

壺（342）、盞（346）、高杯（347~350）、高杯杯部あるいは碗（343）、壺あるいは鉢・椀類（344）、高杯あるいは台付鉢の脚部（345）、などの器種が見られる。加えて、図は掲載していないが須恵器の胴部の小破片もある。

342は上げ底になる壺の底部。346については、接合はしないものの346Bとした破片が口縁部になると見られる。短くほほ直に開く口縁部のようである。外内面とも接合痕が明瞭に残る。345の外面の丹塗り剥落が著しく、図示した範囲より上にも施されていた可能性

もある。

351は丹塗りの高杯脚部を利用したふいごの羽口である。羽口には舷溝が融着しており、二次的火熱を受けた形跡が認められる。ちなみに、この堅穴住居からは他に鉄滓等の鍛冶関連の遺物は出土していない。352は袋部の断面が梯形となる铸造鉄斧である。二次床面直上より出土している。現存長は13.2cm、刃幅は欠損により不明である。袋部から刃先部にむかって撥状に広がる形状となり、袋頭部と側縁部に隆線を有する。

#### S A 3 (図66)

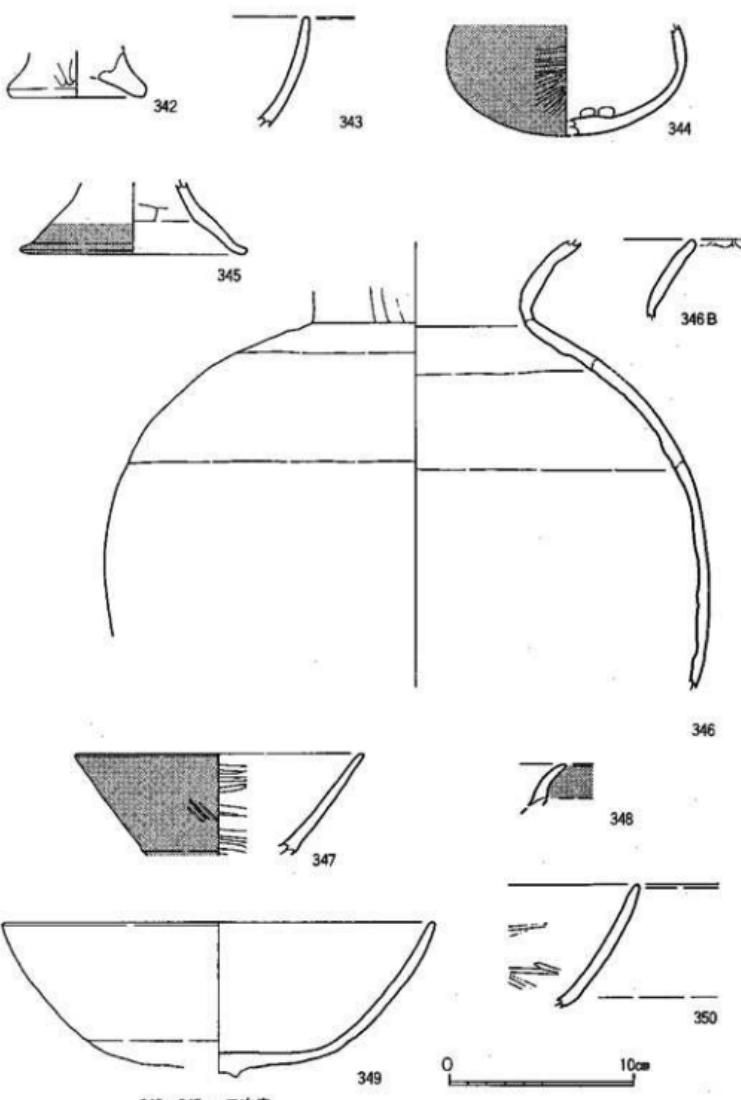
D-9区に位置する。北東隅は試掘坑により破壊されている。3.3m×4.5mのややいびつな形をしている。検出面からの深さは約20~30cm程度で、IV層まで掘り込まれる。覆土は上下2層に分層可能であり、特に上層には炭化物を多く含む。主柱穴は2本と推測されるが西側については特定できない。炉などは認められなかった。遺物は床面より若干浮いた状態で、まとまりなく出土している。住居廃絶後に流れ込んだと考えられる。

#### S A 3 出土遺物 (図67)

図示した土師器の甕(353~355)、高杯(356)の他、甕の口縁部や胴部などの小破片が若干量出土している。



挿入図版 2 S A 2 (二次床面)



342~345 … 二次床

346~352 … 一次床

図63 S A 2 出土土器実測図 (1/3)

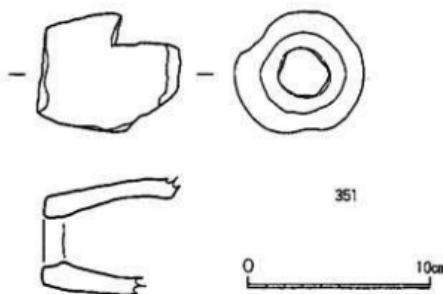


図64 出土金属加工製品実測図 (1/3)

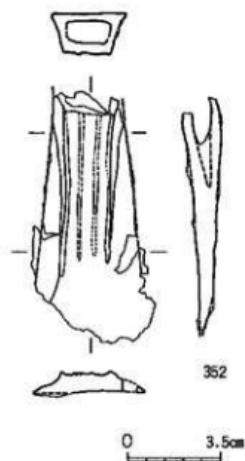


図65 出土鉄器実測図 (1/2)

353の突帯には、棒状の工具に巻き付けた布目の圧痕が刻目の中に残っている。突帯より下位にはススが付着している。354は刻目突帯を巡らす壺の口縁部であるが、こちらの方はヘラ工具による断面V字形の刻目である。外面はスス付着が著しい。355は胴下半部～底部で、ケズリによる成形がなされ、土中の砂粒

が移動する際にできる小孔が器面に見られる。356は丹塗りの高杯脚部である。

北西隅近くの床面上から塊状の赤色顔料が出土している。今回は分析を行わなかったが、おそらくベンガラであろう。

#### S A 22 (図66)

S A 3に切られている。残存状況は悪く、検出面からの深さは10cm弱である。西側は落ち込みが不明瞭になるため、規模は知り得ない。

この住居に伴う遺物は少ない。わずかに土師器の壺や丹塗りの高杯の小破片が見られる程度である。

#### S A 4 (図68)

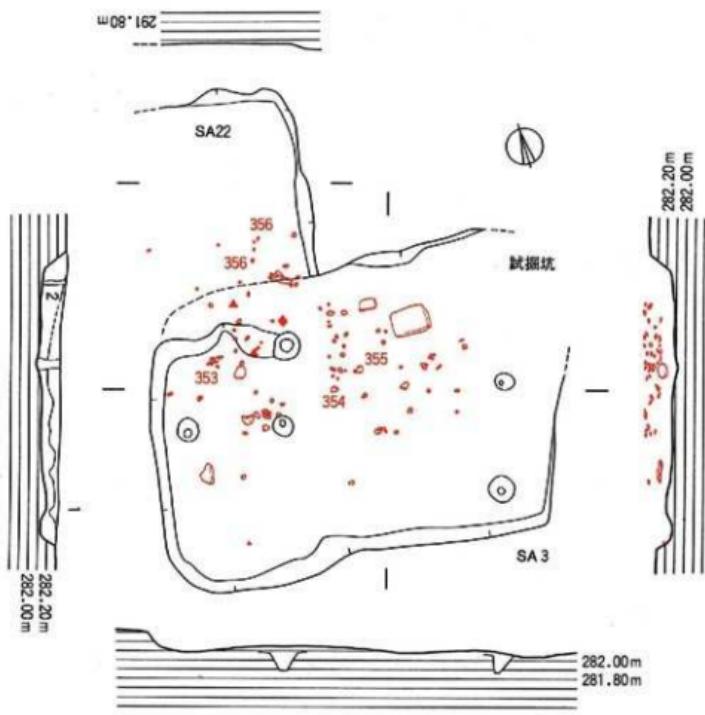
D-8区に位置する。前述の通り、かなりの部分を破壊してしまった。北東隅は時期不詳の小穴に切られる。推定規模は、一辺約3.5m程である。IV層まで掘り込んだ後、「アカホヤ」ブロックや炭化物

混土により貼床を形成しているようである。中央やや北東寄りには焼上面が見られる。

遺物は、364が床面から比較的まとまった状態で出土しているが、それ以外は覆土中からの出土である。368の砥石も床面から若干浮いた位置にあった。

#### S A 4 出土遺物 (図69・70)

土師器の壺(357～360)、高杯(361～363)、鉢(364)、椀(365)、須恵器の壺(366)、杯〔身〕(367)が見られる。図示した以外にも胴部・底部の破片が相当数あり、その中でも丹塗りを



SA3 稲土 1 楢 炭化物多く含む  
2 にぶい黄楢 1よりかたくしまる

図66 SA3・SA22 (1/60)

施すものが目立つ。

358の器形はむしろ鉢に近いが、それを含めて、甕には全てスヌが付着している。359は口縁部を内弯させ、三角突帯を巡らせる。高杯、榠は全て外面丹塗りとなる。高杯の杯部は内面上部も丹塗りを施す。

368は砂岩製の砥石である。図中の矢印は曲面の方向を示す。

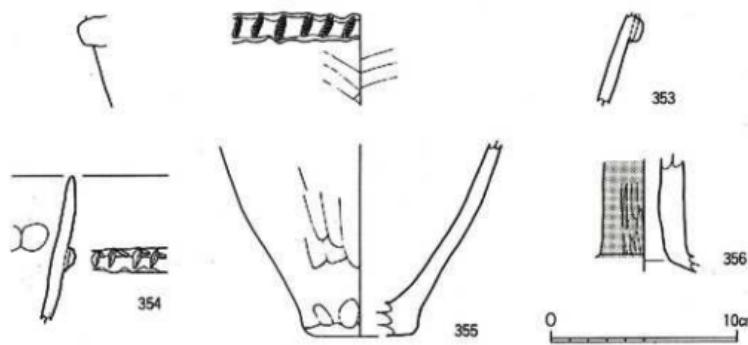


図67 SA 3 出土土器実測図 (1/3)

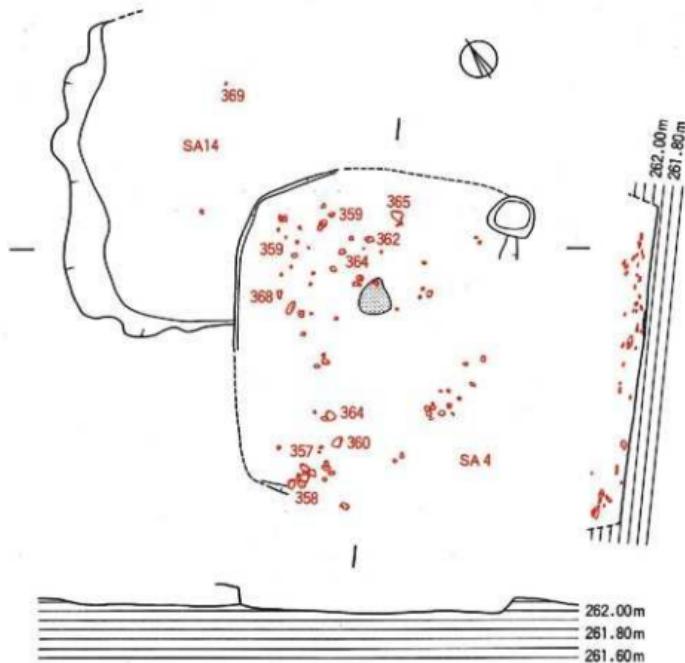


図68 SA 4・SA 14 (1/60)

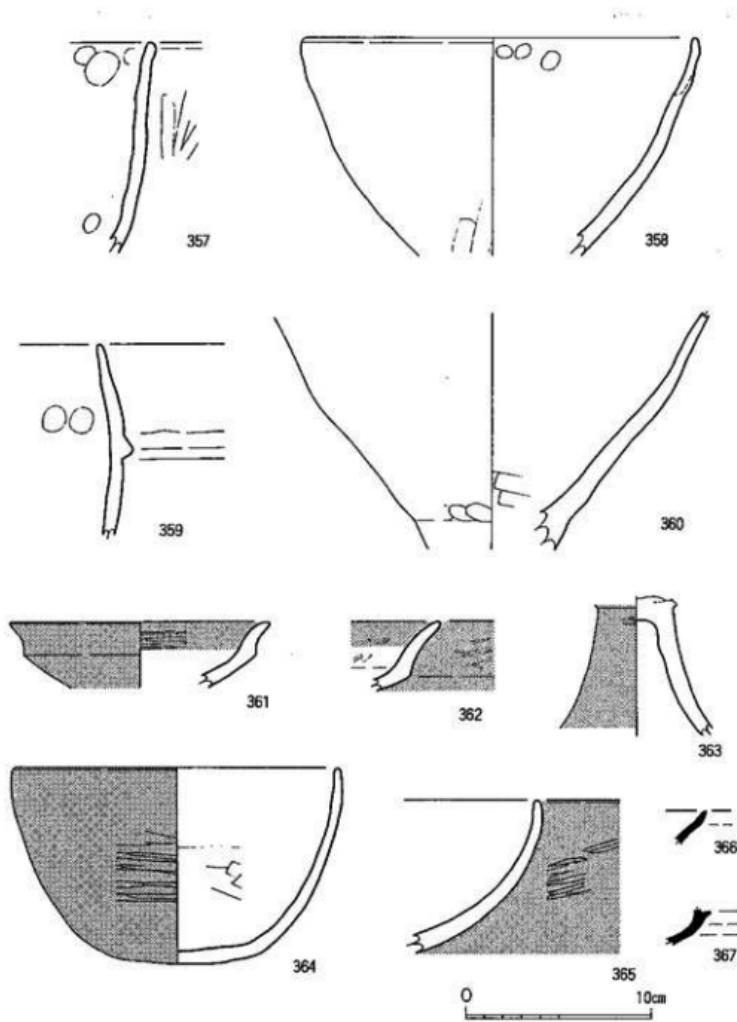


図69 SA 4 出土土器実測図 (1/3)

SA 14 (図68)

SA 4 に切られる。覆土がわずかに残るのみの遺存度の良くない遺構であり、北東側は

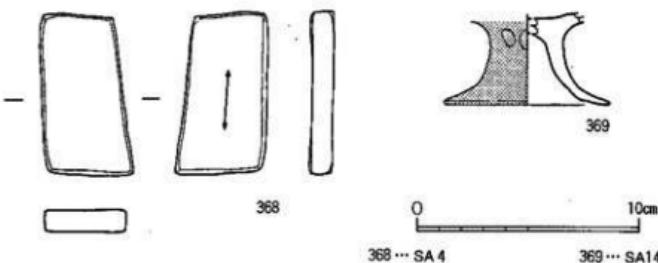


図70 SA4・SA14 出土石器・土器実測図 (1/3)

立ち上がりが不明瞭になっている。Ⅲb層まで掘り込まれており、SA4より若干レベルは高くなっている。判明する一辺の長さは3.5mである。主軸はSA4よりもやや北に偏すると見られる。SA4・SA14ともに柱穴は不明。

#### SA14出土遺物 (図70)

出土遺物は少ない。図示したもの以外は、小さな土器片が4点（うち丹塗り1点あり）のみである。369は小形の高杯か台付きの鉢であろう。外面に丹塗りを施す。

#### SA5 (図71)

C-8・9区で検出されている。残存状況は悪く、検出面からの深さは10cm程度である。北側はSA6に切られており、さらに南→南東側は削平や土壤の流失等の影響を受ける。そのため規模は判然としないが、およそ一辺の長さは4.3m程度と推測される。柱穴・炉とともに位置は不明である。

#### SA5出土遺物 (図72)

土器の総数は20点余で、図示した370以外では壺、丹塗りの高杯の小破片が見られる。ただし図化不能である。370は高杯で、おそらく大形品であろう。受部と口縁部の接合線が明瞭で、受部の端部の上面に口縁部粘土紐を繰いでいる様子が観察できる。外内面ともハケによる調整がなされる。

また、中央部付近の覆土中に粒状の赤色顔料が散在していた。床面より5cm程度浮いている位置にある。

#### SA6 (図71)

SA5を切っている。これもSA5同様、層位が乱れ等の要因により残存状況が悪くなっている。西側は10cm程度の壁高があるが、東側から南側にかけてはプランが全くわからない。

SA5・SA6とともにIV層まで掘り込まれている。床面に小土坑・小穴が4基あるが、その機能は不明である。

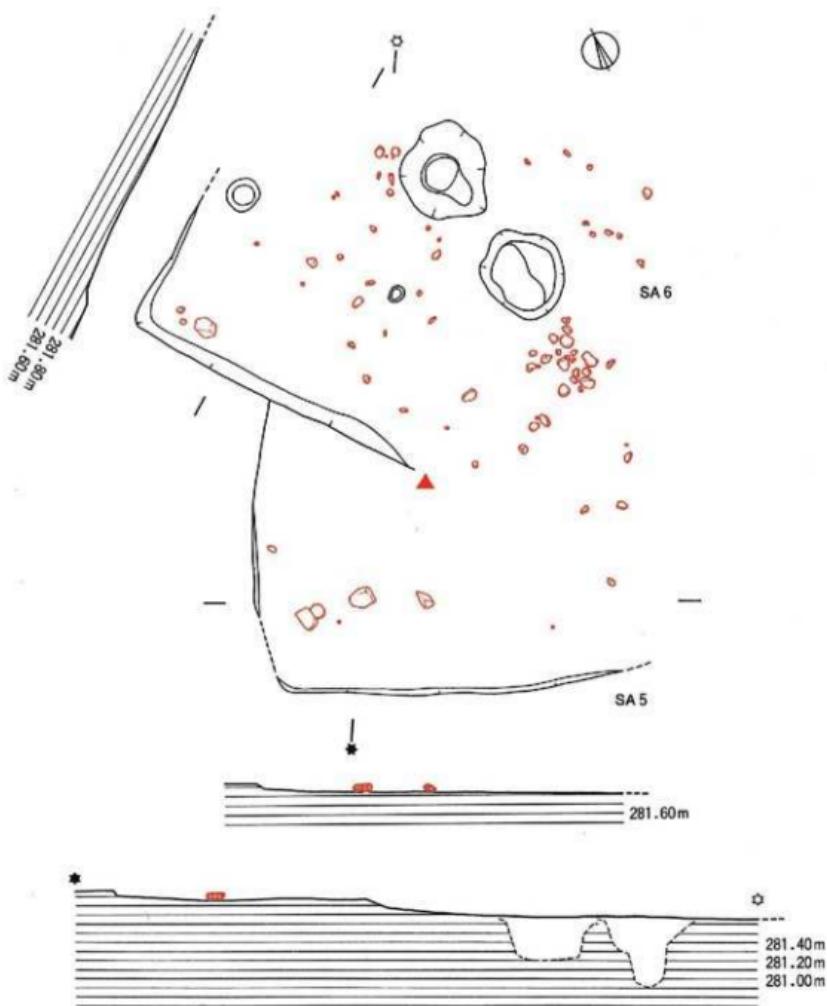


图71 SA 5 · SA 6 (1/60)

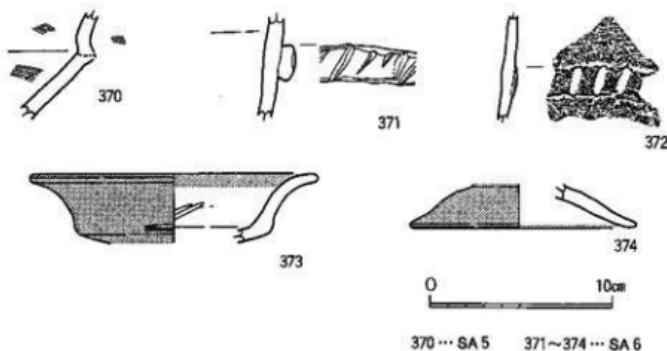


図72 SA 5・SA 6 出土土器実測図 (1/3)

#### SA 6 出土遺物 (図72)

図を掲載したもの以外に、丹塗りの高杯を含む土師器の小破片が20点弱出土している。

壺 (371・372) や高杯 (373・374) が見られる。壺はいずれも貼付突帯を巡らす。373は突帯貼り付け後のヨコナデが十分でないため、突帯の高さが高く、器面との接地面が狭くなり不安定な印象を与える。一方、372は突帯が平らに近くなる。壺に付く貼付突帯にはこの両者が認められる。374は丹塗り高杯の脚裾部で、脚柱部との接合面付近で割れている。

#### SA 7 (図73)

E-10区に位置する。西側は土層観察ベルトにかかり、結局未掘に終わった。東縁の一部が近～現代の掘り込みにより破壊されている。また、東側は層位の横転が見られ、壁の立ち上がりの明瞭でない部分がある。規模は、一辺約5.5mのやや大きめのものである。深さは検出面から約40cmを測る。検出面付近のレベルにも硬化面があり、あるいは2次的な床面が存在する可能性も考えられる。床面には小さなPitがあるが、主柱穴となり得るものは見られない。中央部には焼土面がある。

遺物は375以外は覆土中に浮いた状態での出土である。

#### SA 7 出土遺物 (図74)

土器片の数が多いが、小さなものがほとんどで、固化可能な個体は少ない。

土師器の壺 (375・376)、高杯 (377) や貼付突帯を巡らす壺などが認められる。375は小さな平底となる壺の底部。376は小形のもので、外面と口縁部内面を丹塗りする。377も外面

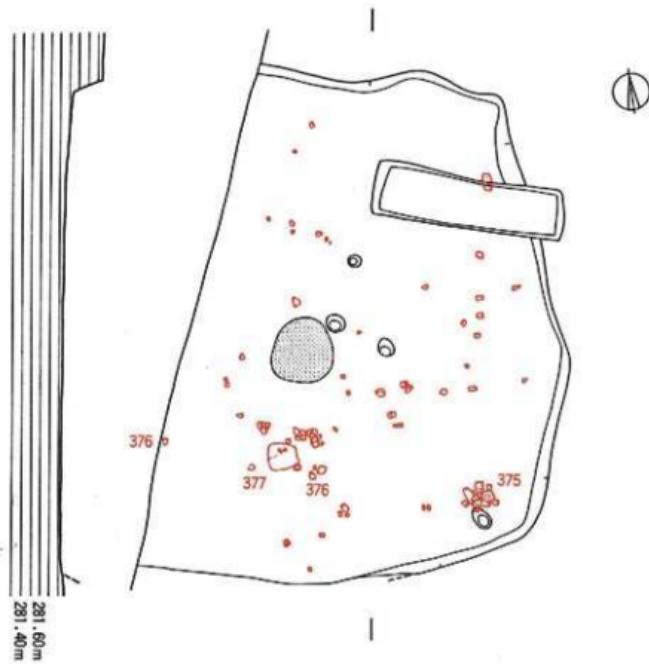


図73 SA 7 (1/60)

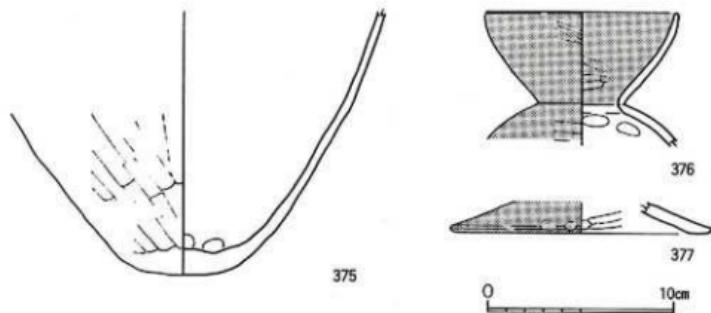


図74 SA 7 出土土器実測図 (1/3)

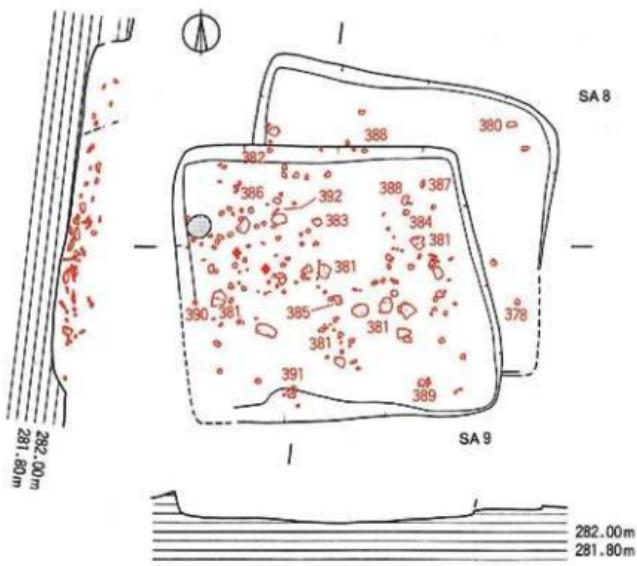


図75 SA 8・SA 9 (1/60)

に丹塗りを施す高杯脚裾部である。

#### SA 8 (図75)

D・E-7・8区に位置し、SA 9に切られる。一边は3.3m、検出面からの深さは北壁付近で40cm、東壁では10cm弱で、Ⅲb層まで掘り込まれる。柱穴、炉の位置は不明。遺物は、覆土中に土器の小破片が見られたのみであった。

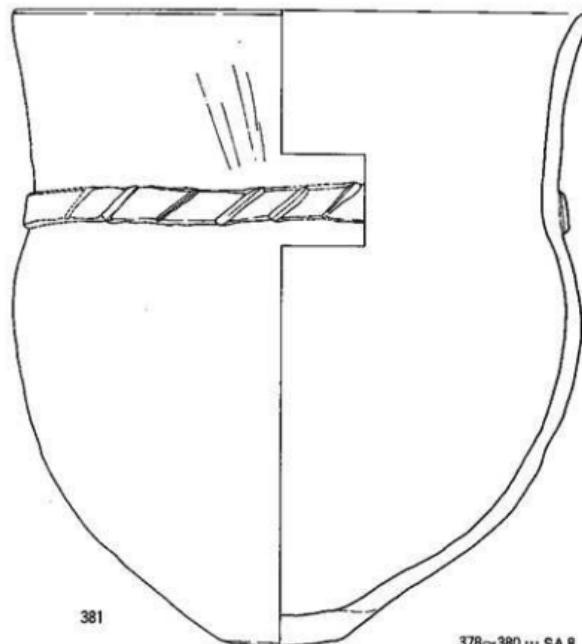
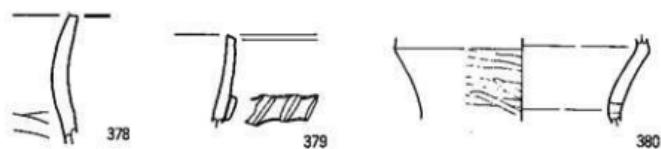
#### SA 8 出土遺物 (図75)

土師器の壺あるいは壺(378)、壺(379)、壺(380)の他に、胴部片(丹塗りのものを含む)が20点程出土している。

378は堅微な焼きで、口唇部がやや凹む。口縁部は外内面ともヨコナデする。380の、二重口縁状となる壺と同一個体である可能性もある。

#### SA 9 (図74)

3.0m×3.4mの正方形の住居である。検出面からの深さは20~30cmである。南西隅は近



378~380 … SA 8

381~384 … SA 9



図76 SA 8・SA 9 出土土器実測図 (1/3)

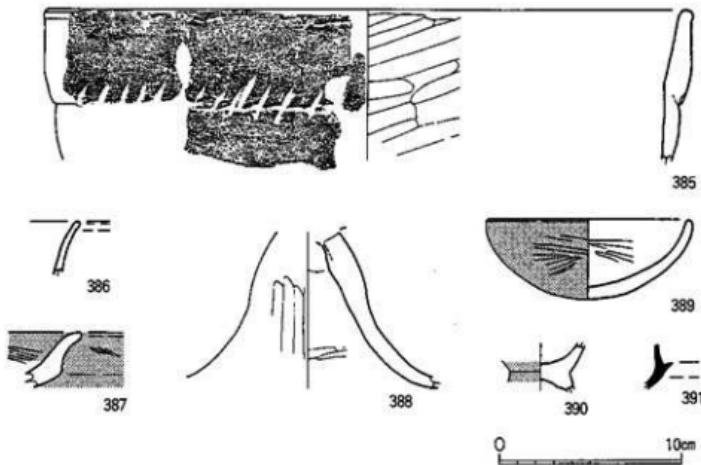


図77 S A 9 出土土器実測図 (1/3)

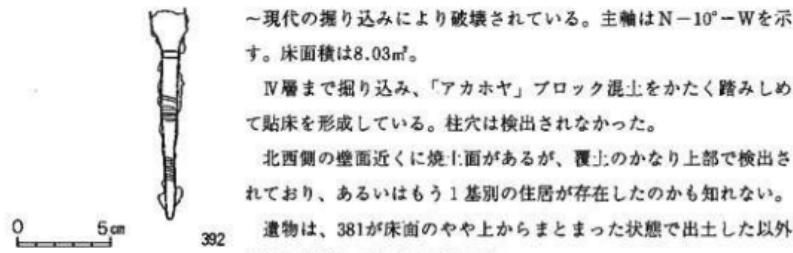


図78 出土鉄器実測図 (1/2) S A 9 出土遺物 (図76)

土師器の壺 (381～385)、壺 (386)、高杯 (387・388)、高杯あるいは台付鉢 (390)、碗 (389)、須恵器の杯 [身] (391)など。図示した以外にも、胴部破片を中心に多量の土器が出土している。

381は異形の壺で、外面で、ススの付着や二次的火熱を受けた痕跡は見られない。頭部で鈍く屈曲し、口縁部は間延びしている。底部は凸レンズ状の平底で、1枚の円盤で形成されている。385は口縁部下に段を付け、そこに刻みを施す。突帯の省略化か。

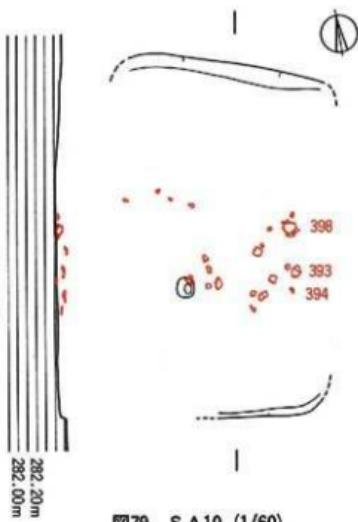


図79 S A10 (1/60)

392は主頭鐵と考えられる。  
残存長は11.2cm。茎部には矢  
柄を固定するための紐巻の痕  
跡が認められる。

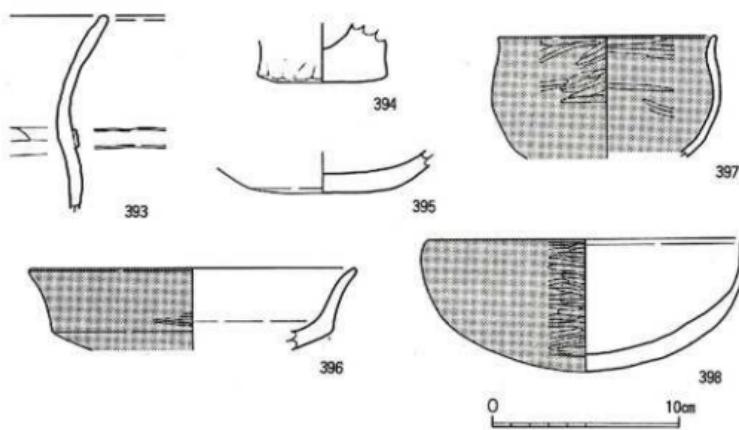


図80 S A10 出土土器実測図 (1/3)

#### S A10 (図79)

F-10・11区で検出されている。西側は試掘坑により破壊され、東側は層位の乱れにより壁の立ち上がりが不明となっている。一辺の長さは3.8m、検出面からの深さは10cm弱で、Ⅲ b層下部まで掘り込まれ、踏みかためた床面を形成する。柱穴ははっきりしない。遺物は398が床面から、他の多くはやや浮いた位置から出土している。

#### S A10出土遺物 (図80)

土師器の壺 (393・394)、壺 (395)、高杯 (396)、鉢 (397)、椀 (398) など。398は丹塗りの椀で外面にはススが付着している。その他にも胴部片が多く出土している。

#### S A11 (図81)

F-9区に位置する。削平が著しく、規模は判然としない。検出面からの深さは約10cmでⅢ b層下部まで掘り込まれる。床面で小穴が4基検出されている。ややいびつであるが、4本柱の主柱穴と考えられる。

遺物は床面上かやや浮いた位置から多く出土している。住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

#### S A11出土遺物 (図82)

土師器の壺 (399)、高杯 (400~402)、椀 (403・404) などの他、須恵器の壺の口縁部 (405) が見られる。丹塗りの胴部片の出土量が多い。

#### S A12 (図83)

F-8区で検出された。S A42と隣接しており、削平が著しいため不明瞭な点も多いが、S A42に切られると見ている。一辺の長さは3.7m、深さは検出面から10cm程度。Ⅲ b層下部まで掘り込まれる。柱穴は検出されなかった。

床面よりやや上のレベルから遺物が多量出土している。住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

#### S A12出土遺物 (図84~図86)

調査時に取り上げ番号を付したものだけで139点あり、その他夥しい量の小破片が出土している。土師器の壺 (406~416)、壺 (417~420)、高杯 (421~427)、椀 (428・430~433)、鉢 (429)、小型壺 (434~436)、台付鉢? (435) や、須恵器の小破片が見られる。

406・409は口縁部を肥厚させ、外面に段を形成し、刻みを施す。415は異形の壺で、外面にススが付着している。416も同様の器形を呈するが、壺の肩部の可能性もある。壺の底部は平底のものが多い。418は、415のような壺の底部かも知れない。420は丸底に近い。高杯は基本的に口縁部が外反し、受部との境に稜線を形成する。多くは425のように口縁部が短く立ち上がる。杯部と脚部の接合状況は421・425で観察することができる。杯部下面に脚支柱部を差し込んでいるようである。

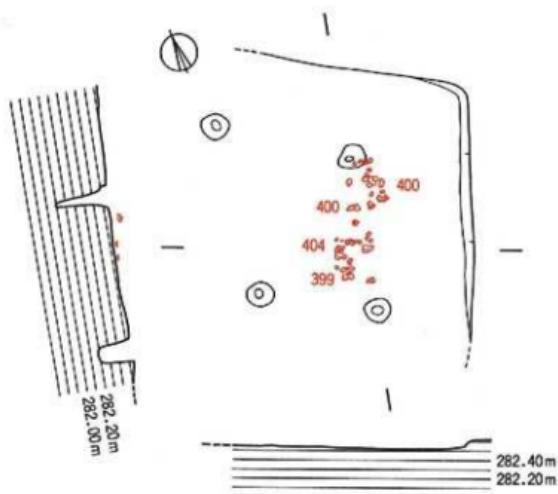


図81 S A11 (1/60)

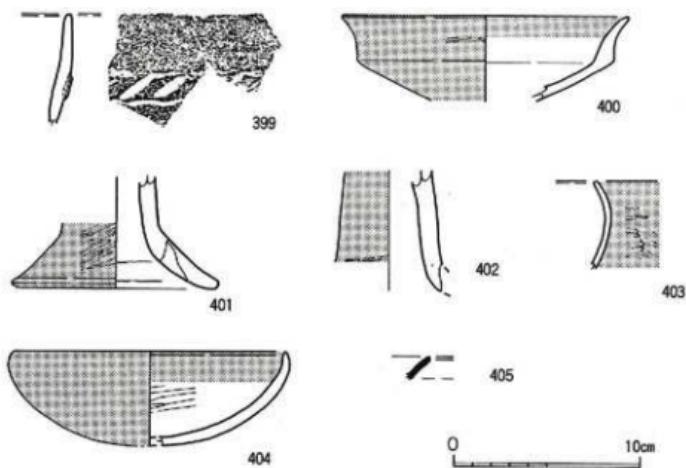


図82 S A11 出土土器実測図 (1/3)

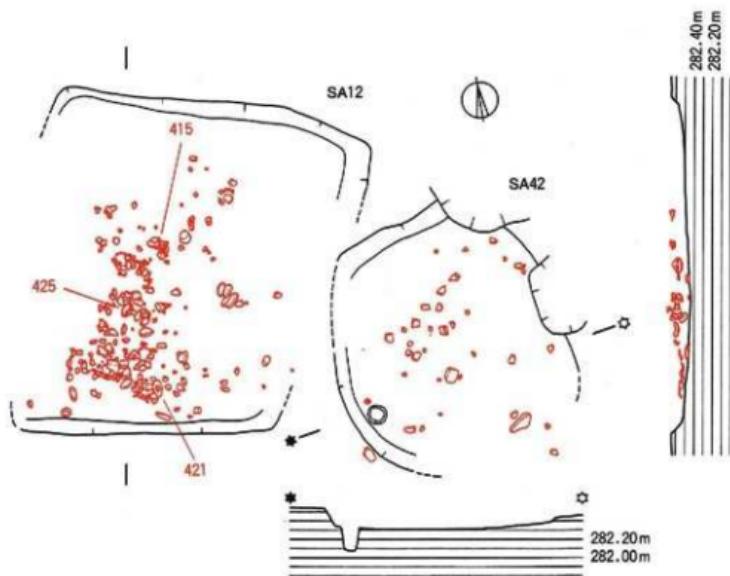


図83 SA12・SA42 (1/60)

#### SA42 (図83)

平面プランは橢円形を呈する。北側は後世の落ち込みに切られ、南側はプランが不明瞭になっている。径は2.6m程度である。主柱穴、炉などは確認できなかった。

#### SA42出土遺物 (図86)

小さな網部片のみである。土師器は壺 (437) の他、丹塗りの土器などがある。須恵器の杯〔身〕(438) も見受けられる。

#### SA13 (図87)

F-7区に位置する。層位の乱れにより平面プランがわかりにくい上に、北東部は後世の落ち込みの影響を受ける。検出面からの深さは約25cmを測る。床面は貼床がなされ、中央部には焼土面が見られる。主柱穴の位置は不明。

#### SA13出土遺物 (図88)

図示した壺 (439~441)、高杯 (442・443) を含めて、多量の土師器片が出土している。

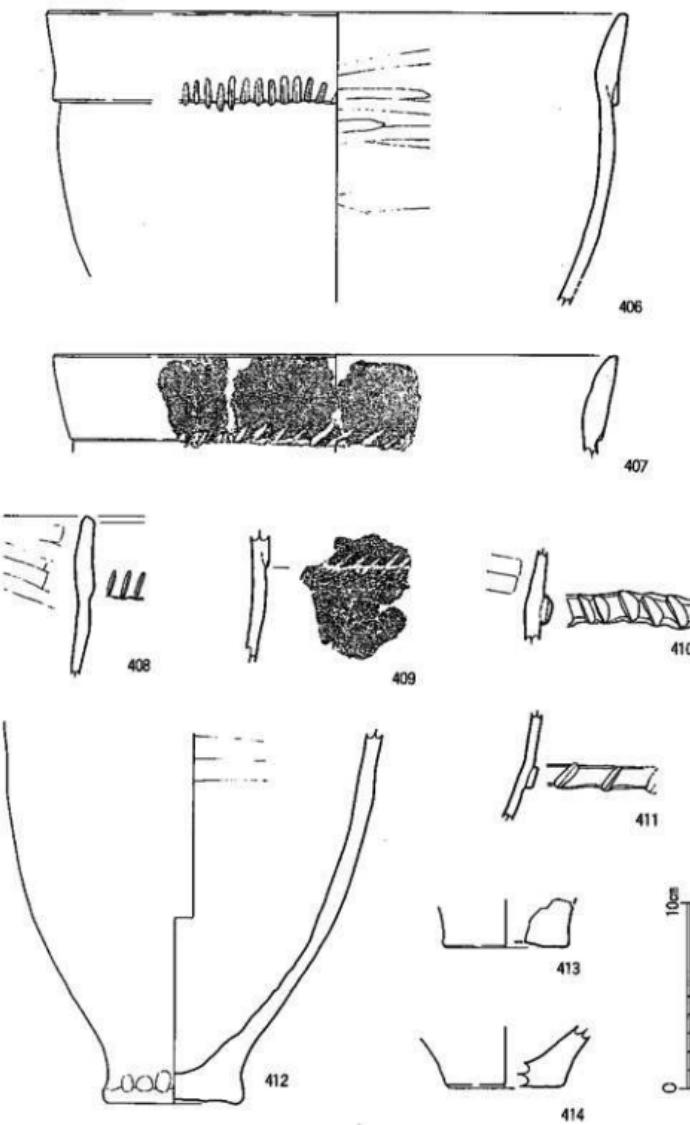


図84 SA12 出土土器実測図(1) (1/3)

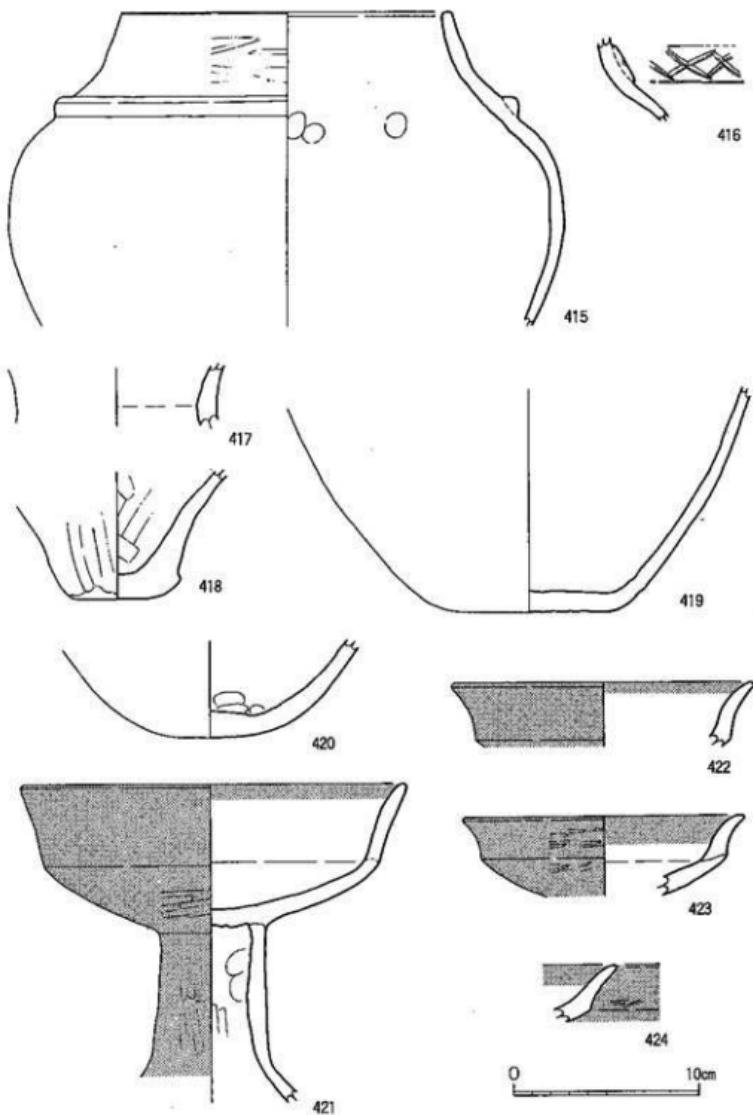


図85 S A12 出土土器実測図(2) (1/3)

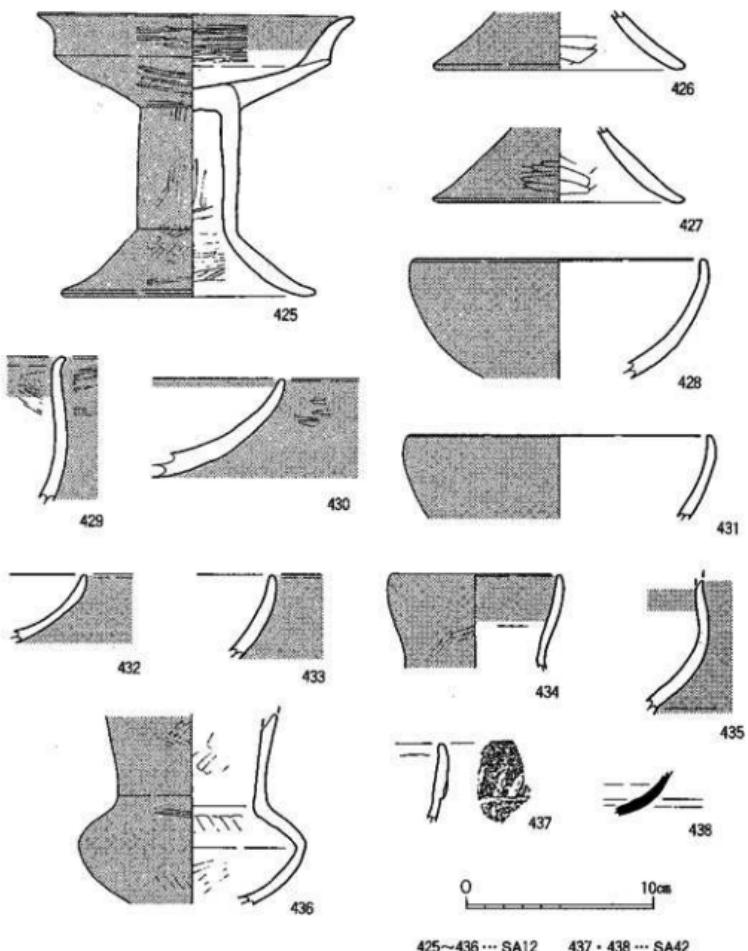


図86 SA12・SA42 出土土器実測図 (1/3)

439は本遺跡でよく見られる異形の甕である。400は堅緻な焼きで、口唇部をわずかに凹ませる。蓋の可能性もある。

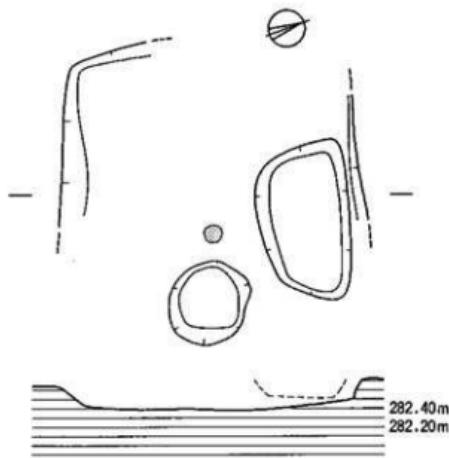


図87 SA 13 (1/60)

S A 15 (図89)  
E - 8区に位置する。  
北側は層位の乱れにより  
プランがはっきりしな  
い。南側は土坑・小穴と切  
り合う。IV層まで掘り込  
まれている。柱穴、炉な  
どは確認できなかった。  
S A 15出土遺物(図90)  
土師器の小破片が20点  
弱出土している。甕(444  
・445)、高杯(446)な  
どが見られる。

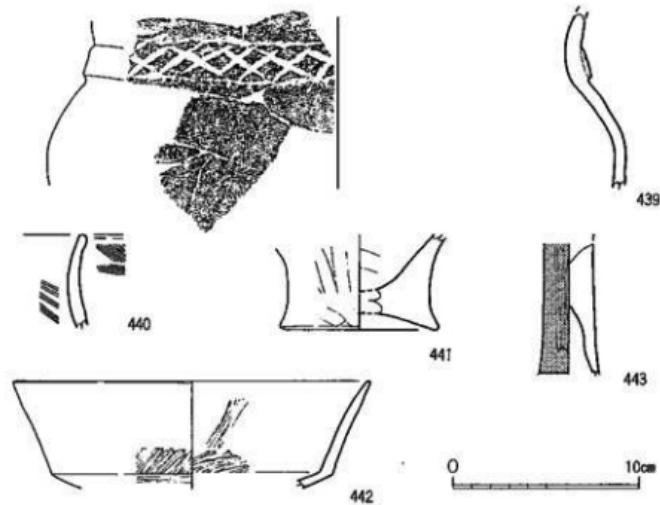


図88 SA 13 出土土器実測図 (1/3)

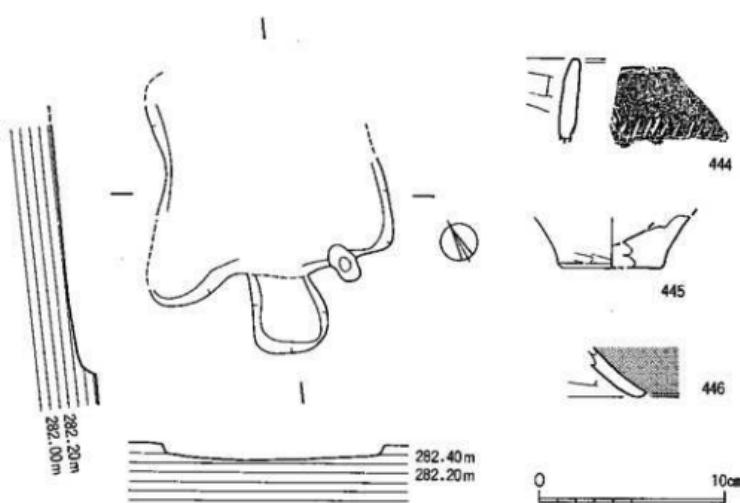


図89 SA15 (1/60)

図90 出土土器実測図 (1/3)

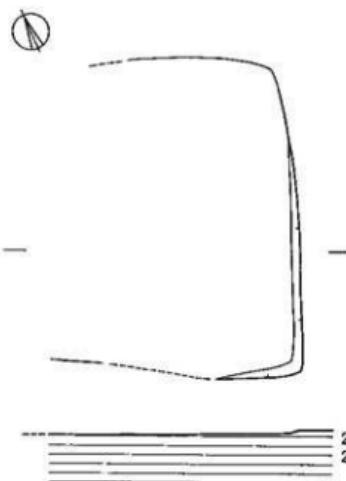


図91 SA16 (1/60)

#### SA16 (図91)

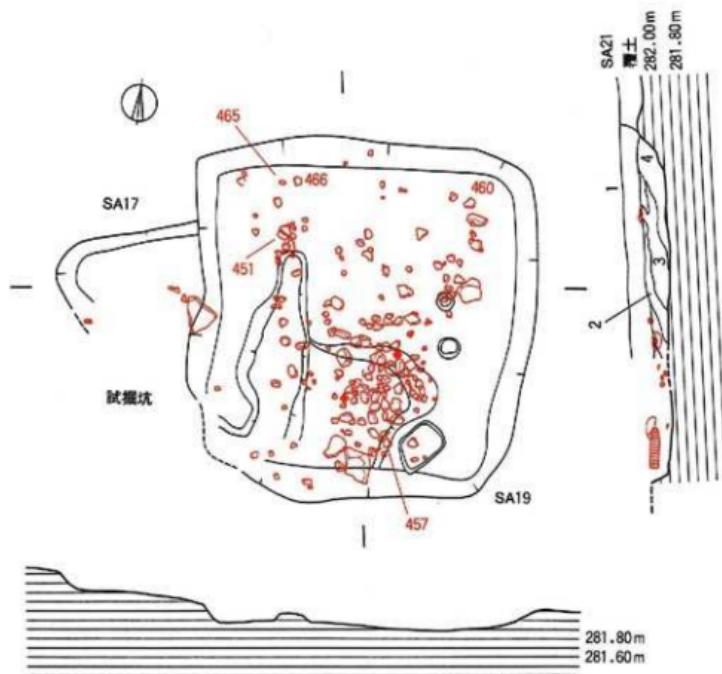
E-6・7区に位置する。小さな谷に面しているため上壤の流失が著しく、覆土がわずかに残るのみであった。この遺構に伴う遺物は皆無であった。

SA17(図92)

F-5区に位置し、SA19に切られる。南側は試掘時に破壊してしまった。よって、規模等の詳細は不明である。

SA17出土遺物(図93)

土師器の小破片が30点程出土している。甕(447・448)、椀(449)が見られる。



SA19覆土 1 にぶい黄褐色炭化物 Ahブロック混

2 1よりややかたく黒味強い

3 暗灰 炭化物多い

4 にぶい黄褐色 Ahブロック混 ややかたい

SA21覆土 にぶい黄褐色 SA19.1よりやや明度高い

図92 SA17・SA19 (1/60)

448は貼付突帯に「×」形の刻みを施す。

S A19 (図92)

E・F-5区にまたがる。南西隅は土層観察用ベルトにかかる。大きさは3.9m×3.7mで、検出面からの深さは30cmを測る。床面積は10.14m<sup>2</sup>。略N-S方向に主軸をとる。

基盤の礫層まで掘り込まれ、踏みかためた床面が形成される。床面から約10cm程浮いた位置に焼土・炭化物の集積箇所がある。図面では土盛り状に表現している。主柱穴たり得るPitは検出できなかった。

遺物はほとんどが覆土の上～中層から出土している。加えて、覆土中には礫を多く含む。これは、居住の掘り込みの際に上がってきた基盤の礫と推測される。

S A19出土遺物 (図93・94)

土器類の壺 (451～454)、壺 (455・458・459)、壺あるいは壺 (456)、長頸壺 (457)、高杯 (460～463)、小型壺 (464)、椀 (須恵器の模倣杯・465)、須恵器の杯 [壺] (466) が見られる。この他にも小破片が多量出土している。

壺は口縁部の形態 (外反あるいは内弯)、突帯の有無などの特徴から型式差を認めうる。451は突帯の一部に垂れ下がりが見られる。453は口縁部を肥厚させ、その下端部に刻みを施す。456は本遺跡に多い異形壺の底部か。462の高杯の杯部は椀状となるものである。

S A18 (図95)

F-4・5区で検出されている。東側はS E 5に切られている。一辺長4.7m、検出面からの深さは30～40cmを測る。主軸は略N-S方向を示す。基盤礫層の上端面まで掘り込まれ、床面が形成される。床面で10基の小穴を検出しておらず、うち2基が主柱穴になると推定している。

遺物のうち481と483の一部のみ床面から、他は全て覆土中から出土している。

S A18出土遺物 (図96・97)

床面上出土の481は須恵器の杯蓋の完形品である。外面は1/2程度回転ヘラ削りを施している。ろくろの回転方向は時計回りとなる。口縁部内面は段を形成している。櫛描波状文・列点文を施す壺 (482・483) も出土している。七輪器は壺 (467～469)、壺 (472)、高杯 (473・476)、台付鉢 (471)、椀 (477) 高杯あるいは椀 (478)、小型壺 (479・480)、ミニチュア台付鉢? (470) などが見られる。472は壺の可能性もある。480は算盤玉状の胴部を呈する小型壺である。

それら以外にも、壺の口縁部～胴部破片や丹塗りの高杯の破片が多量出土している。

S A21 (図95)

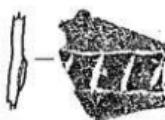
S A18に切られている。全体的に壁面が不明瞭で、しかも東側はS E 5に切られている。そのため規模は判然としない。



448

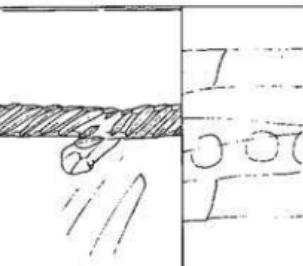


449

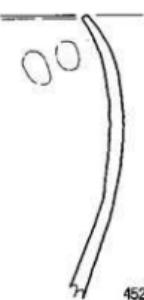


450

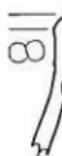
447~449 … SA17



451



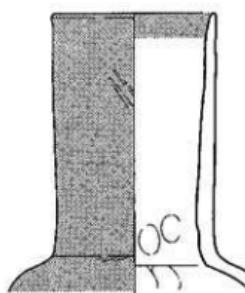
452



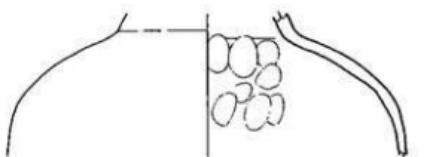
453



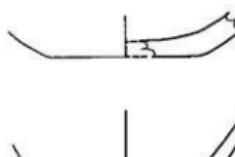
454



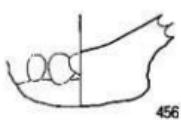
455



455



457



456

450~459 … SA19



10cm

図93 S A17・SA19 出土土器実測図 (1/3)

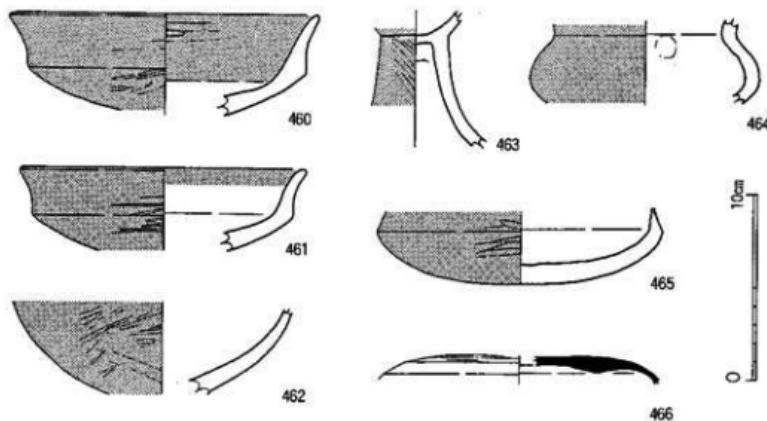


図94 S A19 出土土器実測図 (1/3)

V層～基盤疊層まで掘り込まれ床面が形成されるが、かたくなっている感じはない。柱穴等は検出されていない。

#### S A21出土遺物 (図97)

80点程出土しているが、土師器の小破片がほとんどである。

486は480同様、胴部が算盤玉状となる小型壺である。やはり外面は丹塗りとなる。

#### S A20

壁面の立ち上がりは確認できなかったが、遺物が集中し、わずかに遺構検出面が落ち込んでいることから遺構の番号を付した。S A17・S A19の南側のF-6区に位置する。遺物は土器の小破片が多い。丹塗りの碗などの土器片などが見られる。

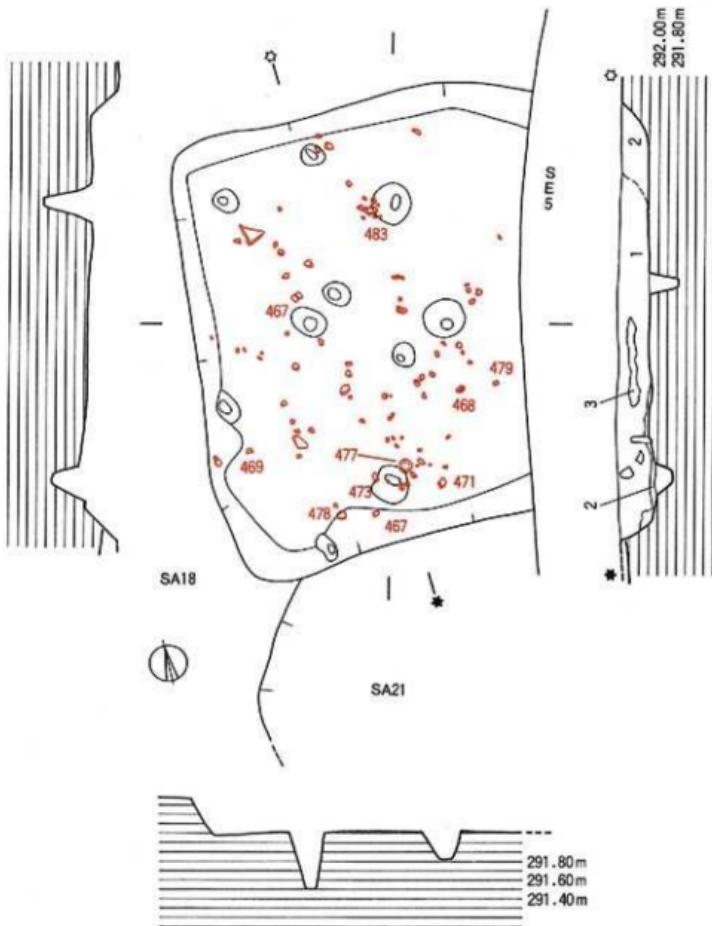
#### S A23

E-9区で、焼土面のみ検出されている。S A20同様、削平により壁面以上を失なった堅穴住居であると見られる。

#### S A24 (図78)

G・H-2区に位置する。最も多量に遺物の出土した堅穴住居である。ややいびつながらも一辺長3.8mの正方形を呈する。検出面からの深さは、最深部で40cmを測る。主軸はN-25°-Wを示す。IV層まで掘り込まれ、かたく踏みしめた床面が形成される。

構造的に興味深いのは、外周に平坦面を巡らしている点で、ベッド状と呼ぶべき施設であ



- SA18覆土    1 にぶい黄褐 炭化物多く混入  
               2 1と同質 炭化物より多い  
               3 1と同質 Ahブロック多く混入  
               4 1よりやや明度高い

図95 SA18・SA21 (1/60)

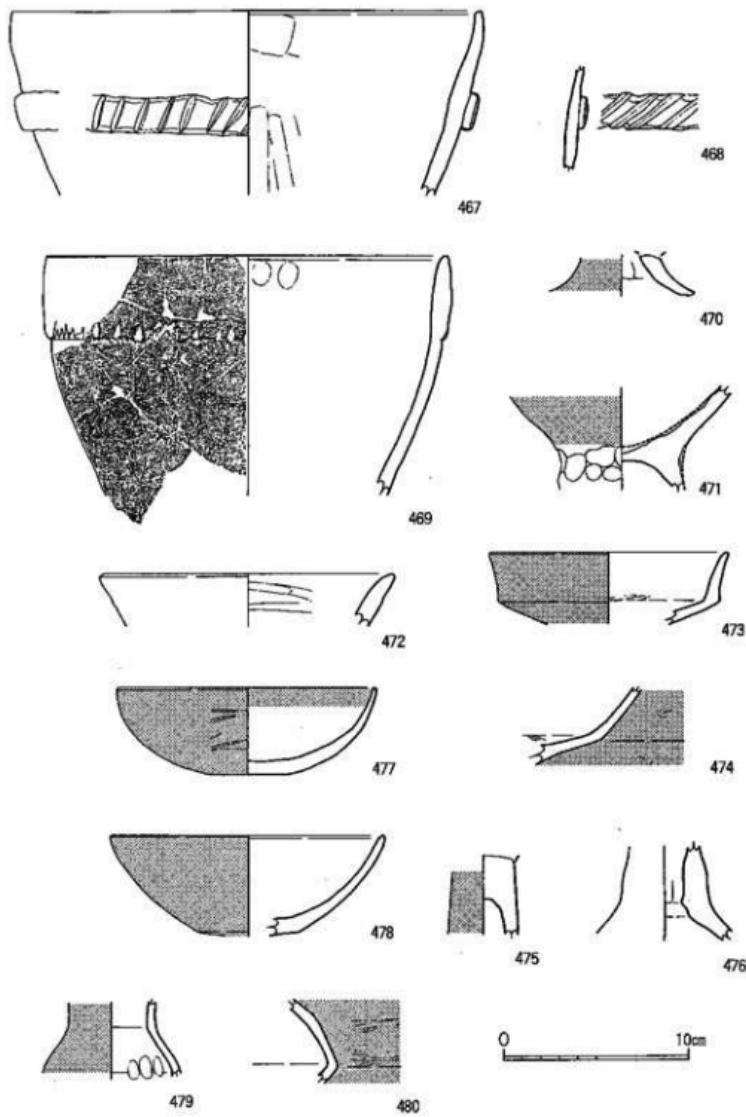


図96 SA18 出土土器実測図 (1/3)

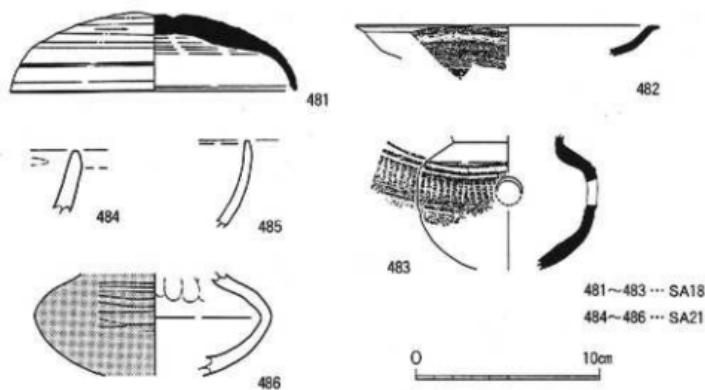
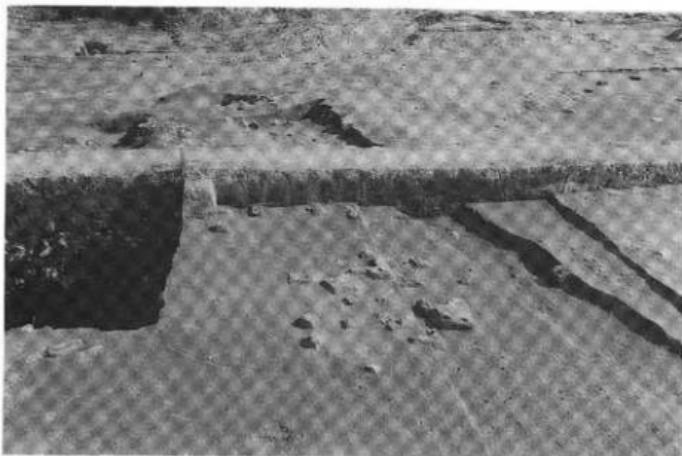


図97 SA18・SA21 出土土器実測図 (1/3)



挿入図版 3 SA17・SA20付近



挿入図版 4 S A 20



挿入図版 5 S A 23

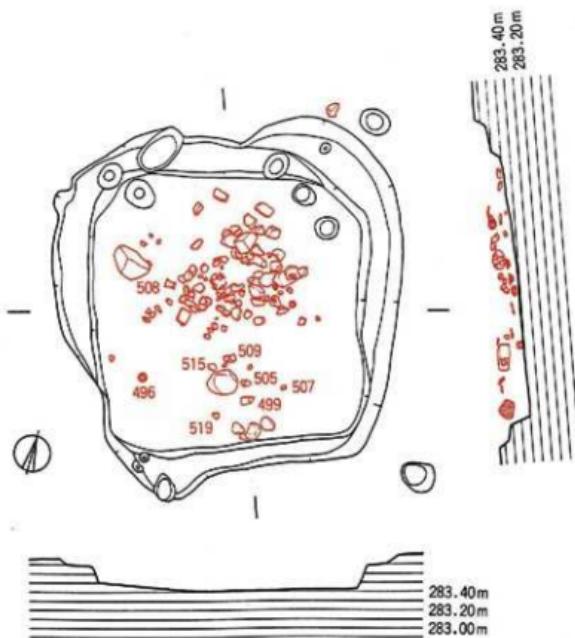


図98 SA 24 (1/60)

ろうか。床面とこの平坦面の段差は20~30cmある。面積は検出面で11.02m<sup>2</sup>、床面で7.90m<sup>2</sup>を測る。柱穴は北壁の床面や平坦面上に集中して検出されている。南側には対応するものがない。遺構の外側にあるPitがそれにあたるのかも知れない。深さはいずれも50~70cm程度である。

遺物は覆土中から出土しており、SA 12などと同じく、住居廃絶時の一括埋没といった状況ではなく、廃絶後、一定期間を経過した段階での廃棄の跡と見ることができる。また、覆土中には多くの礫も含まれている。

#### SA 24出土遺物 (図99~103)

土器類の壺 (487~497)、壺あるいは壺 (498)、壺あるいは鉢・椀類 (499・513)、高杯 (500~511)、椀 (512)、鉢 (514~516)、壺 (517~519)、龜 (520・521)、ミニチュア土器 (522)

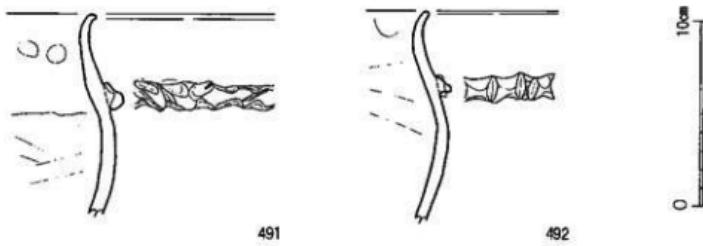
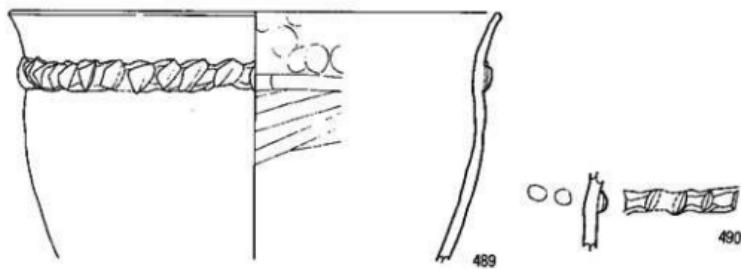
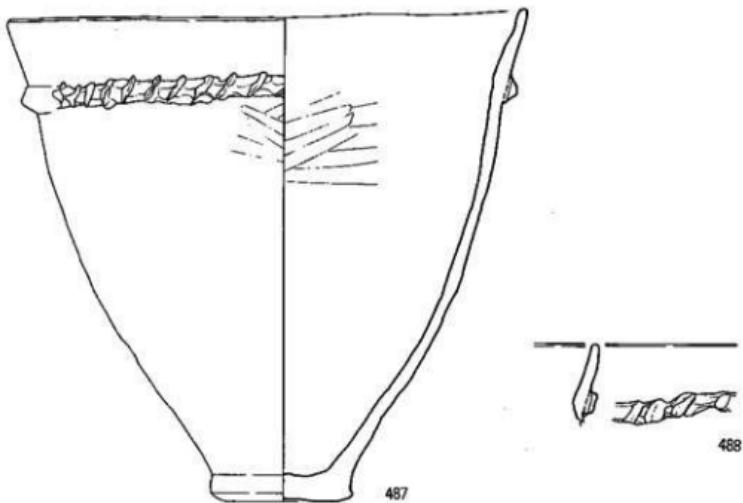


图99 S A24 出土土器实测图(1) (1/3)

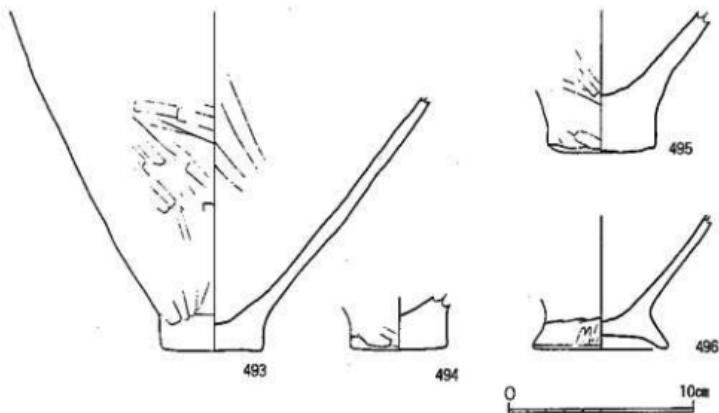


図100 SA24 出土土器実測図(2) (1/3)

など。その他にも、貼付突帯を巡らす壺や丹塗りの高杯といった器種を中心に、多量の破片が出土している。

壺には、胎土中に砂粒が多く含まれ、火熱を受けて器面が荒れているものが多い。487の完形品に見られるように、口縁部がわずかに外反し、刻みを施す貼付突帯を巡らし、平底となる型式が主流を占める。491の突帯はいわゆる絡繹突帯で、ヘラ状工具の圧痕が残る。底部は496に見られるように、上げ底になるものが一定量を占めるようである。497は口縁部が短く外反する。球形に近い胴部を持つものか。

高杯は、口縁部と受部の境の稜線・段が不明瞭となる。500・501は口縁部が外反する。対して502・503は口縁部が直線的にのび、504・508・509は内弯する。脚部は、506のように裾部がラッパ状に外反するものと、510・511のように中膨らみの脚柱部を持つものがある。後者にはおそらく、楕状の裾部が付くのであろう。杯部と脚部の接合方法は、509や510・511で知ることができる。杯部の下面の凹部に脚柱部の上端部を差しこみ、杯部内面から補強する形となっており、509の杯部下面には脚柱部の中に入る、粘土塊の突起が見られる。

尚、これはSA24出土の土器に限ったことではないが、剥落など、器面の荒れの著しい高杯が多く見られる。それらの中には丹塗りを施していると推測されるものの、その証拠に欠ける個体も存在しており、可能性の高い場合については観測表中に記している。

鉢は大形のものから小形のものまで、容積に幅が認められる。大形品である515には外面

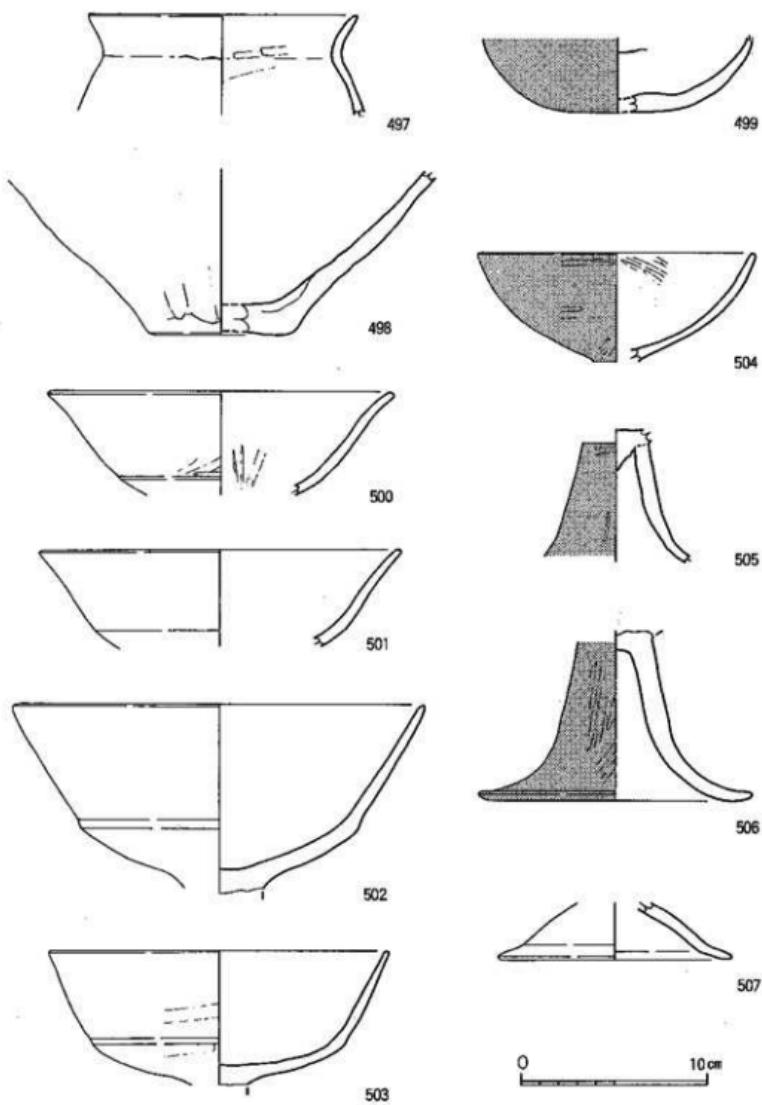
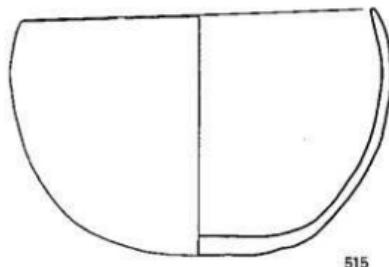
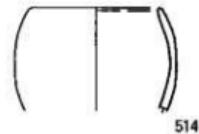
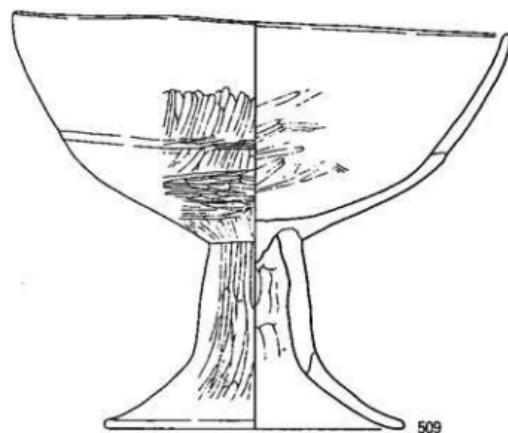
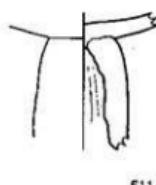
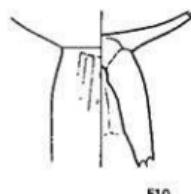
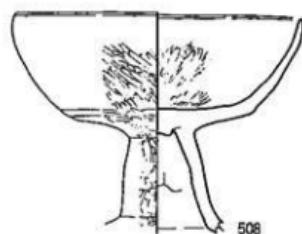


図101 S A24 出土土器実測図(3) (1/3)



0 10cm

図102 S A24 出土土器実測図(4) (1/3)

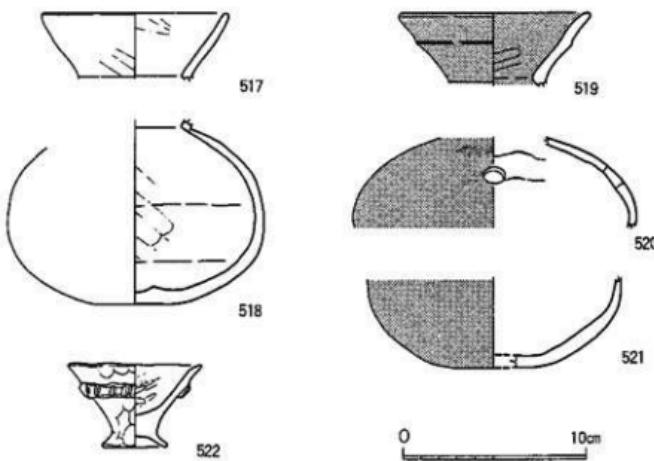


図103 S A24 出土土器実測図(5) (1/3)

にススが付着している。

517はわずかに内弯しながら広がる口縁部、518は扁球状を呈する体部で、同一個体と見られる。頸部の接合方法は、口縁下部の外面に体部の上端部を付ける形となる。518の底部内面には、径1cm程の円形の粘土の盛り上がり部分がある。519は丹塗りの二重口縁臺の口縁部である。520と521は同一と見られる個体で、最大径よりも上の肩部付近に孔を穿つ。

522は貼付突帯を巡らす甕を模している。指頭つまみ、ナデの跡が顯著に残る。

#### S A25

S A24の東側のG-2区で検出されている。精査時に楕円形の落ち込みが認められたが、削平や層位の横転などの影響で残存状況が悪く、正確な平面プランは明らかにできなかった。わずかに西側で5cm程度の壁面の立ち上がりを確認できたのみである。中央部と推定される辺りには焼土面が存在している。

#### S A25出土遺物 (図104)

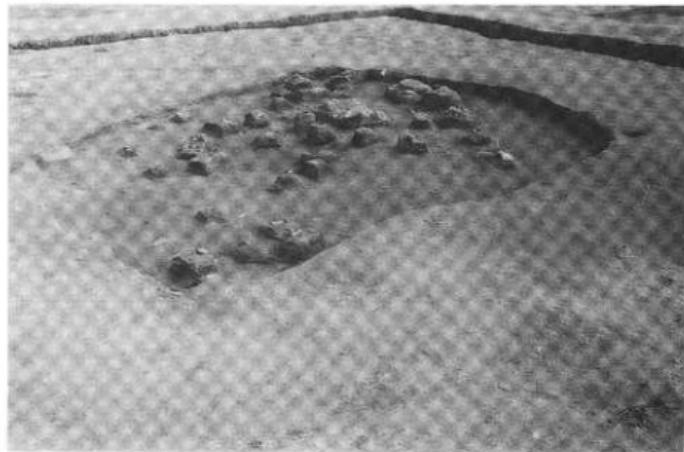
覆土中から破片数にして150点程の土器片が出土している。

土師器の甕 (523~527)、壺 (528・529)、高杯 (530)、高杯あるいは台付鉢 (531)、椀 (532)、鉢 (533) や、須恵器の瓶類 (534) などが見られる。

526の底面中央には径3cm程の凹みがある。この個体については断面観察は不可能である



挿入図版 6 E～H-2～6区 遺構検出状況



挿入図版 7 SA25

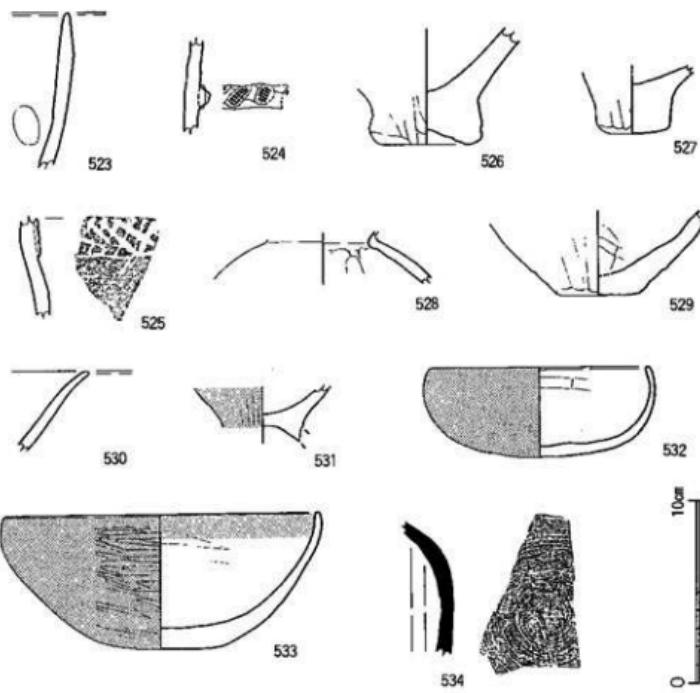


図104 S A 25 出土土器実測図 (1/3)

が、他の土器の観察結果も合わせて考えると、この種の上げ底となる底部は、通常の小さな平底の外側にドーナツ状の粘土紐を貼り付けて成形しているようである。

527と528は異形の壺であろう。529は脇部にかけての張り具合から壺と推測した。533は大型の椀としてもよい器形である。

534は横瓶であろうか。

S A 26 (図105)

F-2・3区に位置する。北西側は後世の落ち込みにより切られる。また北東側と南西側は削平や層位の乱れにより落ち際が判然としない。そのためおまかなかたはわかるもののや間欠部が多くなっている。一辺長は推定で約3.7m、検出面からの深さは10cm程度である。床面はⅢb層下部まで掘り込まれる。中央部や北東側の床面で小穴が1基検出されている

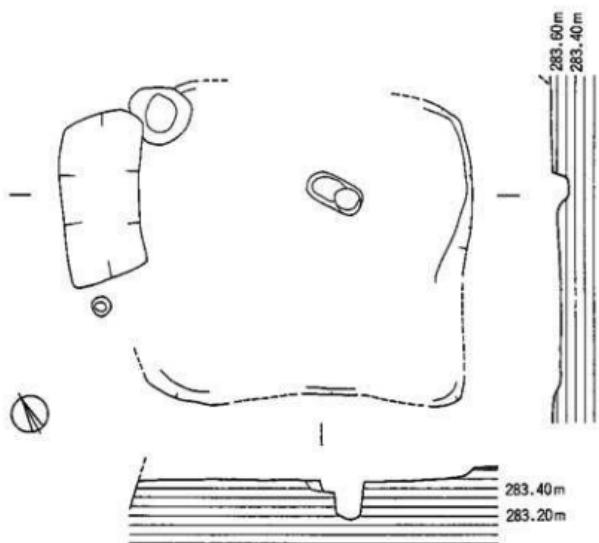


図105 SA 26 (1/60)

が、それに対応するようなものが見当たらない。

遺物はほとんどが覆土上部のレベルに見られた。

#### S A26出土遺物 (図106)

土師器の壺 (535~538)、高杯 (539・540)、台付鉢 (541)、椀 (542)、小型壺 (543)、須恵器の瓶類 (544)、杯 (身) (545) などが出土している。出土した土器片の総数は、50点程度である。535と536の壺は、それぞれ鈍い外反口縁・内湾口縁となる。

#### S A27

F・G-3区でわずかにその北端が検出されている。南側は開削の影響で段落ちとなっており、すでに破壊されていたと推測される。北側についても覆土が確認できたものの、落ち際は不明瞭であり、結局、規模その他の詳細について窺い知ることはできなかった。

遺物は覆土中から少量出土している。

#### S A27出土遺物 (図107)

3点とも、土師器の壺の破片であろう。547の貼付突帯には「×」形の刻みが付される。

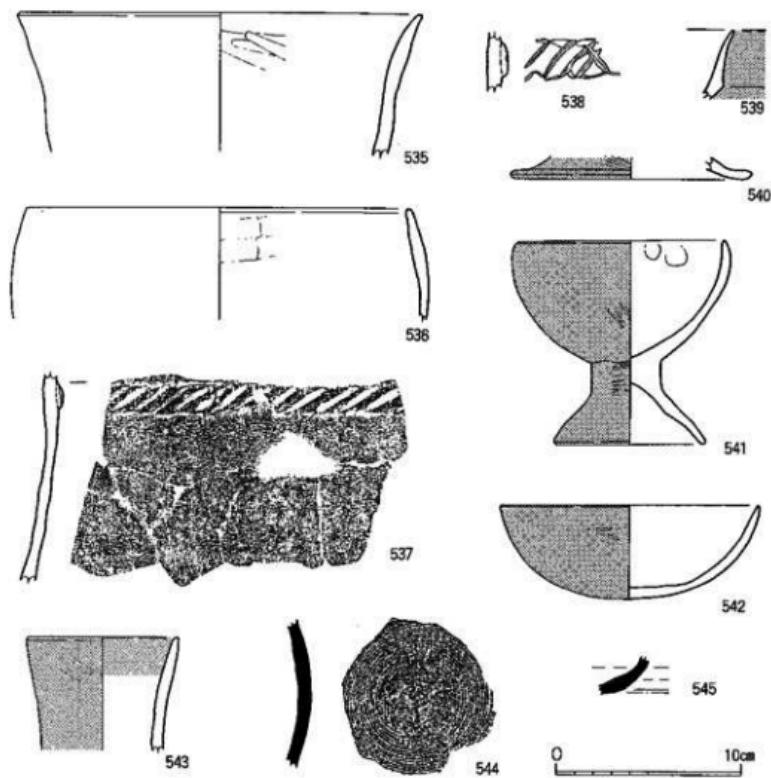


図106 SA 26 出土土器実測図 (1/3)

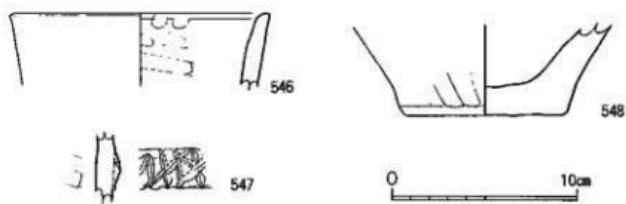


図107 SA 27 出土土器実測図 (1/3)

S A 28 (図108)

G - 3 区に位置し、 S A 31 に切られる。南側～南西側は耕作に伴う段落ちにより破壊を受ける。一辺の長さは 2.5m で、小形に属する。検出面からの深さは 15cm 程度である。床面は III b 層下部で掘り込まれる。西隅には小穴が 1 基、またその近くの床面に弧状の段落ち (5 cm

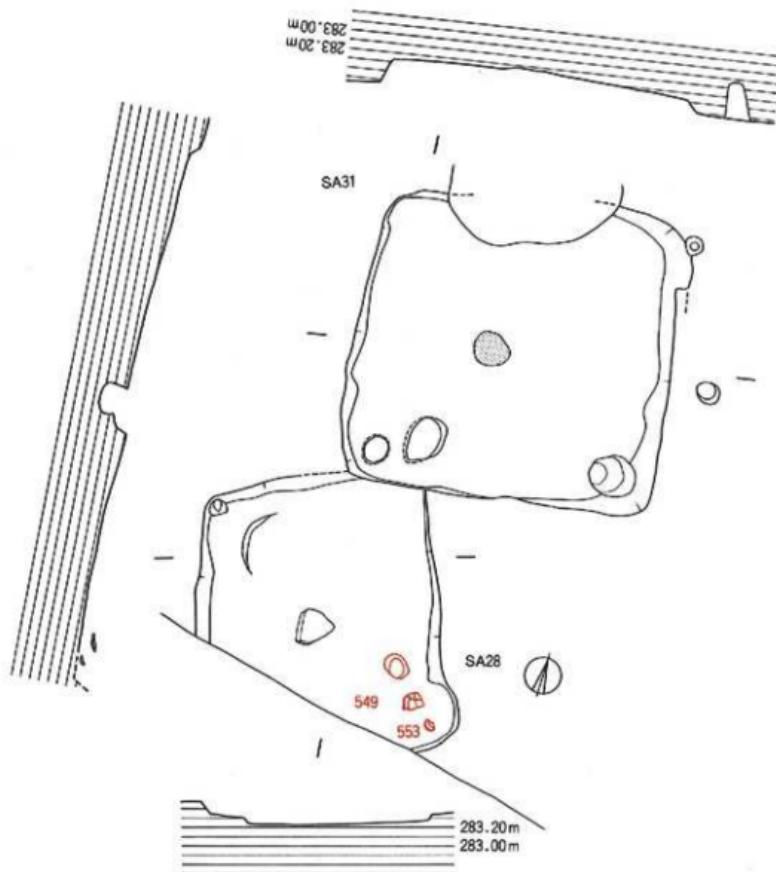


図108 S A 28・S A 31 (1/60)

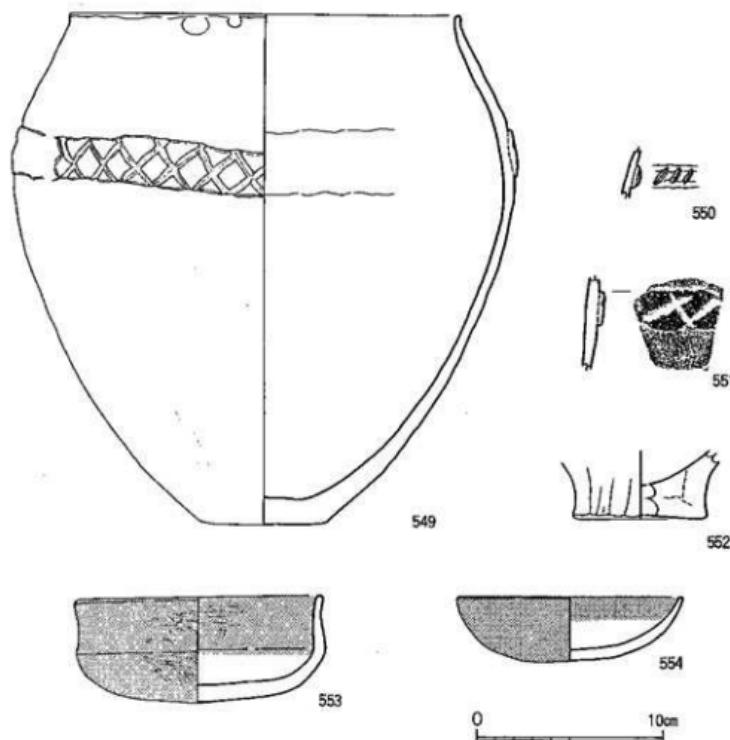


図109 S A 28 出土土器実測図 (1/3)

程度)が見られる。炉は検出されなかった。

遺物は、549を含めて、多くが覆土中より出土している。553は床面直上出土。

#### S A 28出土遺物 (図109)

土師器の壺 (549~552)、椀 (553・554) が見られる。

549は異形の壺で、外面にはスヌが付着している。551の同様の器形と推測される。553は須恵器を模倣した杯か。外内面とも丁寧に磨かれる。

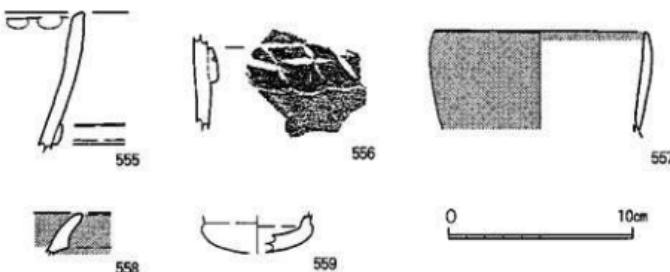


図110 S A31 出土土器実測図 (1/3)

S A31 (図108)

北壁の一部が層位の横転により不明瞭となるが、それを除けば比較的良好に遺存している。堅穴住居と言える。一辺長3.4m、検出面からの深さ約15cmを測る。主軸の方向はN-10°-Wを示す。尚、切られる側のS A28はそれよりも若干西に偏するようである。床面はⅢb層とⅣc層の層界付近に構築されている。床面の中央部には焼土面が、また南西隅近くには断面袋状となる層内土坑が2基検出されている。主柱穴ははっきりしない。

遺物は土師器のみで、小破片が多く、ほとんどが覆土中からのものである。

S A31 (図110)

壺 (555・556)、高杯 (558)、小型壺 (557・559) など。

556は異形壺か。559はおそらく口縁部が開き、胴部が扁平（と言うより痕跡程度か）となる小型壺と考えられる。

S A29 (図111)

H-2区に位置し、S A36・S A37・S E 8に切られる。西側は層位の乱れにより平面形が不明瞭となる。一辺の長さは推定で3.8m、検出面からの深さは30cmを測る。床面はⅣc層上部に構築される。床面に4基のPitが検出されたが、主柱穴となり得るかどうか、疑わしい。炉は検出できなかった。

遺物は覆土中より出土しており、出土レベルは検出面付近を示すものが多い。

S A29出土遺物 (図112・113)

全て土師器である。壺 (560~564・566)、壺 (565)、ミニチュア上器 (567) など。その他壺の胴部や丹塗りの高杯の破片が多数出土している。

壺は560・562など、口縁部が鈍く外反する型式のものが見られる。頸部以上には、後のヨコナデによりやや不明瞭となるが、縱あるいは斜方向の、搔き上げ気味の工具ナデが施されている (562にはハケ目に近い細かい繊維痕が付く)、頸部の始点にあたるところには段が形成されている。563は異形壺の肩部付近であろう。

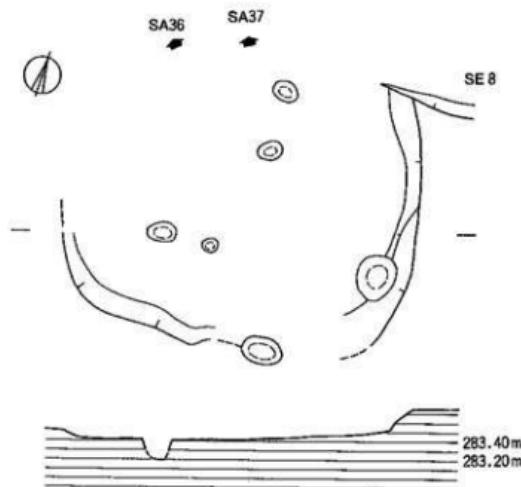


図111 SA29 (1/60)

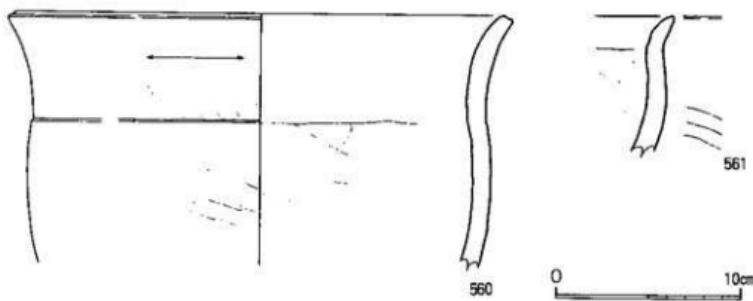


図112 SA29 出土土器実測図(1) (1/3)

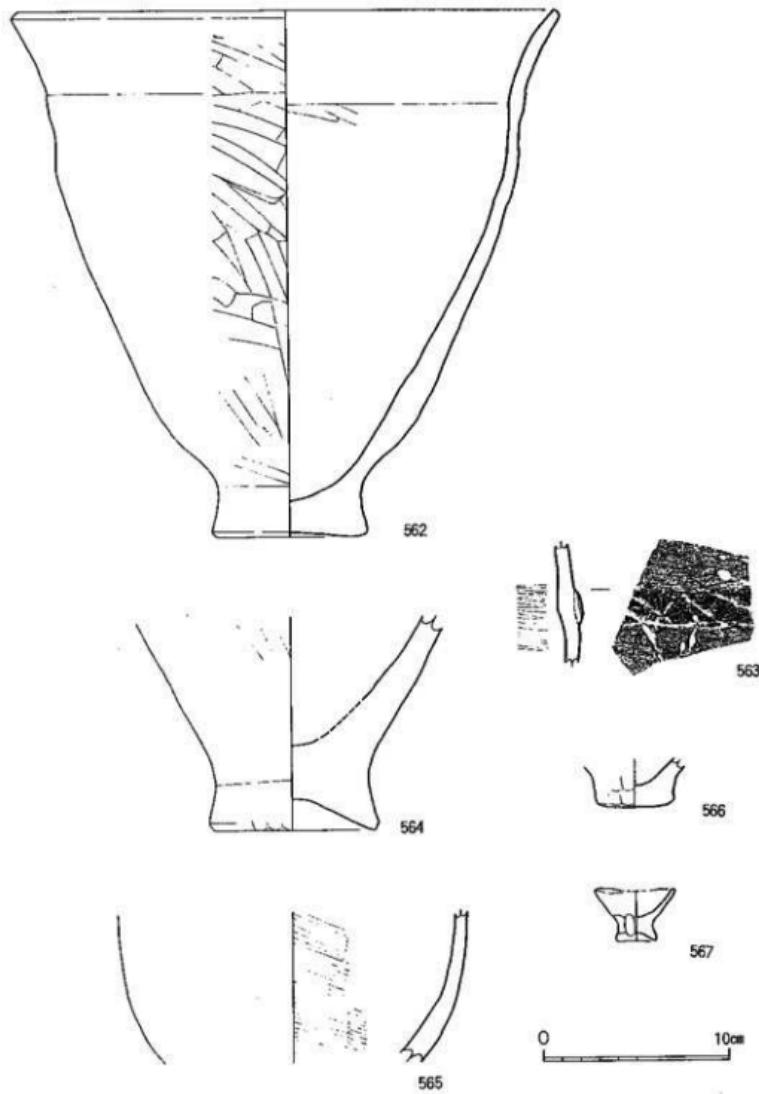


圖113 S A29 出土土器實測圖(2) (1/3)

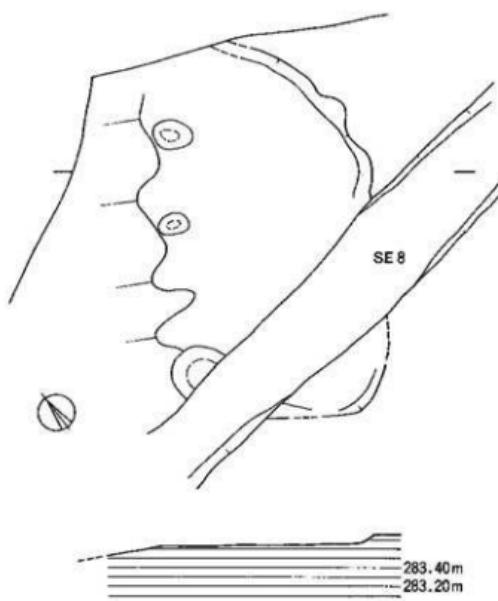


図114 S A 30 (1/60)

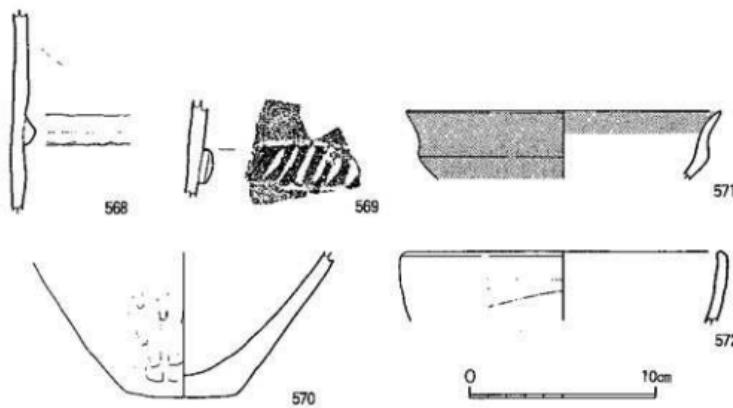


図115 S A 30 出土土器実測図 (1/3)

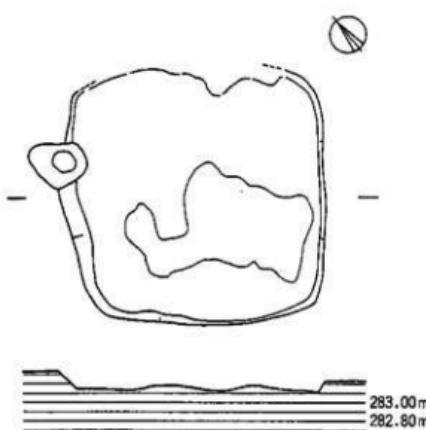


図116 S A32 (1/60)

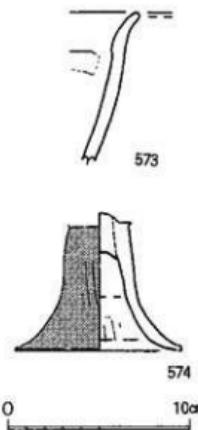


図117 出土土器実測図 (1/3)

#### S A30 (図114)

H-2区で検出されている。東側から南側にかけてSE8に切られ、西側は谷に向かって段落ちとなる。このため、規模・構造についての詳細は不明となっている。深さは検出面から10cm程度で、床面はⅢb層まで掘り込まれる。主柱穴・炉は確認できなかった。

遺物は、ほとんどが検出面近くのレベルから出土している。

#### S A30出土遺物 (図115)

総数約100点の土器片が出土している。壺(568・569)、蓋(570)、高杯(571)、鉢(572)などの器種が認められる。570は壺の底部であろう。外面はミガキに近いナデ調整が施される。572は壺とも考えられる。

#### S A32 (図116)

H-4区で検出されている。一辺長2.8mのやや小さめ(床面積6.42m<sup>2</sup>)の竪穴住居である。北東側は層位の横転により壁の立ち上がりがわからなくなっている。検出面からの深さは10~20cmで、床面はⅢb層中に掘り込まれ、アカホヤ火山灰や黒褐色土ブロックの混土でかたく踏みしめられる。図中、線で囲ってある部分は、床面が若干やわらかくなっているところである。主柱穴・炉は検出できなかった。

遺物は覆土の下部~床面にかけて見られた。覆土中には基礎層起源の礫も含まれる。

#### S A32出土遺物 (図117)

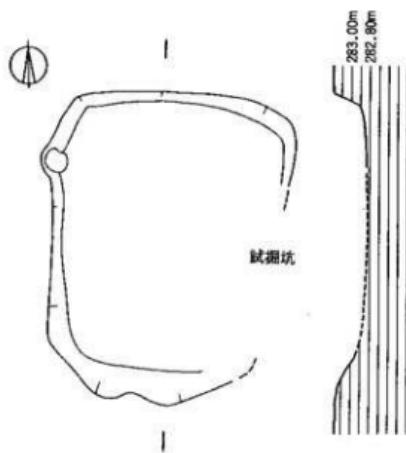


図118 SA 33 (1/60)

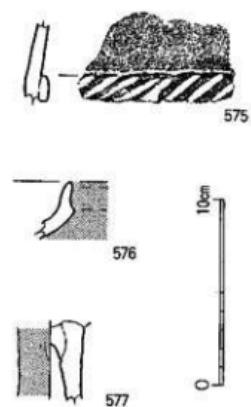


図119 出土土器実測図 (1/3)

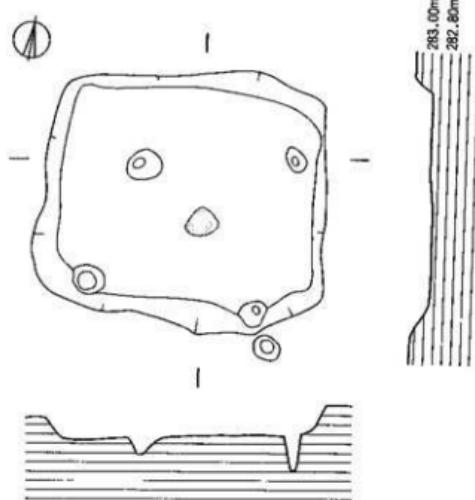


図120 SA 34 (1/60)

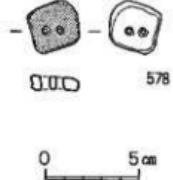


図121 出土土製品実測図 (1/3)

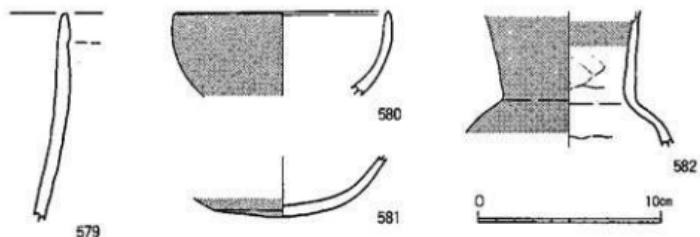


図122 S A34 出土土器実測図 (1/3)

573は鉢に近い形態の甕で、外面にススが付着している。574は外面丹塗りの高杯脚部である。脚柱部内側に、杯部下面に付いていたと見られる突起が残されている。

#### S A33 (図118)

G-5区に位置する。東側～中央部にかけて試掘時に大きく破壊してしまった。規模は3.3m×2.6m、検出面からの深さは約35cmで、IVc層まで掘り込まれている。床面の状態、主柱穴・炉の位置などは、上記の理由により不明となっている。

#### S A33出土遺物 (図119)

575は貼付突帯の巡る甕、576・577は高杯で、577の脚柱部内側には574と同じような突起がある。

#### S A34 (図120)

S A33の南側のG-6区に位置する。規模は2.8m×3.0m、検出面からの深さは20-30cmで、IVc層まで掘り込まれている。床面で4基の小穴が検出されている。このうちの2基が主柱穴になると考えられるが、竪穴の主軸からは若干ずれており、疑問が残る。ちなみに2本柱とした場合の主軸はN-80°-Eを示す。床面中央部には焼土面が存在する。

#### S A34出土遺物 (図121・122)

土師器の甕 (579)、甕 (582)、鉢・碗類 (580・581)、丹塗りの土製品 (578) が出土している。他に図示していないが高杯の小破片や、赤褐色の軟質の石あるいは粘土の焼成物と推測される塊状が4個体見られる。

582は長頸甕であろう。578は2箇所の穿孔を施す。土器片を擦って製作したものか。

#### S A35 (図123)

H-3区に位置する。長さ2.8m×3.0m、床面積6.51m<sup>2</sup>。検出面からの深さは20cmで、IVc層まで掘り込まれている。7基見られる小穴は、後世（中世期か）の所産である。また覆土の記録が無いため断定はできないが、西側にある土坑も後世のものである可能性が高い。

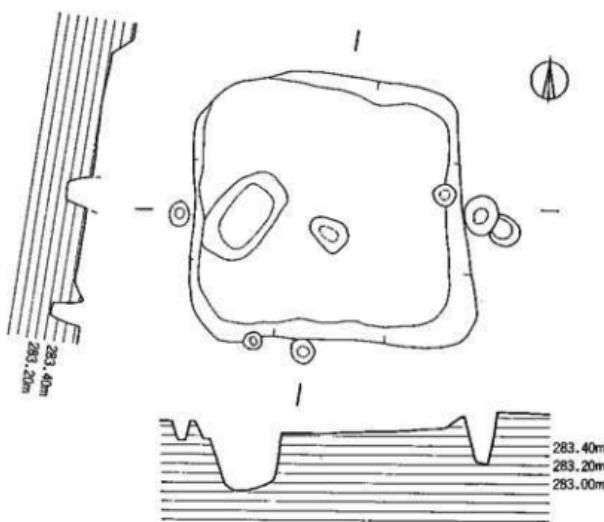


図123 SA 35 (1/60)

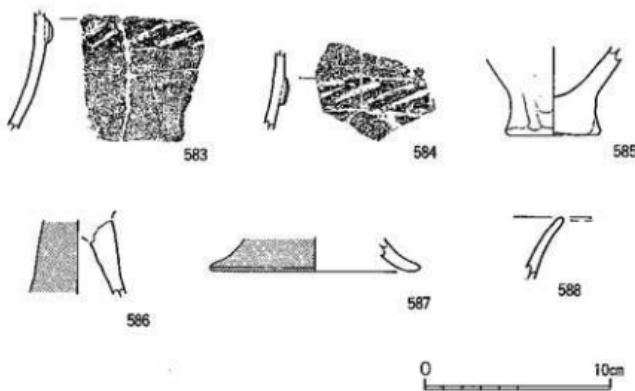


図124 SA 35 出土土器 (1/3)

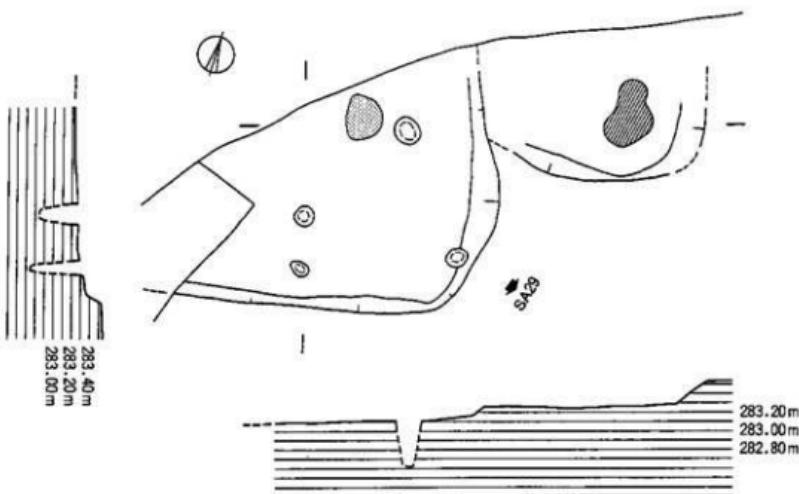


図125 S A36・S A37 (1/60)

遺物は総数50点程で、ほとんどが覆土中より出土している。

#### S A35出土遺物（図124）

土師器の壺（583～585）、高杯（586～588）の他、丹塗りの碗の破片も見られる。

583・584は貼付突帯を巡らすもので、斜位の刻みが施される。585は粘土紐を貼付けて、底部の外方の張り出しを形成した様子が窺える。588は（おそらく丹塗りの）高杯と考えたが、小破片であり、断定はできない。

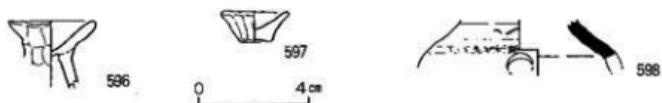
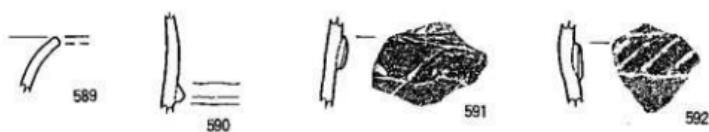
#### S A36（図125）

H・I-2区に位置し、S A37を切っている。北側～西側は調査区外となるため未掘で終わっており、全貌は不明である。検出面からの深さは20cm程度で、IVc層まで掘り込まれている。柱穴に関しては、記録の不備もあり詳細を知り得ない。推定中央部のやや東よりの床面上に焼土面が検出されている。

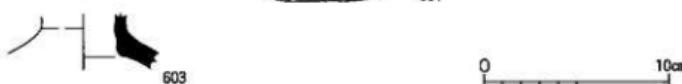
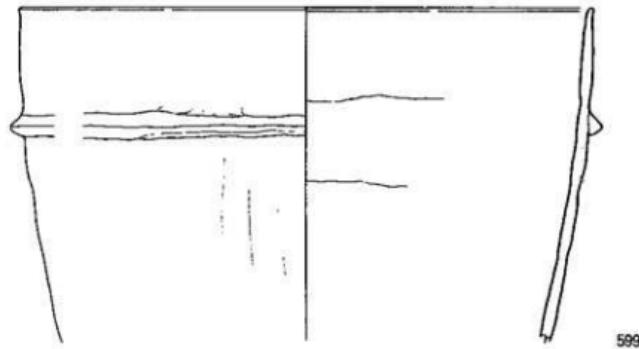
遺物は小破片がほとんどで、覆土中よりまとまりなく出土している。

#### S A36出土遺物（図126）

土師器の壺（589～593）、碗（594）、鉢・椀類（595）、ミニチュア上器（596・597）、須恵器の壺（598）などの器種が認められる。土師器の高杯や砥石の破片も出土している。



0 4 cm



0 10 cm

589~598・SA 36

599~603・SA 37

図126 SA 36・SA 37 出土土器 (1/3, 597のみ1/2)

壺のうち、589は口縁部が外反するもので、口唇部の断面形は角ばっている。焼成は堅緻である。593は鉢としたほうが良いかも知れない。それ以外は、本遺跡で一般的に見られる貼付突帯を持つものである。592は異形壺である。ミニチュア土器は、両者とも指痕压痕が明瞭に残る。596は本遺跡出土の高杯同様、杯部に脚部を差し込んで接合した痕跡が認められる。598は肩部に穿孔を施す。外面には自然軸がかかっている。そのためやや不明瞭になっているが、彫刻波状文が施されている。刃の加減で、文様のはっきりあらわれる部分と消えている部分が断続的に繰り返される。

S A37 (図125)

S A36同様、北側が調査区外となる。規模等の詳細は分からぬが、S A36よりは小さめのようである。検出面からの深さは30cmで、IV c層まで掘り込まれている。柱穴は検出されなかった。床面上にシラスの散在している箇所がある。図中のスクリーントーン部分がそれである。

遺物は、覆土中から多数出土している。

S A37 (図126)

土師器の壺 (599-601)、椀あるいは高杯 (602)、須恵器の壺・瓶類 (603) など。他に壺や丹塗りの高杯の小破片が見られる。

599はバケツ状の器形となる壺で、断面三角形の貼付突帯を巡らしている。600は異形壺と考えられる。

S A38 (図127)

H-3区で検出されている。西側～南側は調査区外となっており、未掘となっている。一边の長さは3.2m、検出面からの深さは15cmを測る。III b層まで掘り込まれ、床面が形成される。主柱穴・焼土面は検出できなかった。

遺物のうち、604・606・607が床面上から出土している。特に、604はまとまった出土状態であった。

S A38出土遺物 (図128)

土師器の壺 (604-606)、台付鉢 (607)、須恵器の壺 (608) の他、丹塗りのものを含む胴部片が若干出土している。

604は鉢に近い器形の壺で、最大径付近にススが付着しており、下半部は二次的火熱をうけた痕跡が認められる。頭部はわずかにくびれ、そこに貼付突帯が一周している。底部は小さく不安定な、分厚い平底となる。607は丹塗りの台付鉢で、外面は磨かれている。口縁部を欠くため全貌は分からぬが、比較的継長の形状となる。脚柱部は空洞となっており、杯部の方から粘土を充填させている様子が観察できる。608は須恵器の壺の胴部片で、外面に格子目タタキ痕が、内面に同心円文が見られる。

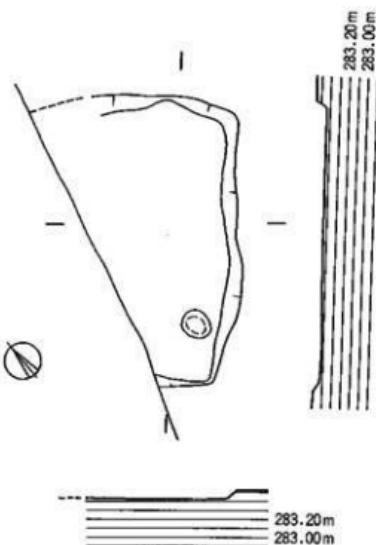


図127 S A 38 (1/60)

#### S A 40

G-4・5区に位置する。層位の乱れなどにより輪郭が不明瞭となっており、明確な落ち際が捉えられなかった。一辺の長さが4.5m程度の比較的大きな堅穴住居と推測される。IVc層まで掘り込まれ、かたく踏みしめて床面を形成している。柱穴・焼土面などは検出されなかった。

遺物は多数見られたが、ほとんどが覆土中出土のものである。

#### S A 40出土遺物 (図131)

土師器の壺(611-615)、壺(617)、高杯(616)、須恵器の杯〔身〕(618)などの器種が認められる。その他にも、貼付突帯を持つ壺や丹塗りの胴部片などが多数見られる。

611は貼付突帯を持ち、口縁部がわずかに内湾する形態のもの。612は口縁部のカーブは

#### S A 39 (図129)

G-6区の、S A 34の南隣に位置する。調査の終了間に検出している。

南側は開削により大きく失われている。一辺の長さは推定で4.0m、検出面からの深さは20cmを測る。柱穴・焼土面などの有無は不明である。

遺物は覆土の下部から出土しているものが多い。

#### S A 39出土遺物 (図130)

いずれも土師器である。609は比較的まとまって出土している平底の壺で、調整は外内面ともにナデである。610は分厚い平底となる壺の底部。他に丹塗りの高杯や碗も見られる。

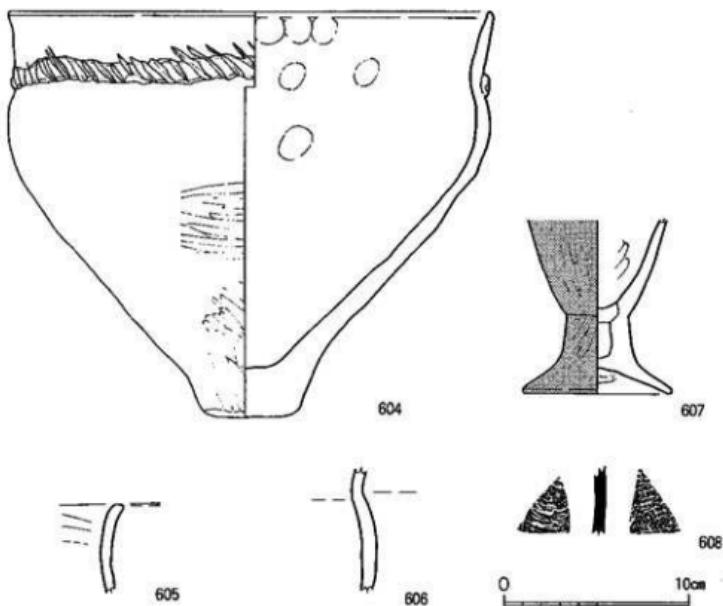


図128 S A 38 出土土器実測図 (1/3)

611に似るが、肥厚させて、その下端部に刻みを施すものである。614は異形の壺か。貼付帯の刻目の中に布目の圧痕が認められる。615・617は、それぞれ壺と壺の底部。618は須恵器の杯〔身〕の小破片である。復元口径11.2cmの、小形に属するものである。

#### S A 41

F-9・10区に位置する。東側の一部を検出したのみで、大部分は調査区外にあるため、完掘できなかった。そのため、規模・構造等は不明であり、出土遺物も少ない。

また、調査の終了間際で確認したため、遺憾ながら各種の記録を欠いている。

#### S A 41出土遺物 (図132)

619は小形壺の口縁部～頸部で、外面と内面上部に丹塗りを施している。620も丹塗りの高杯の杯部で、接合の状況が観察できる。

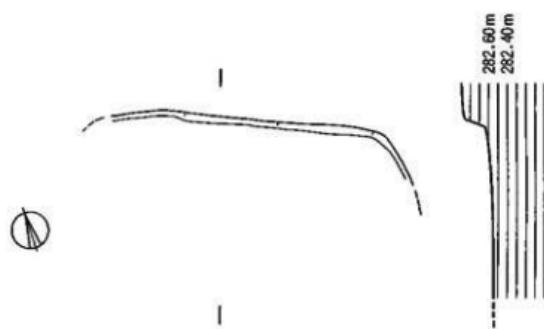


図129 S A 39 (1/60)

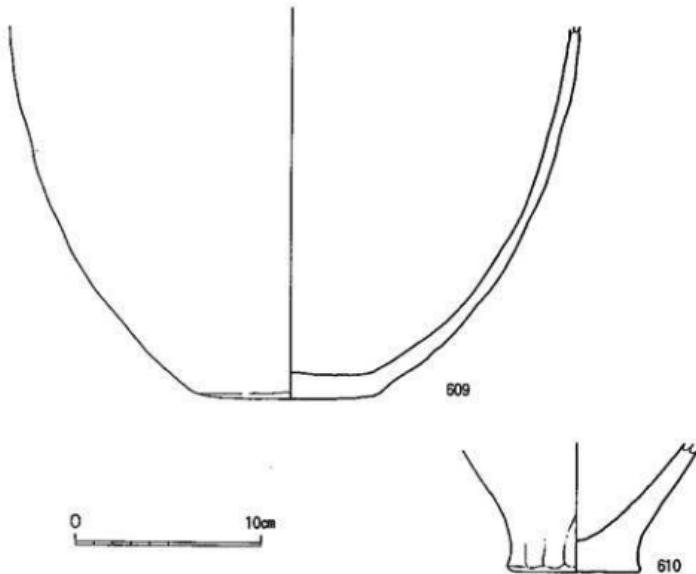
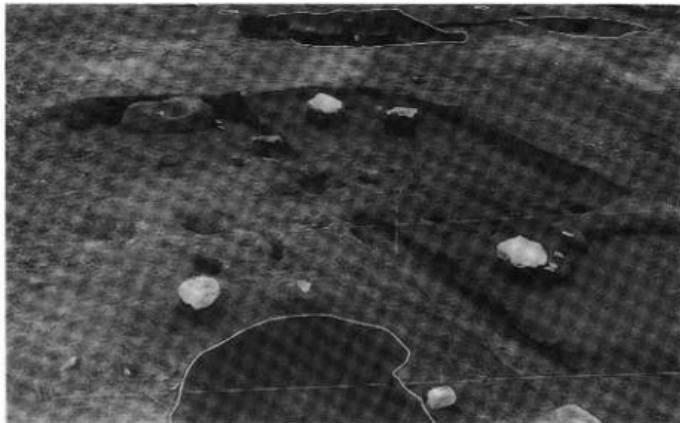


図130 S A 39 出土土器実測図 (1/3)



挿入図版 8 S A 40

(3) 方形の土坑

S C 8 (図133)

G・H-3区に位置し、S A24やS A31に隣接する。規模は2.7m×2.0m、検出面からの深さは20~30cmを測る。IVc層まで掘り込まれ、さらに北東側の床面に深さ45cmの小土坑が構築されている。床面積は、未確定の部分もあるが、3.70m<sup>2</sup>程度と見られる。柱穴は検出されていない。

この遺構に関しては、竪穴住居としては小規模であること、屋内土坑の存在などから、倉庫などの建築物であったと推定しておきたい。

遺物は、多量の土器片が見られたが、全て覆土中からの出土であり、小さな破片が多い。

S C 8 出土遺物 (図134)

621は唯一ほぼ完全な形で出土している椀である。部分的に、粘土の接合部分で剥離している。外面は特によく磨かれる。

(4) 円形・梢円形の土坑

S C 4 (図135)

E-8区に位置し、S E 4を切る。規模は1.8m×1.2m、検出面からの深さは20cmで、さ

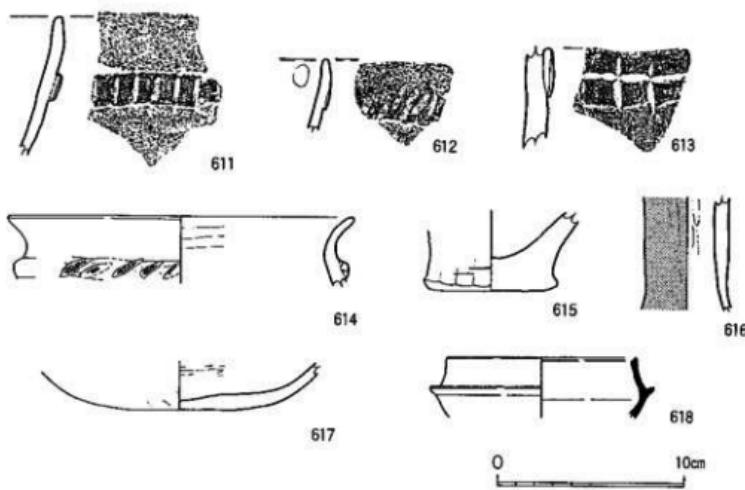


図131 S A 40 出土土器実測図 (1/3)

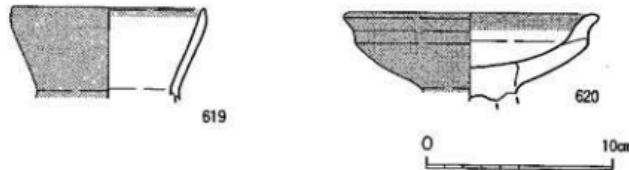


図132 S A 41 出土土器実測図 (1/3)

らに床面から掘り込まれる小穴がある。

#### S C 4 出土遺物 (図136)

622の碗以外に、丹塗りの高杯の小破片などが見られた。622は復元口径17.6cmの大形品と見られる。

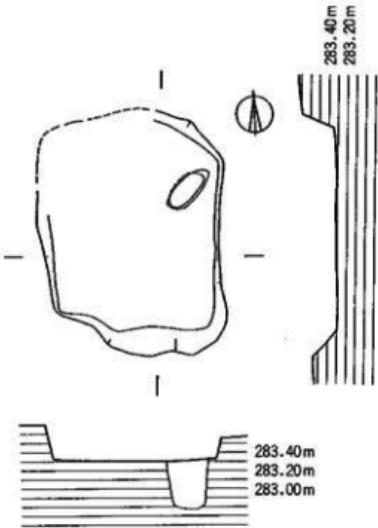


図133 S C 8 (1/60)

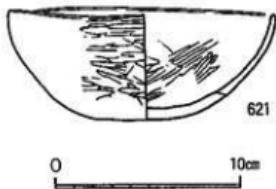


図134 出土土器実測図 (1/3)

S C 10 (図139)

G-4区に位置し、S C 11を切っている。2.1m×1.4mのややいびつな椭円形を呈する。

S C 5 (図135)

S C 4に隣接し、やはりS E 4を切る。規模は1.5m×1.2m、検出面からの深さは20~30cmを測る。丹塗りの胴部片などが少量出土している。

S C 6 (図137)

E-9区で検出されている。規模は1.7m×1.3m、検出面からの深さは20cmを測る。

出土した遺物は、古墳時代の土師器の小破片のみである。

S C 7 (図137)

E-9区に位置し、S C 6に隣接する。径0.9mの円形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。古墳時代の土師器の小破片が少量出土している。

S C 9 (図138)

G-3区に位置し、S A 28・S A 31・S C 8に隣接する。

1.5m×1.2mの椭円形を呈し、検出面からの深さは45~50cmを測る。壁際や床面には凹部が多く見られる。遺物は、土器の小破片が少量出土しているのみである。

南西側には深い8cm程の浅い小穴があり（点線で表現している）、覆土中から古墳時代の土師器片が多く出土している。

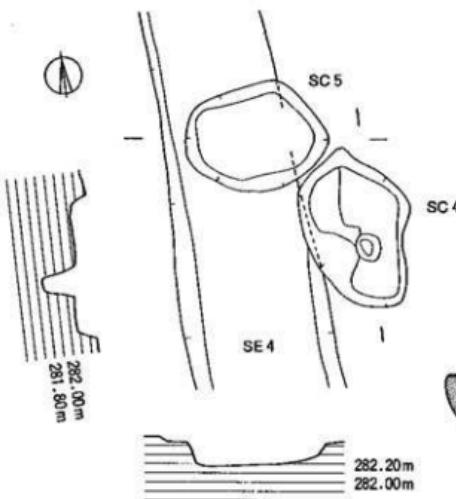


図135 SC 4・SC 5 (1/60)

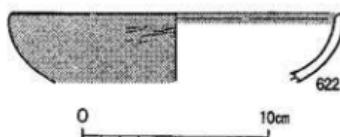


図136 出土土器実測図 (1/3)

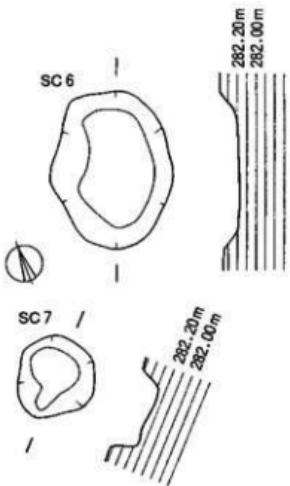


図137 SC 6・SC 7 (1/60)

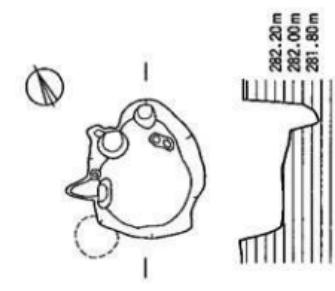


図138 SC 6 (1/60)

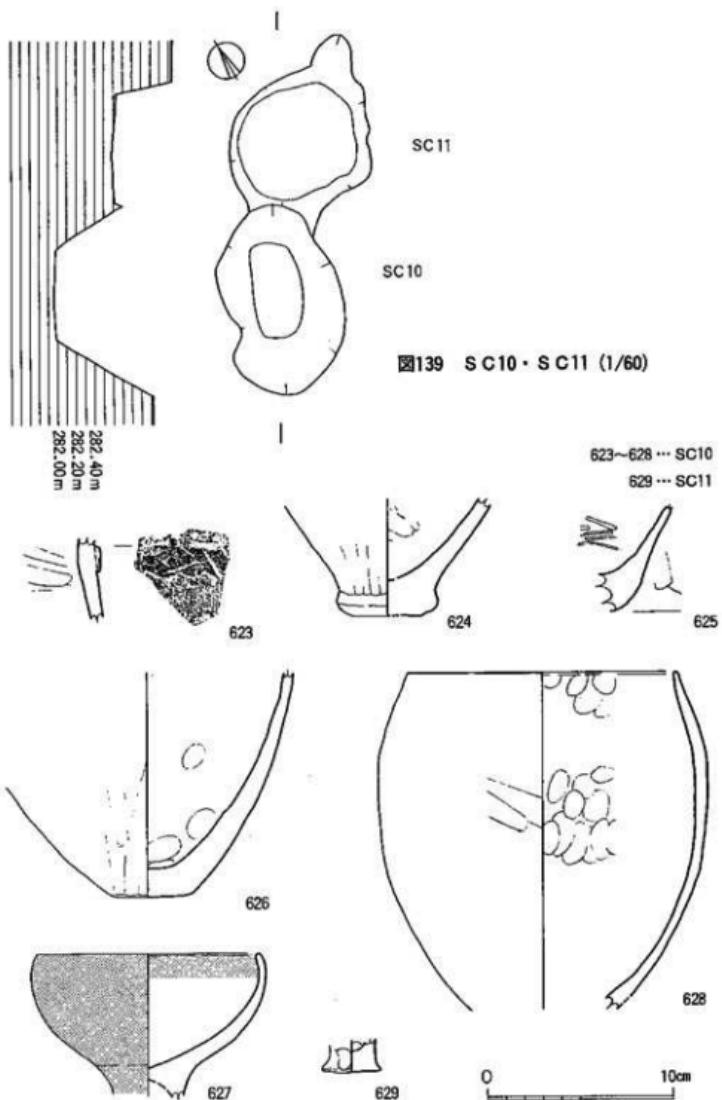


図139 SC10・SC11 (1/60)

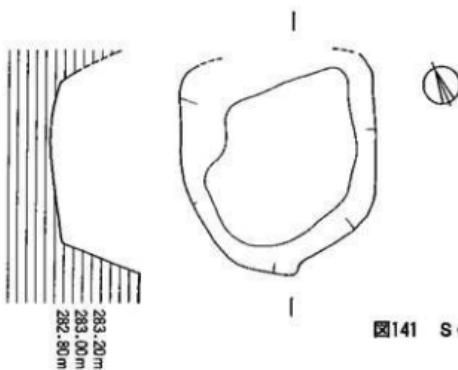


図141 SC12 (1/60)

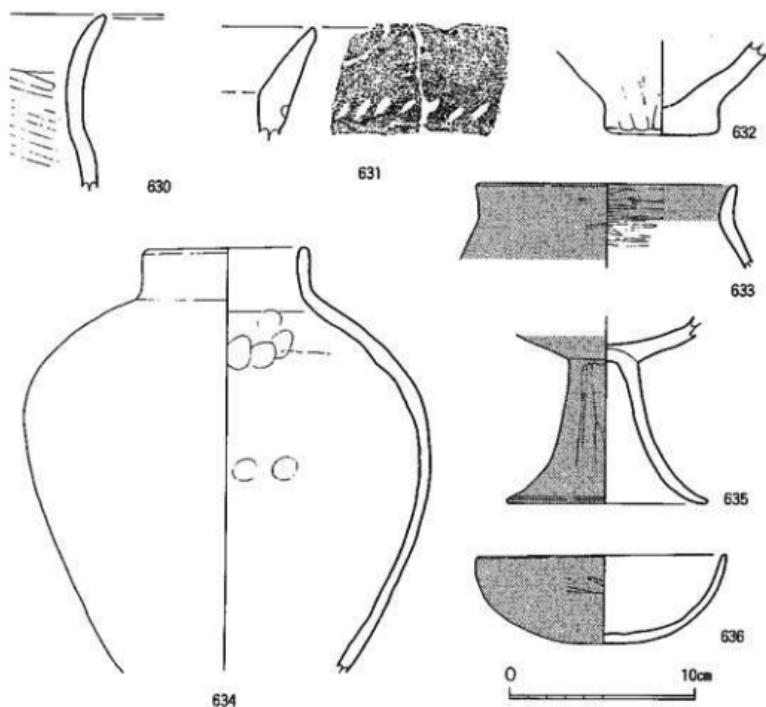


図142 SC12出土土器実測図 (1/3)

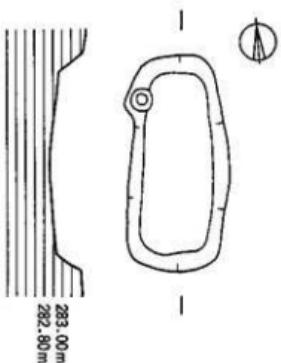


図143 SC 13 (1/60)

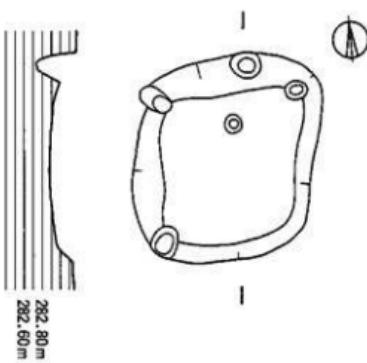


図144 SC 14 (1/60)

検出面からの深さは110cmを測る。

#### SC 10出土遺物（図140）

土師器の壺（623～625）、壺（626）、台付鉢（627）、鉢（628）などの器種が認められる。その他、丹塗りの高杯や小型壺の破片も見られる。

625は、604のような形態の壺の底部であろう。626も、あるいは壺か鉢の底部であるかも知れない。628は胴部の最大径部分より上にススが付着している。

#### SC 11（図139）

SC 10に切られるため、長軸の長さは不明。短軸の長さは1.5m、検出面からの深さは60cmを測る。

#### SC 11（図140）

土器片が約20点出土している。図示した629はミニチュア土器の底部である。指頭圧痕が顕著に残る。

#### SC 12（図141）

G-4区に位置する。北東側は後世の落ち込みの影響を受けている。そのため長軸の長さは不明。短軸の長さは2.1m、検出面からの深さは90cm～100cmを測る。

#### SC 12出土遺物（図142）

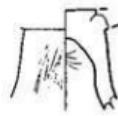
土師器の壺（630～632）、壺（633・634）、高杯（635）、椀（636）が認められる。図示しなかった、あるいは図示できなかった丹塗りの小破片も多い。



637



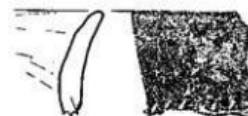
638



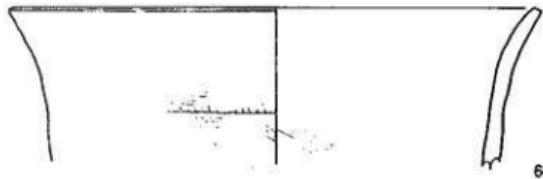
639



640



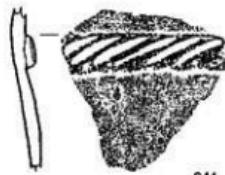
641



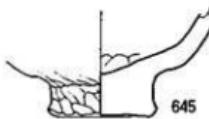
642



643



644



10cm  
0

637 ..... SE 1

638 ..... SE 4

639~641 ... SE 5

644 ..... SE 8

642·643·645 ... 包含層

図145 SE 1~SE 8 包含層出土土器実測図 (1/3)



図146 包含層出土土器・玉類実測図 (1/2)

631は口縁部をわずかに肥厚させ、その部分に刺突による速点を付けている。632は外面と内面上部に丹塗りを施す。

S C13 (図143)

G-5区に位置する。2.4m×1.1mの隅丸の長方形を呈する。検出面からの深さは30cm～40cmを測る。古墳時代の土師器片が少量出土している。

S C14 (図144)

G-5区に位置する。2.3m×1.9mの隅丸方形の土坑である。検出面からの深さは30cm程度である。丹塗りを施す土師器の小破片が少量出土している。

(5) 溝状遺構・包含層出土遺物 (図145・146)

溝状遺構や該期の遺物包含層であるⅢa層からも多量の遺物が出土している。図示できたのは一部にとどまった。

637はS E 1出土の須恵器の杯〔蓋〕である。このS E 1は次節で触れる中世の遺構であるが、覆土中に多くの繩文土器や古墳時代の土師器を含む。

638はS E 4出土の壺の底部で、二次的火熱を受けている。S E 4～S E 8は、後述するが、近世以降の所産と考えられる。

644はS E 8出土の異形壺。S E 8はS A 30やS A 37などの一群を切っているため、それらの堅穴住居の遺物が含まれている可能性がある。

642と643は壺である。このうち642はハケに似た工具による調整がなされる。643は粗雑な貼付突帯を巡らす。645は壺あるいは異形壺の底部である。646はミニチュアの瓶の把手部分であろう。断面は丸く作られる。これまで見てきたように、本遺跡の古墳時代の堅穴住居にはカマドを持つものはなく、祭祀具として移入されたものであろうか。あるいは時期的に下ると見るべきか。

647は管玉である。硬玉製のもので、長さは2.8m、最大径は0.62cmである。

No	遺跡・区	層	調査および文様	出土 (遺物)	色 調	備 考
342	SA 2		◎④ナデ		◎淡黄 ◎にぶい黄緑	
343		*			◎浅黄緑 ◎にぶい黄緑・灰黄褐	
344			◎ミガキ ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎淡黄	
345			◎④ナゲ		◎円地り・黄緑 ◎にぶい黄緑・褐色	
346			◎工具ナデ ◎——	C	◎橙 ◎淡黄緑	◎風化
347			◎④ミガキ	C	◎丹塗り ◎明黄緑	
348			◎ナデ ◎ナデ?		◎丹塗り ◎橙	風化
349			◎ナデ? ◎ナデ		◎橙 ◎橙・褐色	風化 ◎褐色の跡れい
350			◎ナデ ◎ミガキに近いナデ	C	◎にぶい黄緑・灰黄緑 ◎橙	
353	SA 3		◎④ナデ		◎にぶい褐・にぶい黄緑 ◎にぶい黄緑・灰黄緑	貼付突帯 剣目に布目止痕
354			◎④ナデ		◎にぶい黄緑 ◎浅黄緑	貼付突帯 ヌス付着跡らしい
355			◎ケズリ ◎④ナデ		◎にぶい黄緑 ◎浅黄緑	
356			◎ミガキ ◎ナデ		◎丹塗り ◎灰黄緑	
357	SA 4		◎④ナデ		◎浅黄・黒 ◎黄緑・暗灰褐	
358		*			◎にぶい黄緑 ◎明黄緑	
359		*			◎④にぶい黄緑・灰黄緑	貼付突帯
360			◎工具ナデ ◎ナデ	C・橙	◎にぶい黄緑 ◎淡黄	
361			◎ミガキ? ◎ミガキ		◎丹塗り ◎丹塗り・にぶい黄緑	
362			◎ミガキ? ◎ミガキ		◎丹塗り ◎丹塗り・にぶい黄緑	
363			◎ミガキ? ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎灰黄緑	
364			◎ミガキ ◎工具ナデ・ナデ ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎橙	
365			◎ミガキ ◎ナデ		◎丹塗り ◎橙・暗灰黃	
366			◎④同軸ナデ		◎青灰	
367			◎同軸ナデ・当軸ケズリ ◎同軸ナデ		◎◎灰オリーブ	
369	SAH		◎観方向のナデのちミガキ ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎浅黄緑・暗灰	

表17 土器観察表(13)

No	遺構・区	層	調査および文様	出土 (出土物)	色 調	備 考
370	SAS		④ハケ・ハケのちナデ ⑤ハケ	A・B	④淡黄・浅黄模 ⑤浅黄模	
371	SA 6		④⑤ナデ	A	④にぶい檻 ⑤浅黄模	貼付実帶
372			*		④にぶい黄模 ⑤檻	貼付実帶
373			④ミガキ ⑤ミガキ・ナデ		④丹塗り ⑤丹塗り・にぶい黄	
374			④ミガキ ⑤ナデ		④丹塗り ⑤丹塗り・黄灰	
375	SA 7		④工具ナデ・ケズリ ⑤工具ナデ ⑥ナデ		④明黄模・褐灰 ⑤明黄模	
376			④ミガキ? ⑤ミガキ・ナデ		④丹塗り ⑤丹塗り・にぶい黄模	
377			④ナデ? ⑤ナデ		④丹塗り ⑤黒	
378		C	④⑤ナデ		④⑤檻	
379	SA 8		*		④⑤にぶい黄模	貼付実帶
380		C	④ナデ ⑤—		④檻 ⑤浅黄模	西風化
381	SA 9		④⑤工具ナデ・ナデ ⑤ナデ	C	④黄模 ⑤浅黄模	貼付実帶
382			④⑤ハケ	C	④檻 ⑤にぶい黄模・檻	
383			④⑤ナデ		④黄模 ⑤浅黄模	スス付着著しい
384			④工具ナデ ⑤ナデ		④浅黄模 ⑤黄模	貼付実帶
385			④ナデ・刻目 ⑤工具ナデ		④にぶい黄模 ⑤にぶい黄模・褐灰黄	
386		C	④ナデ? ⑤ナデ		④にぶい黄模 ⑤檻	⑤丹塗り可能性あり
387		C	④⑤ミガキ		④丹塗り ⑤丹塗り・浅黄模	
388			④ミガキに近いナデ ⑤ナデ		④浅黄模 ⑤黄灰	
389		C	④ミガキ ⑤ナデ		④丹塗り ⑤明黄模	
390		C	④⑤⑥ナデ		④丹塗り ⑤にぶい黄模・灰黄模	
391			④⑤圓転ナデ		④⑤灰	
393	SA 10		④⑤ナデ		④明黄模・黒 ⑤明黄模	スス付着著しい
394			④⑤ナデ ⑤ナデ?		④にぶい黄模・褐灰 ⑤にぶい黄模	
395		難	④⑤ナデ?		④檻 ⑤明黄模	

表18 土器観察表(14)

No	遺傳・区	著	調査および文様	新土 (泥人形)	色 画	備 考
396	S A 10		◎ミガキ ◎ナデ		◎丹塗り ◎にぶい黄緑・明黄緑	
397	S A 10		◎◎ミガキ		◎◎丹塗り	
398	S A 10		◎ミガキ ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎浅黄緑・にぶい黄緑	スス付着著しい
399	S A 11		◎◎ナデ		◎◎にぶい黄緑	貼付突帯
400	S A 11		◎ミガキ ◎ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・浅黄緑	
401	S A 11		◎ミガキ ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎浅黄緑・褐灰	
402	S A 11		◎ミガキ? ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎黄緑・灰黄緑	
403	S A 11		◎ミガキ ◎ナデ		◎丹塗り ◎緑・にぶい黄緑	
404	S A 11		◎ミガキ? ◎ミガキ・ナデ	C	◎丹塗り ◎丹塗り・にぶい黄緑	
405	S A 11		◎◎ヨコナデ		◎◎灰	
406	S A 12		◎ナデ・刻目 ◎ナデ	C	◎にぶい黄緑 ◎明黄緑	
407	S A 12		◎ナデ・刻目 ◎ナデ	C	◎にぶい黄緑・灰黄緑 ◎浅黄緑	
408	S A 12		◎ナデ・刻目 ◎工具ナデ		◎浅黄 ◎にぶい黄	スス付着著しい
409	S A 12		◎ナデ・刻目 ◎ナゲ		◎◎にぶい黄緑	
410	S A 12		◎ナデ ◎工具ナデ	B・西	◎にぶい黄緑・浅黄 ◎灰黄緑	貼付突帯
411	S A 12		◎◎ナデ	C	◎浅黄 ◎明黄緑	貼付突帯
412	S A 12		◎◎◎ナデ	C	◎緑・浅黄緑 ◎緑・黄緑	
413	S A 12		◎◎ナデ ◎——		◎にぶい黄緑・褐灰 ◎——	
414	S A 12		◎◎ナデ ◎ナデ?	A	◎緑・にぶい黄 ◎にぶい黄緑	
415	S A 12		◎◎ナデ		◎明黄緑 ◎黄緑	スス付着著しい
416	S A 12		*		◎にぶい黄緑 ◎緑	貼付突帯
417	S A 12		◎ナデ ◎——	C	◎にぶい黄緑 ◎——	
418	S A 12		◎ケズリ ◎工具ナデ ◎ナデ		◎◎にぶい黄緑	
419	S A 12		◎◎◎ナデ		◎明黄緑 ◎黄緑	
420	S A 12		◎ナデ ◎ナデ		◎にぶい黄緑・灰黄緑 ◎にぶい黄緑	

表19 土器観察表(15)

No	造構・区	屏	調 整 お よ び 文 横	施上 (裏入数)	色 調	備 考
421	S A 12		◎ミガキ ◎ナデ ◎ケズリ・ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・浅黄橙	
422			◎ミガキ ◎ミガキ・ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・橙	
423			◎ミガキ ◎ナデ	C	*	
424			*		*	
425			◎ミガキ ◎ナデ ◎ケズリ・ナデ	C	◎丹塗り ◎丹塗り・灰黄褐	
426			◎ミガキ? ◎工具ナデ		◎丹塗り ◎灰黄褐・にぶい黄橙	
427			◎ミガキ ◎工具ナデ		◎丹塗り ◎にぶい黄橙	
428			◎ミガキ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎橙・黄橙	丹塗り痕跡程度
429			◎◎ミガキ		◎丹塗り ◎丹塗り・浅黄橙	
430			◎ミガキ ◎ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・にぶい黄橙	スス付着
431			◎ミガキ? ◎ナデ?	C	◎丹塗り ◎黄橙	
432			◎ミガキ? ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎にぶい橙	
433			◎ミガキ ◎ナデ		◎丹塗り ◎橙	
434			*		◎丹塗り ◎丹塗り・橙	
435			◎ミガキ? ◎ミガキ・ナデ?		*	
436			◎ミガキ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎灰黄褐	
437	S A 42		◎ナデ・刻目 ◎ナデ		◎黒 ◎にぶい黄褐	スス付着著しい
438			◎回転ナデ・回転ヘラケズリ ◎回転ナデ		◎浅黄 ◎灰オリーブ	
439	S A 13		◎◎ナデ	漆	◎橙・にぶい橙 ◎橙	貼付突端
440			◎◎ハケ	C	◎◎にぶい黄橙	
441			◎ケズリ ◎◎ナデ		◎にぶい橙 ◎橙	
442			◎ミガキ ◎ナデ・ミガキ	C	◎◎浅黄褐	
443			◎ミガキ ◎ケズリ	C	◎丹塗り ◎にぶい黄	
444	S A 15		◎ナデ・刻目 ◎ナデ	A	◎◎にぶい黄橙	
445			◎工具ナデ ◎◎ナデ	C	◎にぶい黄橙 ◎にぶい橙	

表20 土器観察表(16)

No	遺構・区	番	調査および文様	出土 (直人脚)	色 調	備考
445	SA15		◎ミガキ? ◎ケズリに近いナデ		◎丹塗り ◎にぶい黄橙	
447	S A 17		◎◎ナデ		◎橙・黒 ◎浅黄橙	貼付帯著しい
448			◎— ◎ナデ		◎黒褐 ◎淡黄橙	貼付帯
449			◎ミガキ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・にぶい橙	
450			◎◎ナデ		◎黒褐 ◎にぶい黄橙	貼付帯 スス付滑著しい
451			◎工具ナデ ◎ナデ		◎にぶい黄橙・灰黄褐 ◎にぶい黄橙	貼付帯
452			◎◎ナデ		◎◎にぶい黄橙	
453			◎ナデ・斜目 ◎ナデ		◎浅黄橙・褐灰 ◎にぶい黄橙	
454			◎工具ナデ ◎■ナデ	A	◎にぶい黄橙 ◎黄灰	
455			◎ナデ ◎ナデ	C	◎◎黄橙	
456			◎ナデ ◎ナデ? ◎ナデ	C・素	◎◎にぶい黄橙	
457	S A 19		◎ミガキ・ミガキに近いナデ ◎ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・浅黄橙	
458			◎◎ナデ ◎工具ナデ	A	◎明黄褐 ◎にぶい黄橙	
459			◎◎ナデ ◎工具ナデ	C・素	◎浅黄橙 ◎黄橙	
460			◎ミガキ ◎ミガキに近いナデ	C	◎丹塗り ◎丹塗り・橙	
461			◎ミガキ ◎ナデ		*	
462			◎ミガキ ◎丁寧なナデ		◎丹塗り ◎にぶい黄橙・褐灰	
463			◎ミガキ ◎工具ナデ (内)ケズリ・ナデ		◎丹塗り ◎黄灰・暗灰黄	
464			◎ミガキ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎浅黄橙	
465			◎ミガキ? ◎ナデ?		◎丹塗り ◎黄橙・明黄褐	
466			◎回転ヘラケズリ ◎回転ナデ・ナデ		◎灰黄 ◎灰	
467	S A 18		◎ナデ ◎工具ナデ	A	◎浅黄橙・にぶい黄橙 ◎橙・浅黄	貼付帯
468			◎ナデ ◎工具ナデ	B・C	◎浅黄橙・浅黄 ◎黄橙・明黄褐	貼付帯
469			◎ナデ・斜目 ◎ナデ	B	◎◎にぶい黄橙	
470			◎ナデ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎浅黄橙	

表21 土器観察表(17)

No	造形・区	肩	調 整 お よ び 文 様	基準 (盛入量)	色 調	備 考
471	S A 18		②工具ナデ ②——		④丹塗り ④浅黄褐・灰黄褐	
472			②ヨコナデ ②ナデ		④にぶい黄褐 ④明黄褐	
473			②ミガキ ②ナデ		④丹塗り ④黄褐・灰黄褐	
474		*			④丹塗り ④にぶい黄褐	
475		*			④丹塗り ④浅黄・灰黄褐	
476			②四ナデ		④橙 ④灰黄	
477			②ミガキ ②ナデ		④丹塗り ④丹塗り・にぶい黄褐	
478			②ミガキ ②ナデ?	C	④丹塗り ④橙・黄褐	
479			②ミガキ? ②ナデ		④丹塗り ④にぶい黄褐	
480			②ミガキ ②ナデ		④丹塗り ④浅黄褐	
481	S A 21		②回転ヘラケズリ・回転ナデ ②回転ナデ・ナデ		④にぶい黄褐 ④灰白・にぶい黄褐	
482			②回転ナデ・波状文 ②——		④灰オリーブ ④浅黄褐	
483			②ナデ・沈線・輪葉列点文・カキ目 ②ナデ		④四灰	
484			②四ナデ		④浅黄褐・黒 ④浅黄褐	スス付発着しない
485			②ナデ? ②ナデ		④四灰	
486			②ミガキ? ②ナデ		④丹塗り ④にぶい黄褐	
487			②四工具ナデ・ナデ	C	④④にぶい黄褐	貼付突起、スス付着 熱的火熱を受ける
488			②四ナデ		④淡黄 ④浅黄褐	貼付突起
489			②ナデ ②工具ナデ		④四橙	貼付突起、スス付着 熱的火熱を受ける
490			②四ナデ		④④浅黄褐	貼付突起
491	S A 24	*		A	④橙・にぶい黄褐 ④にぶい黄褐	貼付突起(過度突起) 二次的火熱を受ける
492		*		A	④④にぶい黄褐	貼付突起
493			②工具ナデ・ケズリに近いナデ ②ナデ ②工具ナデ	C・塵	④にぶい黄褐 ④にぶい黄褐・灰黄褐	
494			②工具ナデ ②ナデ		④浅黄褐・褐灰 ④浅黄褐	
495			②ナデ・工具ナデ ②ナデ ②工具ナデ	C	④にぶい橙・にぶい黄褐 ④にぶい黄褐・橙	

表22 土器觀察表(18)

No	遺構・区	層	調査および文様	土色 (層入層)	色 調	備考
495			◎工具ナデ ◎◎ナデ	C	◎にぶい黄・にぶい黄橙 ◎にぶい黄橙	
497			◎ナデ ◎ナデ・ケズリに近いナデ	C	◎浅黄橙・暗灰 ◎淡黄	
498			◎ケズリ・「貝」ナデ ◎ナデ	■	◎にぶい黄橙 ◎にぶい黄橙・灰黄褐	
499			◎ミガキ? ◎ナデ	C・■	◎丹塗り ◎浅黄橙	
500			◎◎ナデ		◎にぶい黄橙 ◎浅黄橙・黒	
501			◎ナデ? ◎ナデ	C	◎僅 ◎にぶい黄橙・灰	
502			*	C	◎黄橙・にぶい褐 ◎棕	◎丹塗りの可能性あり
503			◎ミガキに近いナデ ◎ナデ	C	◎棕 ◎棕・褐灰	
504			◎ミガキ ◎ミガキ・ナデ	C	◎丹塗り ◎にぶい黄橙	
505			◎ミガキ ◎ナデ (■内)ケズリ・ナデ	C	◎丹塗り ◎褐灰・にぶい黄橙	
506			◎ミガキ ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎浅黄橙・褐灰	
507			◎ミガキ? ◎ナデ?		◎にぶい黄橙 ◎にぶい黄橙・オリーブ灰	
508	S A 24		◎ミガキ ◎ミガキ (■内)ケズリ	C	◎明赤褐・明黄褐 ◎明赤褐	◎丹塗りの可能性あり
509			◎ミガキ (■内)ミガキ・ミガキに近いナデ (■内)ケズリ・ナデ	C	◎棕 ◎黄橙・にぶい黄橙	
510			◎ミガキに近いナデ ◎ナデ		◎黄橙 ◎褐灰・にぶい褐	
511			◎ミガキに近いナデ (■内)ナデ (■内)ケズリ		◎浅黄橙 ◎黒褐・棕	
512			◎ミガキ? ◎ナデ		◎◎丹塗り	
513			◎ミガキに近いナデ		*	●に「十」の 種別あり
514			◎◎ナデ	C	◎にぶい棕 ◎にぶい棕・黒褐	
515			*	A	◎棕 ◎黄橙	スス付青
516			◎ナデ? ◎ナデ	A-C-■	◎にぶい黄橙 ◎浅黄橙・明黄褐	風化らしい
517			◎ミガキに近いナデ ◎ナデ	C	◎黄橙 ◎棕	
518			*	C	◎棕・黄橙 ◎黄橙	517と異・製作か?
519			◎ミガキ ◎ミガキに近いナデ	C	◎◎丹塗り	
520			◎ミガキ? ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎浅黄橙	穿孔あり

表23 土器観察表(19)

No	遺構・区	層	調査および文様	出土 (出し物)	色 調	備考
521	S A 24		◎ミガキ?・ナデ ◎ナデ?	C・織	◎丹塗り ◎にぶい黄	S3と同じ體か?
522			◎◎ナデ		◎浅黄・灰 ◎浅黄	貼付突帯
523			◎ナデ ◎ナデ?	A	◎にぶい黄褐・黒褐 ◎橙・明褐	
524			◎◎ナデ		◎褐・褐灰 ◎にぶい黄褐	貼付突帯 刻目に寿昌庄
525			*	A・C	◎◎浅黄褐	貼付突帯
526			◎工具ナデ ◎ナデ	C	◎◎にぶい黄褐	底面に凹み
527			◎ケズリに近いナデ ◎ナデ	A・C	◎浅黄褐・褐 ◎浅黄	
528			◎ナデ? ◎ナデ		◎黄褐 ◎浅黄褐	
529			◎◎工具ナデ	A	◎◎にぶい黄褐	
530			◎ナデ? ◎ナデ	C	◎白褐	
531			◎ミガキ ◎ナデ ◎ケズリに近いナデ	C	◎丹塗り ◎浅黄褐・褐灰	
532			◎——	C	◎丹塗り ◎黄褐	風化
533			◎ミガキ?・ナデ ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎丹塗り・浅黄褐	
534			◎カキ目 ◎回転ナデ		◎褐灰 ◎オーリーブ灰	
535	S A 26		◎ナデ ◎工具ナデ		◎にぶい橙 ◎浅黄褐	
536			◎◎ナデ		◎明黄褐 ◎にぶい黄褐	
537			*		◎褐 ◎黄褐	貼付突帯
538			◎ナデ? ◎ナデ		◎にぶい橙 ◎橙	貼付突帯
539			◎ミガキ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎浅黄褐	
540			*		◎丹塗り ◎黄褐	
541			◎ミガキ? ◎ナデ ◎ケズリ・ナデ	C	◎丹塗り ◎黄褐・にぶい橙	
542			◎ミガキ? ◎ナデ	C	◎丹塗り ◎浅黄褐	
543			◎ミガキ ◎ミガキ・ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・明黄褐	
544			◎カキ目 ◎ナデ		◎◎灰黃	
545			◎回転ナデ・回転ケズリ ◎回転ナデ		◎◎灰	

表24 土器観察表(19)

No	遺構・区	層	調査および文様	出土 (個人)	色 調	備考
546	S A 27		◎◎ナデ	C	◎にぶい黄橙 ◎浅黄橙	
547		*		C・深	◎淡黄 ◎黄灰	貼付夾帯
548			◎工具ナデ ◎ナデ ◎ケズリに近いナデ		◎黄橙 ◎灰青	
549	S A 28		◎ナデ・ケズリに近いナデ ◎ナデ ◎ナデ		◎黄橙 ◎橙	ヌス付層 二次的火熱受ける
550			◎◎ナデ		◎◎明黄褐	貼付夾帯 刻印に布目压痕
551		*		A	◎◎にぶい黄橙	貼付夾帯 摩滅
552			◎◎工具ナデ ◎ナデ	C	◎にぶい橙 ◎橙	
553			◎◎ミガキ	C	◎丹塗り ◎丹塗り・にぶい橙	
554			◎ミガキ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・にぶい黄橙	
555	S A 31		◎◎ナデ	C	◎灰黄褐 ◎にぶい黄橙	貼付夾帯
556		*		A	◎にぶい橙 ◎灰黄褐	貼付夾帯
557			◎ナデ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・橙	
558			◎ミガキ? ◎ナデ	C	◎◎丹塗り	
559			◎ミガキに近いナデ ◎ナデ	C	◎◎にぶい橙	
560	S A 29		◎◎ナデ・工具ナデ	C	◎にぶい橙・黒褐 ◎にぶい黄橙	
561			◎工具ナデ	A	◎にぶい橙 ◎にぶい褐	
562			◎工具ナデ・ケズリ ◎工具ナデ ◎ナデ	C	◎◎橙	
563			◎ナデ ◎ミガキ		◎にぶい黄橙 ◎黒褐	貼付夾帯
564			◎工具ナデ ◎—— ◎ナデ	C	◎にぶい橙 ◎灰黄褐	◎風化著しい
565			◎工具ナデ ◎ハケ目	C	◎◎にぶい黄橙	
566			◎工具ナデ ◎ナデ ◎ナデ?	C	*	摩滅
567			◎ナデ ◎ナデ		*	
568	S A 30		◎◎ナデ	A	◎◎灰黄褐・にぶい黄橙	貼付夾帯
569		*		深	◎黄橙・にぶい黄橙 ◎明黄褐	貼付夾帯
570			◎ミガキに近いナデ ◎ナデ		◎にぶい黄橙 ◎橙	

表25 土器観察表(21)

No	遺構・区	層	調整および文様	土質 (混入物)	色調	備考
571	S A 30		◎ミガキ ◎ミガキ・ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・明黄緑	
572			◎◎ナデ	C	◎◎にぶい黄緑	
573	S A 32		*	A	◎浅黄緑・黄緑 ◎黄緑	スス付岩着しい
574			◎ミガキ? ◎ケズリ・工具ナデ	C	◎丹塗り ◎浅黄	
575	S A 33		◎◎ナデ	C	◎◎にぶい黄緑	貼付突起
576			◎ミガキ ◎ナデ		◎丹塗り ◎明黄緑・褐	
577			◎ミガキ ◎工具ナデ		◎丹塗り ◎にぶい黄緑	
578	S A 34		◎—— ◎ナデ		◎丹塗り ◎にぶい黄緑	穿孔あり
579			◎◎ナデ		◎にぶい黄緑・墨緑 ◎明黄緑	
580			◎ミガキ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎緑	
581			◎◎ナデ		◎丹塗り ◎緑・灰黄緑	
582			◎ナデ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎丹塗り・にぶい黄緑	
583	S A 35		◎◎ナデ		◎◎明黄緑	貼付突起
584			*		◎緑 ◎にぶい緑・灰	貼付突起
585			◎工具ナデ ◎◎ナデ		◎にぶい黄緑 ◎灰黄緑	
586			◎ミガキ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎にぶい黄緑	
587			◎ミガキ? ◎ナデ?		◎丹塗り ◎灰	
588			◎ナデ? ◎ナデ		◎緑 ◎浅黄緑・灰	◎丹塗りの可能性あり
589	S A 36		◎◎ヨコナデ	C	◎◎にぶい緑	
590			◎◎ナデ	A	◎にぶい黄緑 ◎明黄緑	貼付突起
591			◎◎ナデ?	C	◎明黄緑 ◎黄緑	貼付突起
592			◎◎工具ナデ		◎にぶい黄緑 ◎緑	貼付突起
593			◎◎ナデ		◎◎にぶい黄緑	
594			◎◎ミガキ	C	◎◎丹塗り	
595			◎ナデ? ◎ナデ		◎丹塗り ◎暗灰黄	

表26 土器観察表(22)

No	遺構・区	層	調査および文様	計上 個人類	色 調	備考
596	S A 36		④④ナデ	C	④④にぶい黄橙	
597		*	*	C	*	
598		④—— ④ナデ		灰		④自然釉
599	S A 37		④④ナデ・工具ナデ	A	④にぶい黄橙 ④にぶい橙	貼付帯
600			④ナデ ④工具ナデ	A	④灰黄褐 ④にぶい黄橙	貼付帯
601			④ケズリに近いナデ ④工具ナデ ④ナデ		④④にぶい黄橙	
602			④④ミガキ		④丹塗り ④丹塗り・にぶい黄橙	
603		④—— ④回転ナデ		④④灰青		④自然釉
604	S A 38		④ナデ・ミガキ ④④ナデ	A	④橙・淡橙 ④橙・にぶい橙	スス付帶 二次的火熱を受ける
605			④④ナデ		④にぶい黄橙 ④浅黄橙	
606			④ナデ? ④ナデ	C	④④にぶい黄橙	スス付着苔しい
607			④ミガキ ④工具ナデ		④丹塗り ④浅黄橙・にぶい黄橙	
608			④格子目タタキ ④同心円文		④④灰	
609	S A 39		④④ナデ	C	④明黄褐・褐灰 ④にぶい黄橙・褐灰	
610			④④工具ナデ ④ナデ	A	④にぶい黄橙 ④淡黄・灰	
611	S A 40		④④ナデ	C	④黄褐・黒褐 ④浅黄・灰黄	貼付帯
612			④ナデ・刻目 ④ナデ	C	④黄褐・黒 ④にぶい黄橙	スス付着苔しい
613			④④ナデ		④④にぶい黄橙	貼付帯
614			④ヨコナデ ④ナデ	C	④にぶい橙 ④橙・明オーラフ灰	貼付帯 削刮に市目伝痕
615			④ケズリに近いナデ ④④ナデ	C	④にぶい黄橙 ④にぶい橙	
616			④ミガキ ④ケズリ		④丹塗り ④橙	
617			④④ナデ?	C	④にぶい橙・にぶい黄橙 ④にぶい黄橙	
618			④④回転ナデ		④④灰白	
619	S A 41		④ミガキ ④ナデ?		④丹塗り ④丹塗り・橙	
620			④ミガキ ④ミガキ・ナデ	C	④丹塗り ④丹塗り・にぶい橙	

表27 土器観察表(23)

No	遺構・区	層	調査および文様	粘土 (直角)	色 調	備考
621	SC8	SC 10	⑤ミガキ ⑥ミガキ・ナデ	C	④黄橙 ⑤褐・黄根	
622			⑤ミガキ ⑥ナデ	C	④丹塗り ⑤丹塗り・にぶい黄根	
623			⑥ナデ ⑦ナデ	D	④浅黄根・にぶい橙 ⑤浅黄根	
624			⑥ケズリ ⑦⑧ナデ	C	④⑤にぶい黄根	
625			⑨⑩工具ナデ		④黑・浅黄根 ⑤浅黄根	
626			⑥ケズリ ⑦⑧ナデ	C	④⑤にぶい黄根	
627			⑥ミガキ? ⑦ナデ	C	④丹塗り ⑤丹塗り・浅黄根	
628			⑨⑩ナデ	C	④黄根・にぶい黄根 ⑤明黄根	スス付着 一次的火熱を受ける
629			⑨⑩⑪ナデ	C	④⑤にぶい黄根	
630	SC 12	SC 13	⑫ナデ ⑬工具ナデ	C	④⑤浅黄根	
631			⑭ナデ・刺突進立文 ⑮ナデ	A	④浅黄根 ⑤にぶい橙・青灰	
632			⑯ケズリに近いナデ ⑰ナデ? ⑱ナデ	C	④浅黄・淡黄 ⑤灰黄・淡黄	
633			⑲⑳ミガキ	C	④丹塗り ⑤丹塗り・浅黄根	
634			⑪ナデ ⑫ナデ・工具ナデ	C	④にぶい黄根・褐灰 ⑤にぶい黄根	
635			⑬ミガキ ⑭ナデ ⑮ケズリ・ナデ	C	④丹塗り ⑤浅黄・褐灰	
636			⑯ミガキ ⑰ナデ		④丹塗り ⑤黄根	
637			⑯回転ハラケズリ・回転ナデ ⑰回転ナデ		④灰 ⑤灰白	
638			⑪ミガキに近いナデ ⑫⑬ナデ		④浅黄根 ⑤にぶい黄根	二次的火熱を受ける
639	SE5	SE5	⑭⑮ミガキ ⑯⑰ケズリ	C	④浅黄根 ⑤浅黄根・灰	
640			⑭⑮ミガキ		④にぶい黄根 ⑤浅黄根	
641			⑪ナデ・刺目 ⑫ナデ	C	④⑤にぶい黄根	スス付着著しい
642	E-F4	IIIa	⑭⑮工具ナデ	C	④浅黄根・橙 ⑤浅黄根	
643	G-3	IIIa	⑭⑮ナデ	C	④灰黄・浅黄 ⑤にぶい黄・浅黄	貼付充満
644	SE8		*	A	④にぶい黄根 ⑤明黄根	貼付充満
645	D-9	-	⑭⑮工具ナデ ⑯ナデ	C・D	④浅黄根 ⑤浅黄根・橙	

表28 土器観察表(24)

No	遺構・区	層	調査および文様	出土 (遺物)	色調	備考
646	R-5	IIIa	ケズリ		褐・にぶい黄橙	

表29 土器観察表(25)

## 第5節 中世の遺構と遺物

### (1) 概要

中世（一部は古代末に遡る可能性あり）の遺構に関しては、出土遺物があまり多くなく、詳細な時期の比定の可能性なものが多いため、様相の把握が困難となっている。

溝状遺構のうち、S E 1とS E 2を除くS E 3～S E 8は近世・近・現代の区画溝と見られる。

### (2) 壁穴住居

#### S A 1 (図147)

B-13区で検出された方形の壁穴住居で、東側は調査区外となり、谷に向かう。西側でS C 2と接し、北東側でS C 3に切られる。

一辺の長さは3.1m、検出面から床面までの深さは40cmを測る。床面は薄く貼床がなされる。また、壁帶溝を巡らしており、その内側は5～10cm程度盛り上げている。壁面近くで柱穴と見られるPitを5基検出している。いずれも径15～30cm程度の小さなものである。

遺物は少なく、648の石鍋以外は、数点の古墳時代の土師器が見られた程度である。後者は埋没時に混入したものであろう。

#### S A 1 出土遺物 (図148)

鋸が付き、体部から口縁部にかけて内弯するB-1群に属する。残存部1/6の破片である。復元径19.7cmの小形の滑石製石鍋である。外面にはススが付着している。

### (3) 掘立柱建物

#### S B 1 (図149)

D-E-12区で検出された梁行1間、桁行3間の東西棟の建物で、梁行柱間は3.1m～3.45m、桁行柱間は1.6m～2.05mである。主軸はN-80°-E、床面積は17.10m<sup>2</sup>を測る。

遺物は出土していないが、近くに位置する小穴から土師器の杯(656)が出土しており、時期比定の参考資料となろう。

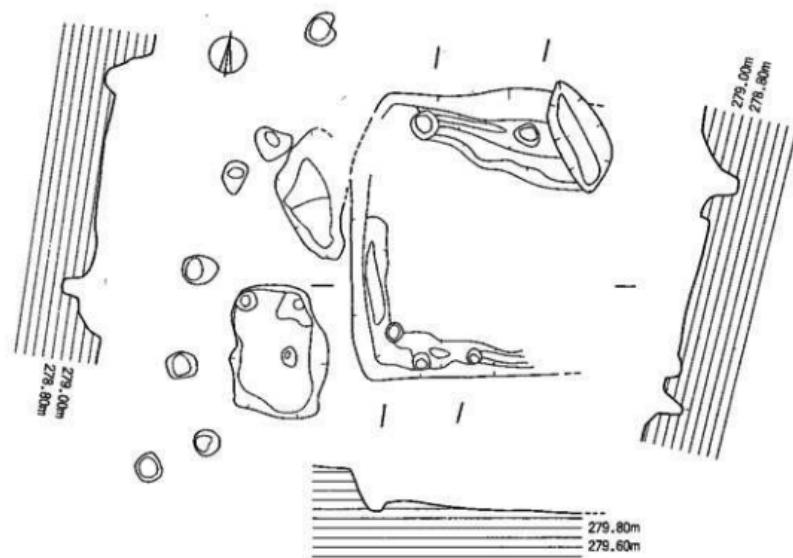


図147 SA 1 (1/60)

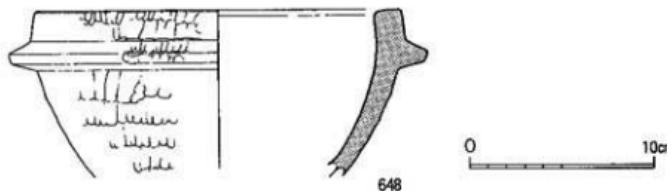


図148 SA 1 出土石鍋

(4) 溝状遺構

SE 1 (図150)

B-10区からF-12区にかけて、丘陵を切断する形で弧状にのびる。B-10付近の最深部で検出面から170cmの深さがあり、基盤の礫層に達している。D・E区の中央部付近は浅

くなってしまっており、図151の断面1に見られるように、傾斜が緩やかになっている。E-11区には狭隘部がある。

断面1の黒色土（5）を観察すると、南側から流れ込んだような堆積状況を示している。これが溝の掘削時に掘り上がったV層土と想定すると、南側すなわち切断された先方側に土壘が存在したことになる。

出土遺物は前述の通り、埋没時に流入したと見られる縄文土器や古墳時代の土師器が多く、

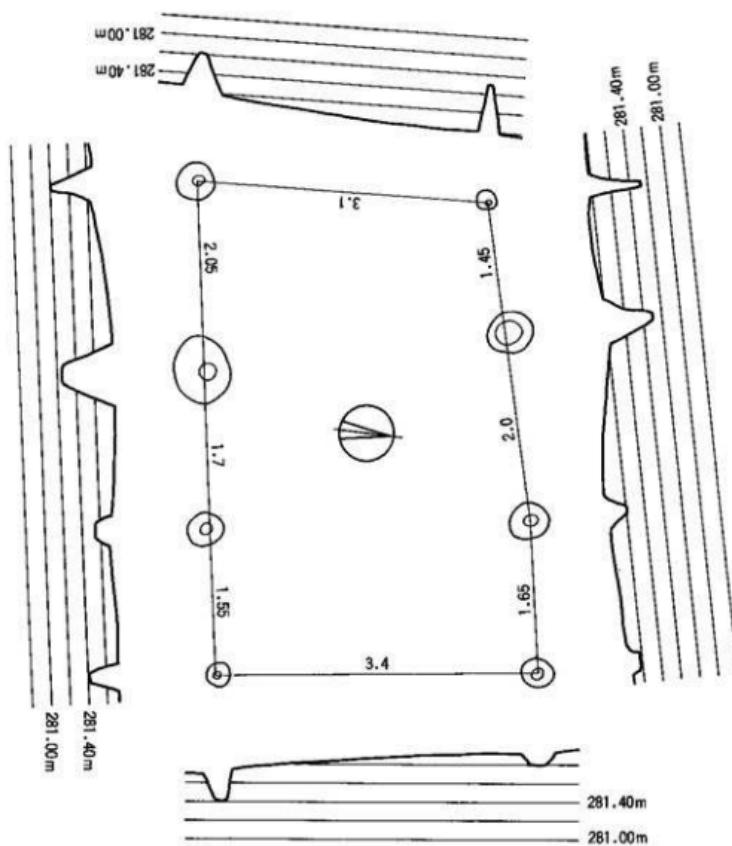


図149 SB1 (1/60)

遺構の構造あるいは使用の時期を示す遺物は少ない。わずかに図示した3点が目立つ程度である。

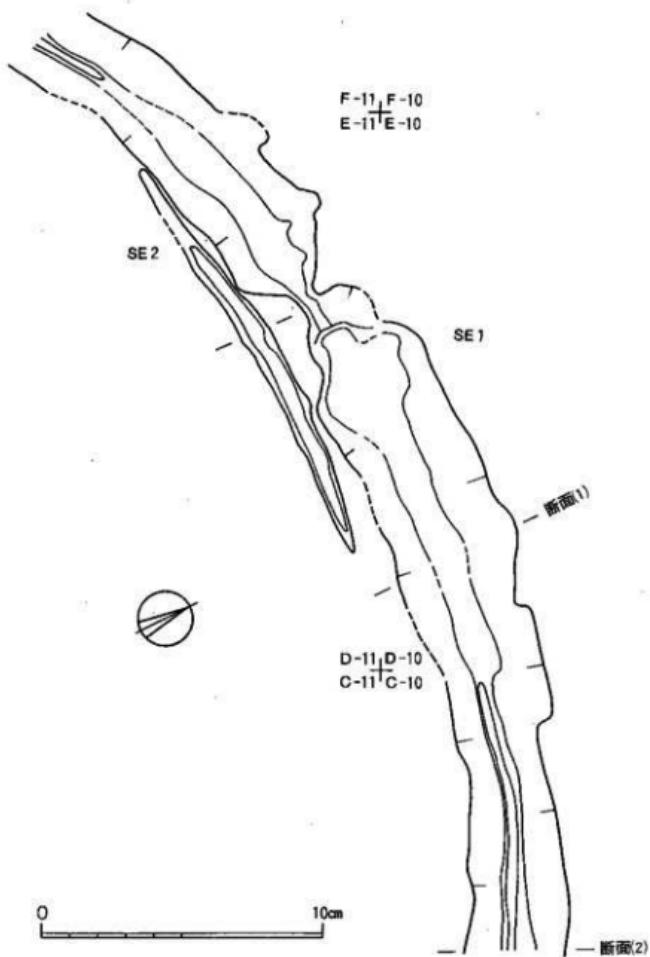
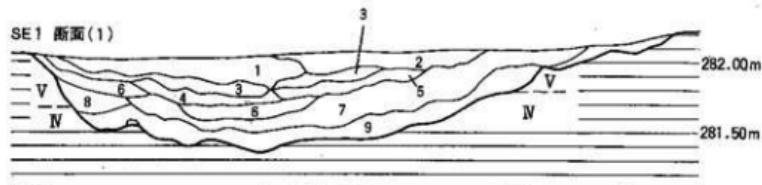


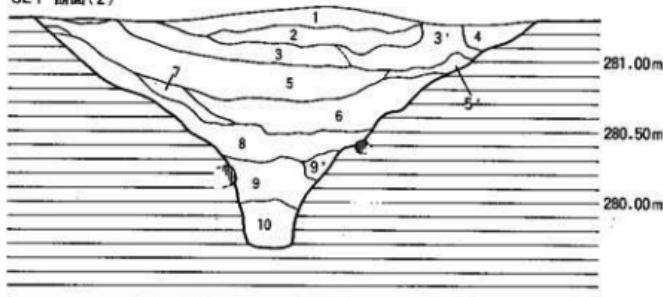
図150 S E 1・S E 2 (1/200)

SE 1 断面(1)



- |              |                                |
|--------------|--------------------------------|
| 1 にぶい黄褐      | 6 暗褐 きめ細か                      |
| 2 1よりやわらかい   | 7 暗褐 A h バミス混                  |
| 3 にぶい黄褐 かたい  | 8 7と色調似るがやわらかい                 |
| 4 黒褐 かたい     | 9 暗褐を基調とするが、A h ブロック・黒色土を含みまだら |
| 5 黒褐 4よりやや淡い |                                |

SE 1 断面(2)



- |                             |                                |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 樹木多量含む 褐色土                | 6 暗褐 A h バミス・礫少量混              |
| 2 にぶい黄褐 A h バミス少量混          | 7 6よりも白色の小礫を多く含む               |
| 3 2と似る、やや淡い。3'は黒味強          | 8 暗褐 磨混じり                      |
| 4 黒褐 やわらかい                  | 9 にぶい黄褐～橙色の礫多量混、基盤層起源          |
| 5 黒褐 断面(1)の4に対応、5'は<br>やや淡い | 10 9との層界不明瞭。9より赤味増し礫が大<br>きくなる |

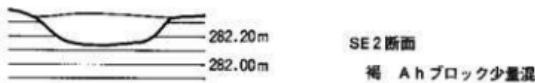


図151 SE 1・SE 2 土層断面 (1/40)

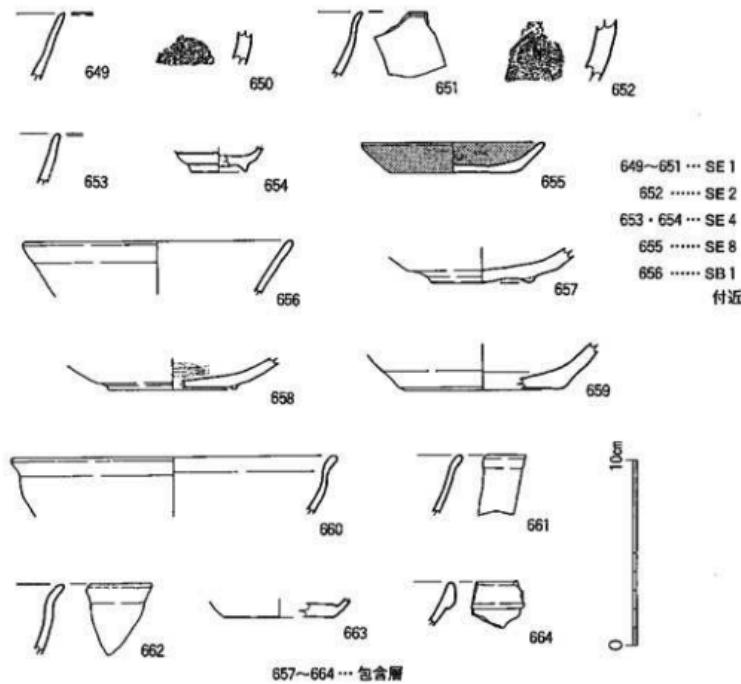


図152 SE 1～SE 8 包含層出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

#### SE 1 出土遺物 (図152)

649は土師器の杯。かなり摩滅した小破片である。650は布痕土器の、これも小破片。651は青磁碗である。

#### SE 2 (図150)

D・E-11区でSE 1と並行する。上部の削平もあって、深さ20cm程となっている。やはりSE 1同様、出土遺物は少ない。布痕土器を固化し得たのみである (652)。

#### SE 4～SE 8 出土遺物 (図152)

653は土師器の杯の小破片。654は彫線の巡る染付である。655は黒色土器の皿のB類。ヘラ切り底である。

(5) 包含層出土遺物 (図152)

657は土師器の高台付椀で、摩滅が著しい。658は瓦器質土器の椀で、低い高台を貼り付けた。内面はよく磨かれ灰黒色を呈する。660~662は青磁椀。このうち662は白磁に近い色調を呈する。663は白磁皿である。664は玉縁口縁の白磁椀である。これらは全てI層出土である。

No	遺構・区	層	調 整 お よ び 文 標	黏土 (直入物)	色 調	備 考
649	S E I		回転ナデ	C・織	回転	
650			ナデ 回転		*	
652	SE2		*	織	回転黄橙	
653	SE3		回転ナデ?	C	回転	風化著しい
655	SE8		ミガキ		灰白・黒褐 回転	ヘラ切り底
656	SB1 付近		回転ナデ?	C	黄褐 回転黄・灰黄褐	
657	R-4	T	回転ナデ ミガキ?	C	淡黄 黄褐・淡黄	摩滅
658			回転ナデ ミガキ		淡黄 回転	
659	H-2	I	回転ナデ	C	回転黄・灰黄 回転黄	糸切り底

No	遺構・区	層	種 别	法量(単位cm)	粘土 (色調)	色 調	備 考
651	SE1		白織		灰白	明オリーブ灰	
654	SE4		染付	2.8	白	明緑灰	
660	B-14	I	青磁	17.7	灰白	灰	
661	B-14	I	*		灰	灰オリーブ	
662	C-11	I	*		灰白	明オリーブ灰	
663	B-14	I	白磁	6.1	白	灰白・灰オリーブ	
664	H-3	I	*		灰白	灰白	

## 第6節 まとめ

### (1) 縄文時代に関するもの

#### 縄文時代の遺構

本遺跡は、出土土器の型式から縄文時代早期の長い期間にわたって営まれたことが窺え、このことは、南向きの緩斜面を成す丘陵にあり、付近に湧水も見られるという好条件に起因すると考えられる。しかしながら、今回の調査で検出した遺構は、集石遺構が13基と、同一面上に広がる礫群のみであり、土器出土量の多さを考慮すると、居住関連の遺構が検出されていない点は疑問が残るところでもある。V層まで完掘して遺構検出精査を行なった範囲が限られていたという点も要因として挙げられるかも知れない。もっとも、遺跡が大規模であっても堅穴住居等の住居関連の遺構が見られないという事例は、該期の南九州の遺跡ではしばしば見受けられる。平地住居など、検出の困難な住居が卓越していた可能性も想定されている。また本遺跡がキャンプサイト的性格を持つものであったということも考えられる。磨石・石皿の類や伐採具の石斧が少ないことも根拠の一つとして挙げられる。

検出された集石遺構は、ほとんどがIV層とV層の層界付近に構築されており、後に述べる土器の出土レベルの関係から、早期の手向山式・平格式・平格式前段階としたもの・塞ノ神式といった土器型式との関連が深いと考えられる。

構造については、地面をわずかに掘りくぼめるもの(S I 1やS I 6など)もあるが、多くは平面的に礫の集積がなされるものである。いずれにしても、しっかりした掘り込みや底石を有するものは皆無である。このことは、現在想定されている当地域の早期後半の集石の在り方と合致している。

さらに、この種の遺構を理解する上で必要となる作業工程の復元に関して、次の点を指摘することができる。まず、集石遺構の構成礫のほとんどが赤く、脆く変化しており、肉眼観察でも火熱を受けたことが推測されること。また完形の礫が大部分である集石遺構が多い中で、S I 6・S I 9は破碎礫が多い(S I 10にも若干含まれる)という点。このことについては確定的ではないが、例えば使用しなくなった遺構、あるいは再利用のための準備段階という見方ができよう。さらに、集石遺構の付近に分布する礫の中には、特に変化の見られないものも多く含まれるということも挙げねばならない。準備段階の在り方の一つの可能性を示すものであろう。

ただし上記の点については、今回、何ら数量化を成し得なかつたために説得力に欠けるきらいがある。また(現段階において)考古学的に最も精密な方法である、全ての礫のサンプリングを基にした、個々の礫や観察や礫どうしの接合関係の追求もなされていない。今後、近似する時期あるいは性格の遺跡の調査が行なわれたとき、十分に比較検討を行ないながら

再考すべきであると考えている。

#### 土器の出土層位

再び早期の土器型式と出土層位の関係について触れてみよう。

まず、V層中におそらく生活面が存在すると考えられるのが、早期でも古い時期に位置づけられる前平式など貝殻文円筒土器の古段階に属するもの。次いで石板式など貝殻文円筒土器の新段階・条痕文円筒土器・押型文系土器が現われる。と言っても出土レベルにそれほど差はない。若干IV層出土資料が増える程度である。

集石遺構の項でも触れたIV層とV層の層界付近では、早期後半に属する手向山式・平格式・平格式前段階としたもの・塞ノ神式のまとまった破片が出土している。「まとまった」とは言うものの、例えば28の塞ノ神式は、10mをこえる距離の平面移動を示している。

さらに、「アカホヤ」層下部の降下軽石・火鉢流の直下から、条痕文系土器が出土している。大きな破片というわけではなく、鬼界カルデラの爆発により被災したと積極的に言及できる状態ではなかったが、摩滅はしておらず層の堆積に平行な（生活面に張りついている）「面上の分布」の状態を示している。ただし、平面的にも塞ノ神式などとは離れた地点であるため直接的に、出土レベルの上下の論議できないという解釈もあり立つかも知れない。

確は垂直移動が少なく、原位置を保ちやすい。一方、土器片は層の形成段階に移動し、生活面より10cm程度上方の垂直位置を示すものが多いといふ。この指摘も踏まえて、出土土器と層位の関係を模式的に示したもののが図153である。

#### 出土土器について

手向山式以降の土器について、若干の総合的考察を行ないたい。

該期の土器型式の変化やそれぞれの系譜を巡って、複数の異なる見解が示されている。以下、研究の現状を理解する意味で、今日的な形を整えるようになった河口貞徳以降の論考についてごく簡単に紹介してみよう。

河口貞徳は、層位や文様の系統の考察を基に、手向山式→平格式→塞ノ神式という変化を説き、早期に見られた各種の文様が融合する手向山式の段階からを前期と認定している。

新東晃一や多々良友博は、平格式と塞ノ神式を系譜の異なる型式群と捉えている。

新東晃一は貝殻文円筒土器からの流れである塞ノ神式の系譜（小林達雄「様式」概念を用いて）と、手向山式と縄文・撚糸文が融合して成立した平格式「様式」の系譜という2系統を想定している。

多々良友博は、凹線文・連点文・縄文を施文するJj型、口縁部に刺突文・貝殻刺突文、胸部に充填縄文・凹線文・連点文を施文するJk型、刺突文・貝殻刺突文・貝殻条線文を施文するKk型の3つの系譜が存在するとし、手向山式をJj型・Jk型の祖型式と考えている。

それに対して松永幸男は、器形・文様の相関関係を分析し、塞ノ神と平格式を单一系統に連なる型式と結論付け、從来の塞ノ神式から平格式への変化を想定している。

また木崎康弘は、熊本県山江村の大丸・藤ノ迫遺跡の出土土器の分析を基に、器形について「円筒形→口縁部が外反」、文様帶について「重疊化」という傾向を導き出し、石坂式→吉田式→前平式→塞ノ神式→平格式という変化を考えている。

こうして見てきたように、平格式と塞ノ神式の前後関係、單一とするか、複数とするかという系譜の捉え方などが、問題点として認識されよう。

さて、本遺跡出土土器にたちかえってこの問題を考えた場合、幾度となく触れてきた平格式前段階の土器が重要な位置を占める。次段でやや詳しく述べるが、結論から言えば、手向山式と平格式をつなぐ土器型式とすることができる。

ただし、平格式・塞ノ神式期に複数の系譜が存在したかどうかという点については、今回の調査では解明のための情報を得ることはできなかった。新東見一の三代寺式と本遺跡出土の貝殻文円筒土器との間にはヒアタスが認められることなど、問題点も存在する。おそらくこのことについては造構内での共伴などの事実があらわれてこない限り、解決しないであろう。

さらに、「アカホヤ」層直下から出土した条痕文系土器の位置づけも残された大きな問題である。これについては本遺跡の他の土器に出自を求めることができない。色々な想定も可能であろうが、今回は残念ながら事実の報告にとどまらざるを得ない。

#### 平格式前段階の土器について

先にそのように仮称した土器群についてここで考えていくたい。

口縁部は手向山式に似ており、なだらかに外反する。わずかに波状となるようである。口縁部にはしばしば瘤状の隆起が見られる。口縁部を中心に刺突文を付す貼付突帯を巡らし、胴部には縄文を施す。胴部234・239のようにわずかに張るか、242のように屈曲を残す形態となる。底部の判明する資料は残念ながら存在しないが、わずかに上げ底になるのであろうか。胎土の特徴から289・290あたりが候補として挙げられる。

この一群と前後の土器型式を比較してみよう。

まず、直前に位置する手向山式は、在來の押型文に加えて凹線文や貼付突帯といった文様要素が加わり、複雑な施文パターンが認められる。その中でも、19・22などの、凹線文の三角形施文の一群が、これにつながる微妙な位置にあると言える。器形の面から手向山式の終末期の屈曲が消滅する、もしくは痕跡程度となる時期の所産と考えられる。このことは凹線文・刺突文の文様要素が以降の型式に踏襲されることからも首肯されよう。胴部の屈曲の痕跡は少量ながら平格式においても認められるようで、鹿児島県鹿屋市・前畠遺跡<sup>12</sup>に確認例がある。この19・21の一群は口縁部形態も平格式前段階のそれと共通する。数条の貼付突帯を

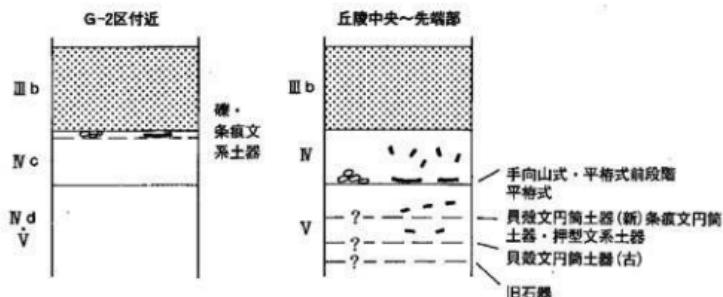


図153 土器型式と出土層位

器形	貼付突帯	押型文・繩文	凹線文・刺突文	その他
手向山式 終末期				
平柄式 前段階				瘤状突起
平柄式 stage 1			(結節)繩文 	
平柄式 stage 2			(結節・結束)繩文 	

図154 手向山式～平柄式 器形と文様

巡らす。

後続する型式である平柄式は口縁部を肥厚させるか、端部が内弯するいわゆるキャリバー状となる。その中でも古段階のものは、未確定の部分も多いが、口縁部を玉縁状に肥厚させ（肥厚帯の幅が狭いものがより古く遡るという）、そこに羽状の凹線文を施文する。胴部以下の文様は、貼付突帯や凹線文・刺突文、それに繩文などで、文様要素としては前段階のものに凹線文・刺突文が希少である点を除き、ほぼ共通するようである。この平柄式に見られる口縁部の肥厚帯については、密に巡らされた貼付突帯からの変化を想定したい。思いつきの域を出るものではないが、先の手向山式の終末期とした一群や平柄式前段階の貼付突帯に付された刺突文は、平柄式の口縁部肥厚帯の羽状の凹線文につながる可能性もある。この点に関連する手向山式の終末期の資料は熊本県の大丸・藤ノ追遺跡や天道ヶ尾遺跡、白鳥平A遺跡でも出土している。あるいは平柄式前段階に見られる瘤状突起も、口縁部の強調という意味で関係があるのかも知れない。

以上について簡略化して表現したのが図154である。これは本遺跡の出土資料と、鹿屋市：前畠遺跡の資料を基にして製作している。従って、豊富なバリエーションを有する該期の土器の特徴を網羅するものではない。

この平柄式前段階の土器群については、前出の天道ヶ尾遺跡で比較的まとまった量が出土している。その他、宮崎学園都市遺跡群の小山尻東遺跡出土の土器や前出の人吉市・白鳥平A遺跡の資料が、近い関係にあると見られる。天道ヶ尾遺跡の報告においては、天道ヶ尾式と称され、やはり手向山式と平柄式をつなぐ資料と位置づけられているが、そこでの考察では平柄式→手向山式という、今回の想定とは逆の序列が示されている。小山尻東遺跡のものは、凹線文を施す点でむしろ19・22などの手向山式の終末期の一派に近いが、胴部の屈曲が見られないという器形や瘤状突起はより後出の要素と言える。

さて、この平柄式前段階（天道ヶ尾式と称されたもの）が型式として成立するとした場合に、どのような在り方をしているのであろうか。想定されるパターンは3通りある。

まずは手向山式と平柄式の間の型式として一時期を形成する場合である。残りの2つは、亜型式と呼ぶべき、型式より下位の分類概念にあたる場合で、ごく短期間の時間的亜型式である場合と、ある狭い範囲のみに分布する空間的亜型式である場合と考えられる。このことは今後検証されるべき問題である。

#### 石器について

縄文時代の石器・剝片の総数は18,000点弱に上る。このうち大部分は剝片・細片の類で、土器の出土状況から早期に属すると見られる。以下、主要器種についての若干の所見を記す。

石錐については製品もさることながら、その未製品の多さが注目される。小形の原礫の多さや小形の剝片を剥出するものが多いことなどを考えると、当地は石錐製作地であるとの推

測も成り立つであろう。対して、前述の通り伐採具（石斧）の出土数は少ない。

楔形石器は宮崎県内では初の確認例である。早期の遺跡に見られる環状石斧については、動物解体用の道具との推定もなされている。<sup>19</sup>

今回報告できたものは、各器種の典型例のみであり、分類そのものも再検討の余地ある。黒曜石の産地同定も課題として残されている。

## （2）古墳時代に関して

### 出土土器の編年的位置

多量に上る本遺跡出土の古墳時代の土師器は、遺構出土のものと言えどもその多くが覆土中からまとまりなく出土しているという状況から、一部を除いて一括埋没の資料とは認め難い。ここでは住居廃絶後に投棄されたと見られる S A12 と S A24、それに須恵器を出土した S A18 の資料について、他地域の該期の土器との比較検討や伴出する須恵器の年代観を基に甕を中心にその編年的位置を推測してみたい。

甕の変化は口縁部の形態（外反あるいは内弯の度合い）にあらわれる。時間的に下るほど、貼付突帯（口縁部を肥厚させるものを含む）を有するものの割合が高くなるようであるが、無いものも少量ながら見られる。

S A12・S A18 と S A24 の甕を比較した場合、後者はわずかに外反する口縁部となるのに對して、前者は直口か内弯する形状となり、より新しく位置づけられる。

S A12 の甕と同じ特徴を持つものは、S A4・S A9・S A19などより出土している。406に見られる口縁部を肥厚させる手法は、薩摩半島の諸遺跡において散見されるが、下端部に刻みを施す点は特異であろう。貼付突帯の簡略化と考えられ、甕の中では最も新しく位置づけることができる。

S A24 の甕と同型式のものは少なく、強いて挙げれば S A38 のそれが近似する特徴を持つ。S A29 の甕（560）は、口縁部外面に掻き上げ状の縦位の工具ナデの痕跡を残しており、若干古相を示す資料である。また S A24 の甕の中で、497 は球形に近い胴部になると推測される異質のものである。これもやや時間的に遡るものか。

このように、S A24 と同時期の資料が少ないと、また 2 基の竪穴住居が切り合っている場合、切られる側の竪穴住居には少量の遺物しか見られない例がほとんどであることから、それらの竪穴住居廃絶時には土器を S A24 に集中投棄したこととも考えられる。

このように、甕を指標にすると、大きくは 2 つの時期を設定することができよう。S A24 に代表される一群は、多々良友博による IV 期に、S A12 に代表される一群は同じく VII 期と並行すると見ている。

高杯については、一方では口縁部と受部の境の稜線が不明瞭となり、杯部が楕状になる流れが認められ、それとは別に、短く外反する口縁部と受部の境に明瞭な稜線形成される丹塗

りの一群が多量に存在する。502の形態の杯部から分化したものであろうか。

時期の判明する須恵器のうち、618の杯〔身〕がTK23かTK47段階で、5世紀末～6世紀初頭に比定できる。これはSA40の覆土中より出土した小破片で、SA24の時期と位置づけた。481の杯〔蓋〕と題はTK10段階で、6世紀中頃に比定できよう。いずれもSA18の床面直上出土。この年代観を基に作成したのが図155である。

尚、各遺構とも、丹塗りの器種の出土量の多さが特筆できる。小破片も多く、個体数の判明する例がなかったため、割合等の数値は示し得ないが、薩摩半島部の該期の遺跡でも同様の傾向が見られ、注目に値する。

#### 竪穴住居について

面積の判明する竪穴住居は多くはないが、10m<sup>2</sup>以下の規模の小さなものが多いことは明白である。最大でもSA2（2次床面）の15.68m<sup>2</sup>である。特に本遺跡よりやや古段階の集落である宮崎学園都市遺跡群の熊野原遺跡C地区のような、大規模な（最大で56.55m<sup>2</sup>）ものが見られないことが特徴と言える。

先に第Ⅱ章で触れた野久首遺跡のSA1（9.9m<sup>2</sup>）も加えて考えると、竪穴住居の規模の小ささは当地域（範囲の広がりは未確定）の特徴と結論付けることができよう。

遺構主軸は、平面プランの不明瞭なものが多かったため、断定的なことは言えないが、概略、北を基準に10°程度西に偏するものと、東に10°～20°偏するものという2群にグルーピングできそうである。しかしながら、先に設定した2期の様式とどう関わるかは判然としない。

#### 地下式横穴墓造墓集団との関係

6世紀代は地下式横穴墓との関係が問題となってくる。現在判明している川内川の右岸の地下式横穴墓群で最も距離的に近いのは、芋畠地下式横穴墓群で、直線距離で東南東約5kmのところにある。対岸の川内川左岸では、島内地下式横穴墓群が南西約2.5kmの位置に所在する。それらの墓制との関係を、ここで詳しく述べることは不可能であるが、第Ⅰ章でも触れたように当地域の古墳時代の集落は、このような高位の段丘・丘陵上に立地する可能性が大きいようである。

この他、竪穴住居からの鋳造鉄斧の出土も興味深い。この入手の容易でない道具（素材あるいは祭祀具か）を出土するSA2の性格はどのようなものであったのだろうか。そしてそれはSA2に帰属するものなのか。ちなみに、このSA2からは高杯利用のふいごの羽口も出土しており、鉄滓などの出土は見られないものの鍛冶工房であった可能性もある。

#### 中世の遺構

SA1の滑石製石鍋については、先に森田勉による分類・編年のB-1群に属するとした。生産年代は、径が小さい点を考慮して13世紀でも後半に下るものとしておく。その他の遺構

については遺物に乏しく、年代の決定に困難が伴う。仮に S A 1・S B 1・S E 1 が同一時期の遺構群とすると、深い溝で切断された防御的な小集落との推測が可能になろう。

以上、妙見遺跡の各時代の諸々の問題について検討を加えてきたが、はなはだ不十分な内容となってしまった。また理解不足に起因する誤謬や重要な点の見落としがあるかも知れない。しかしながら、それでもなお本遺跡の重要性は薄れることはない。今回公表した記録を基にした議論を経て、さらに多くの知見が得られることであろう。

(註)

- 1 新東晃一 1980 「火山灰から見た南九州縄文早・前期様相」『鏡山猛先生古希記念古文化論功』 同書刊行会  
などの一連の論文による。ただし、自然現象そのものを時期区分の画期とすることには若干の問題点を含む。
- 2 本田道輝 1986 「縄文時代」『鹿児島考古』20 鹿児島県考古学会
- 3 前追亮一 1993 「倉園B遺跡の再検討」『南九州縄文通信』7 南九州縄文研究会 4
- 4 徳永貞綱 1990 「九州の縄文時代集石遺構－研究の現状と課題－」『肥後考古』  
肥後考古学会
- 5 林 謙作 1973 「層序区分」『物質文化』21 物質文化研究会
- 6 矢島国雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』  
1 (未読)  
加藤晋平・岡崎里美 1987 「考古学の立場から見た土壤学」『土壤学と考古学』  
博友社
- 7 河口貞徳 1972 「寒ノ神式土器」『鹿児島考古』6 鹿児島県考古学会
- 8 新東晃一 1983 「塞ノ神式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣
- 9 多々良友博 1985 「塞ノ神式土器の文様構成－その分類と変遷の位置づけ－」  
『塞ノ神式土器－地名表・拓影・論考編－』 縄文研究会
- 10 松永幸男 1987 「寒ノ神式土器小考」『古文化談叢』18 九州古代文化研究会
- 11 木崎康弘 1985 「熊本県大丸・藤ノ迫遺跡の塞ノ神式土器について」『塞ノ神式土器－地名表・拓影・論考編－』 縄文研究会
- 12 高橋信武 1989 「轟式土器再考」『考古学雑誌』75-1 日本考古学会
- 13 新東晃一他 1990 「前畠遺跡(第六分骨) 一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う  
発掘調査報告書」 鹿児島県教育委員会
- 14 文章化はされていない。鹿児島県内における調査所見
- 15 木崎康弘他 1986 「大丸・藤ノ迫遺跡」 熊本県教育委員会

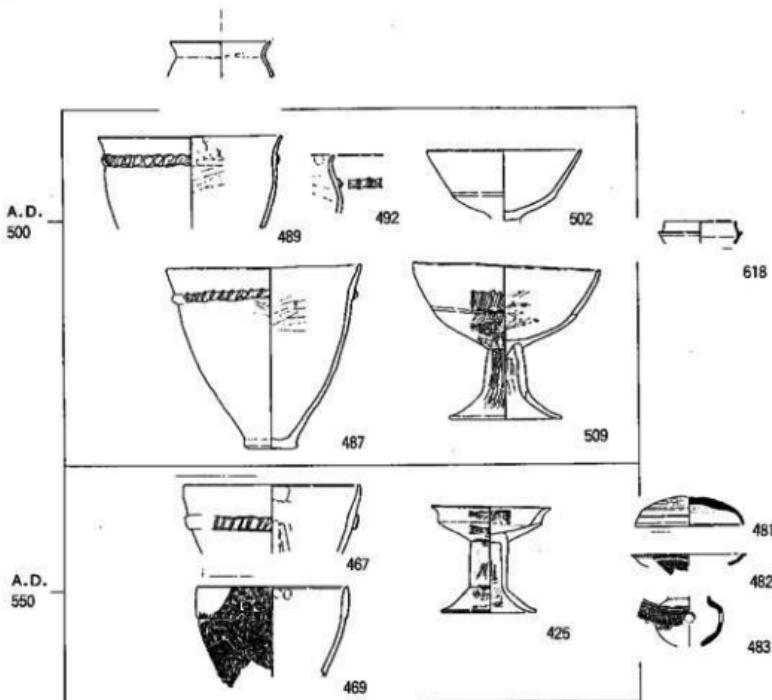
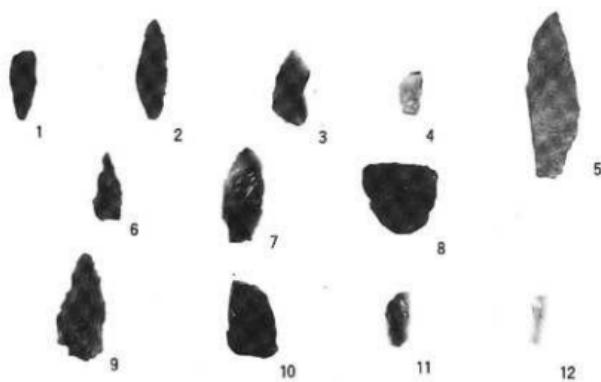


図155 主要器種の変遷

- 16 西住欣一郎他 1990 「天道ヶ尾遺跡」 熊本県教育委員会
- 17 宮坂孝宏 1993 「白鳥平A遺跡」 熊本県教育委員会
- 18 近藤 協 1985 「小山尻東遺跡」「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書」3 宮崎県教育委員会
- 19 近藤 協 1992 「環状石斧集成」「宮崎県総合博物館研究紀要」17 宮崎県総合博物館
- 20 多々良友博 1981 「成川式土器の検討」「鹿児島考古」15 鹿児島県考古学会
- 21 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 22 森田 勉 1983 「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」「佛教藝術」毎日新聞社

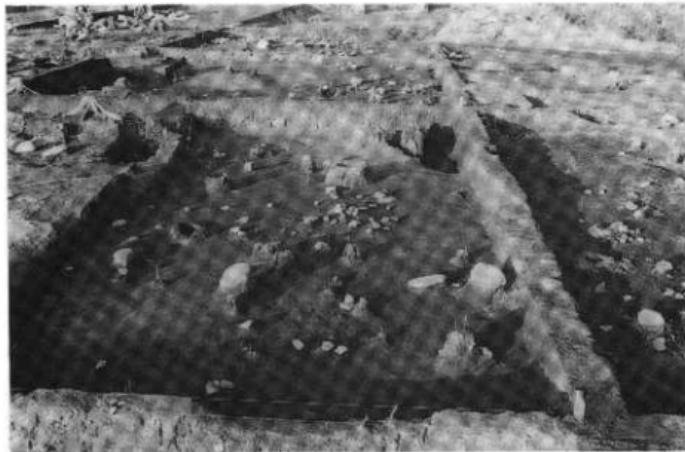
图版



1 旧石器



2 D-8区 遗物出土状况



3 D-9区 遺物出土状況



4 S18



5 S I 9



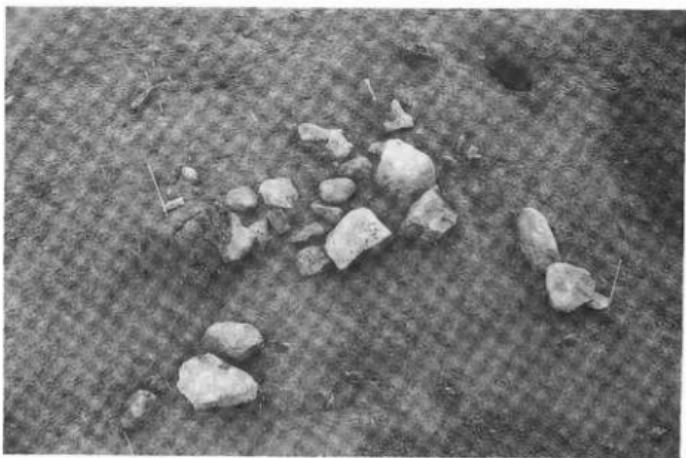
6 S I 10



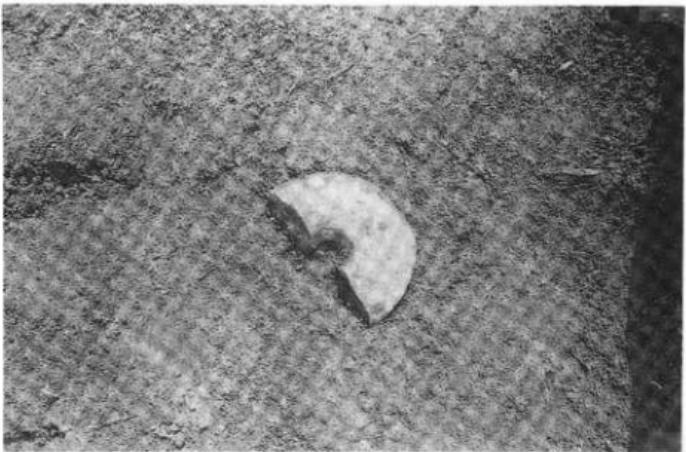
7 S I 11



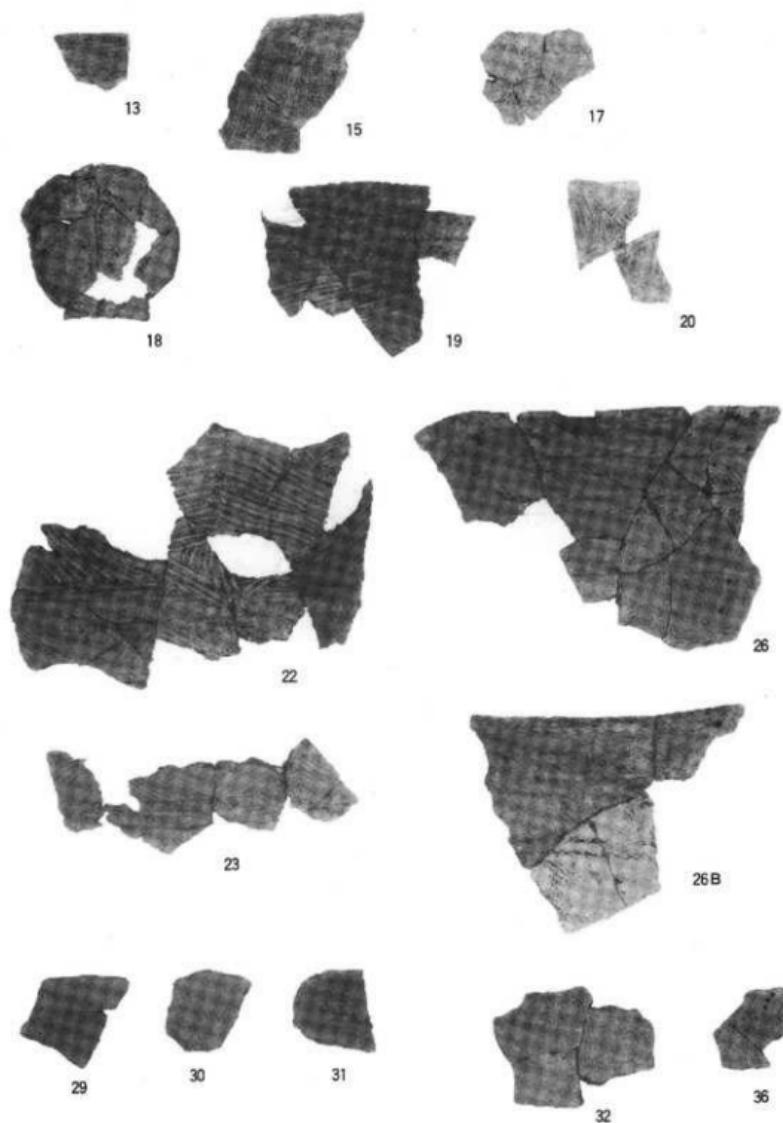
8 S I 12



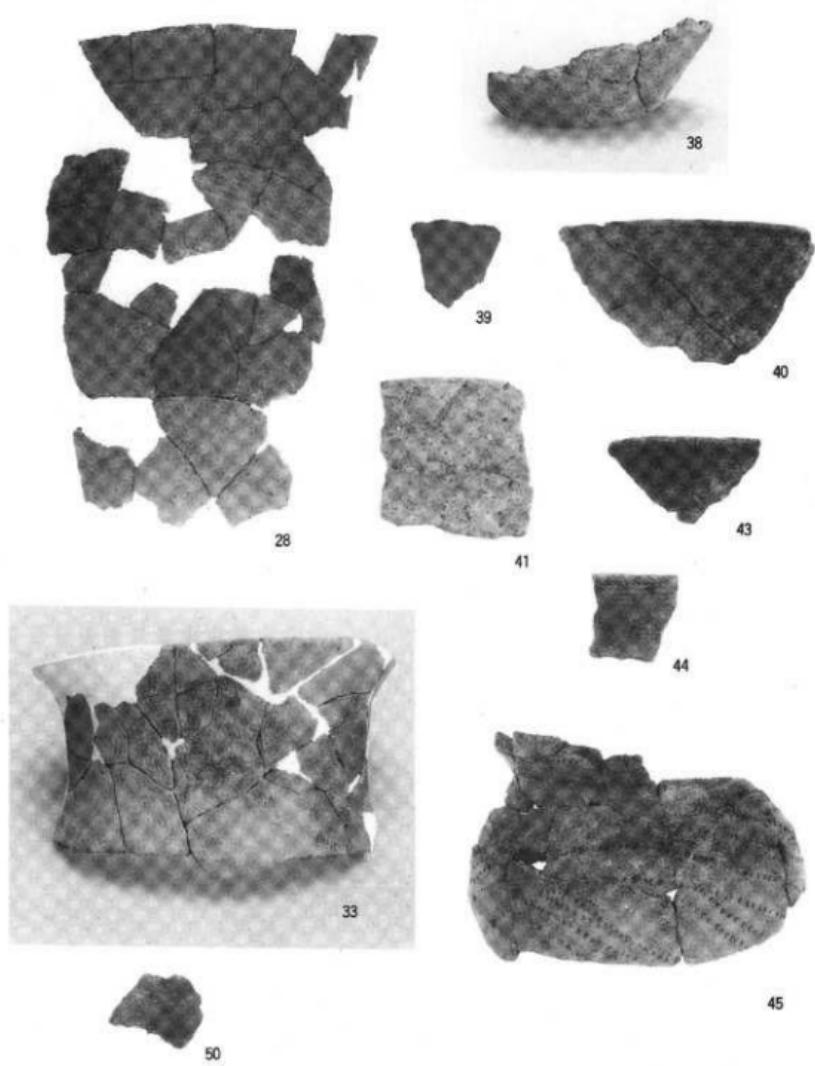
9 S I 13



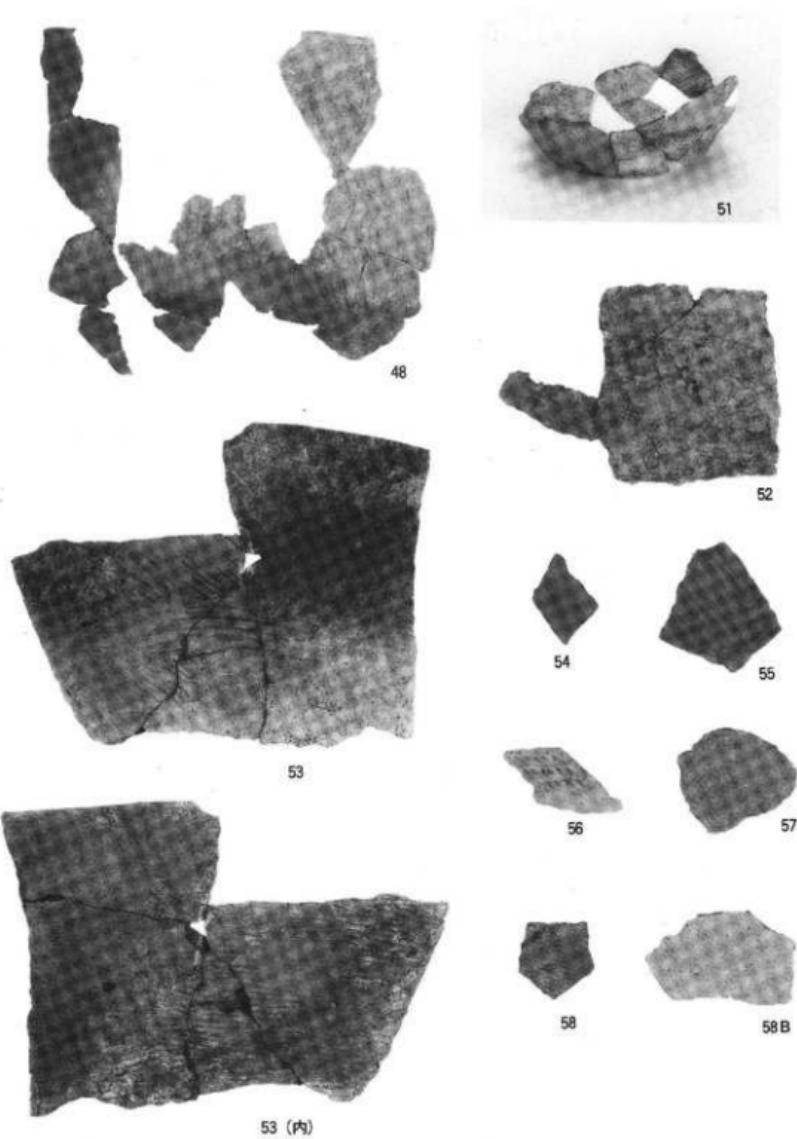
10 石器 (327) 出土状况



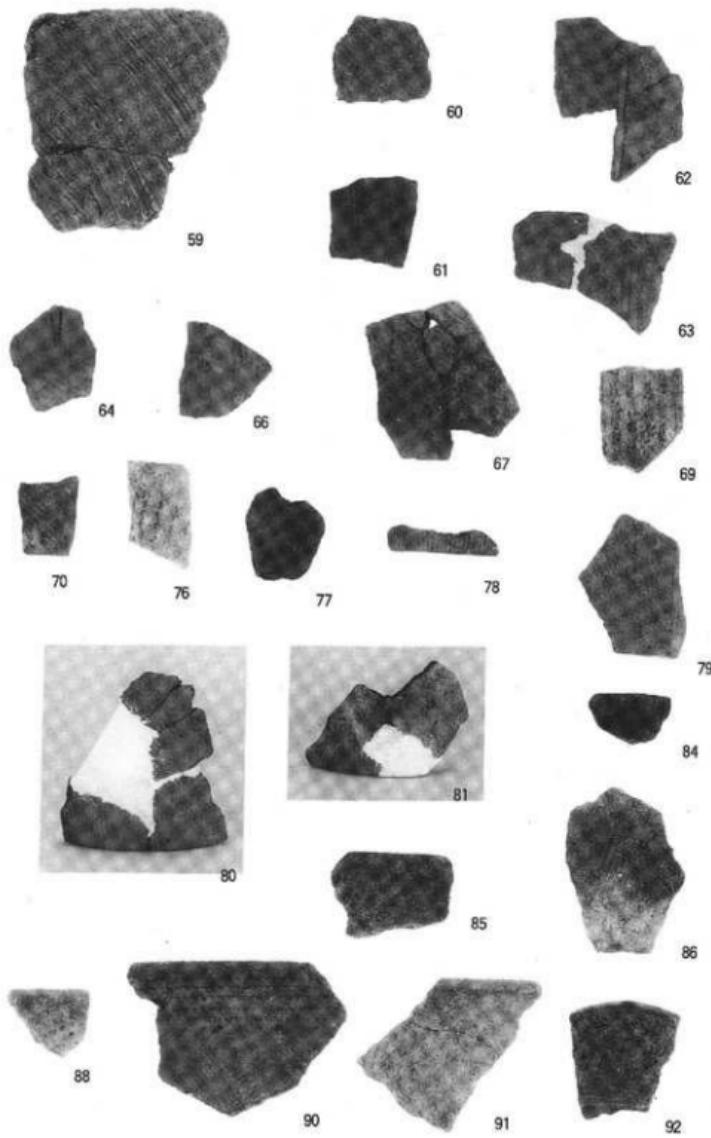
11 縄文土器



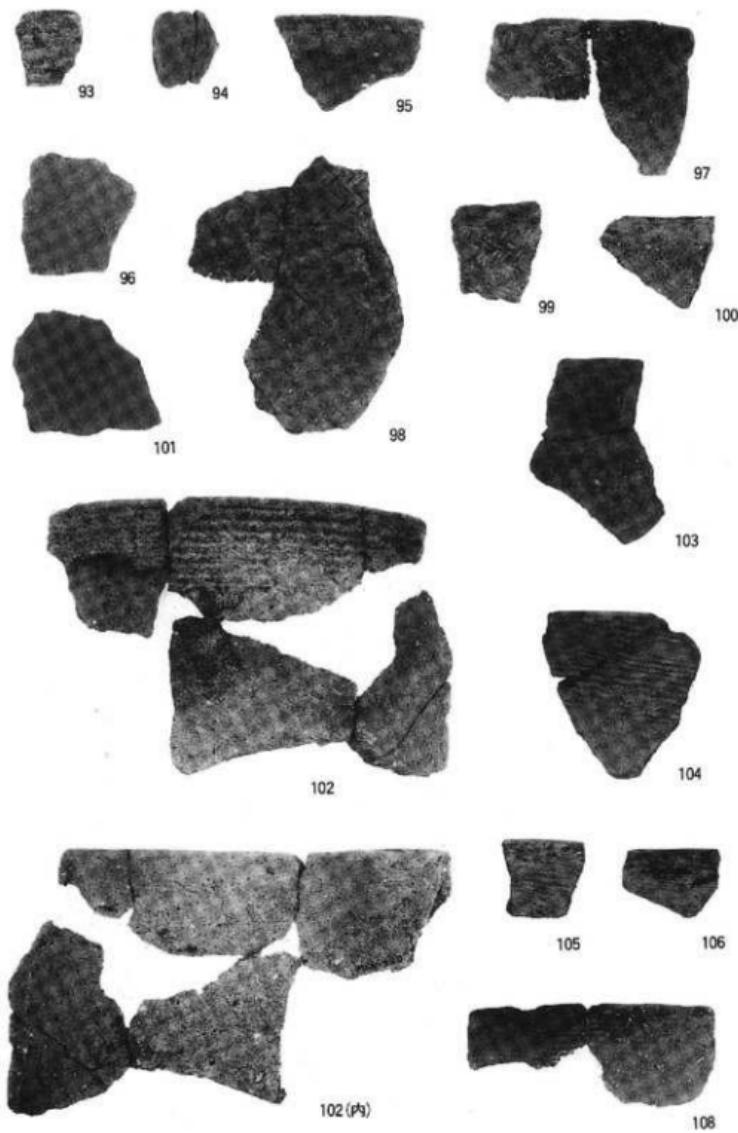
12 繩文土器



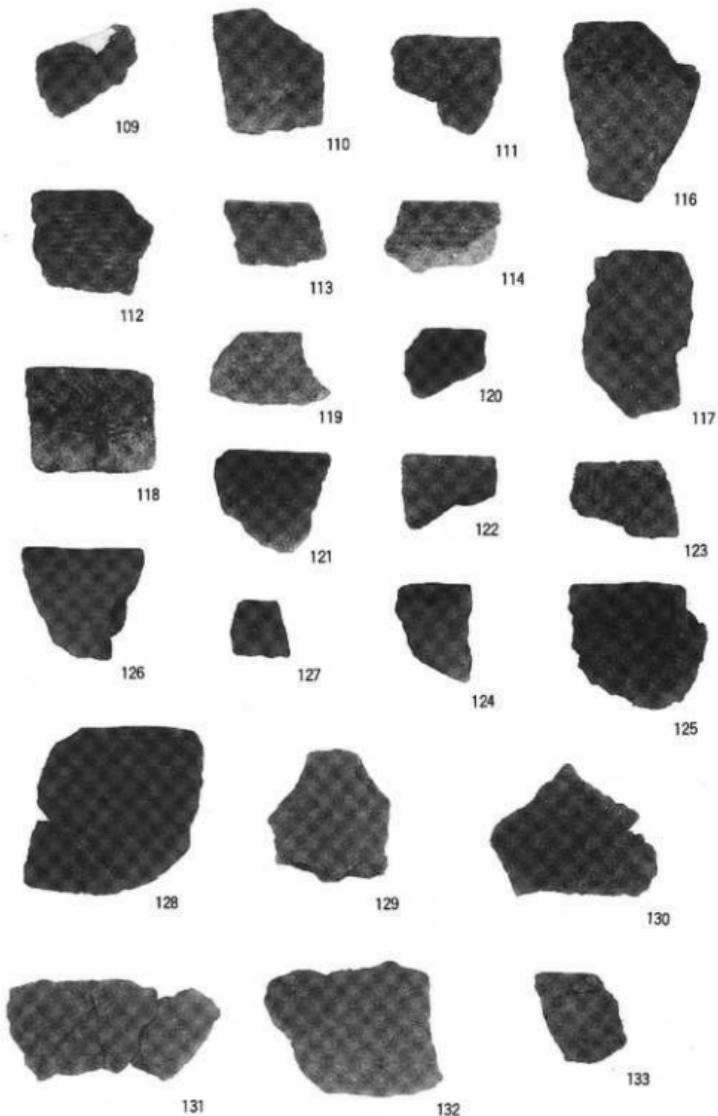
13 繩文土器

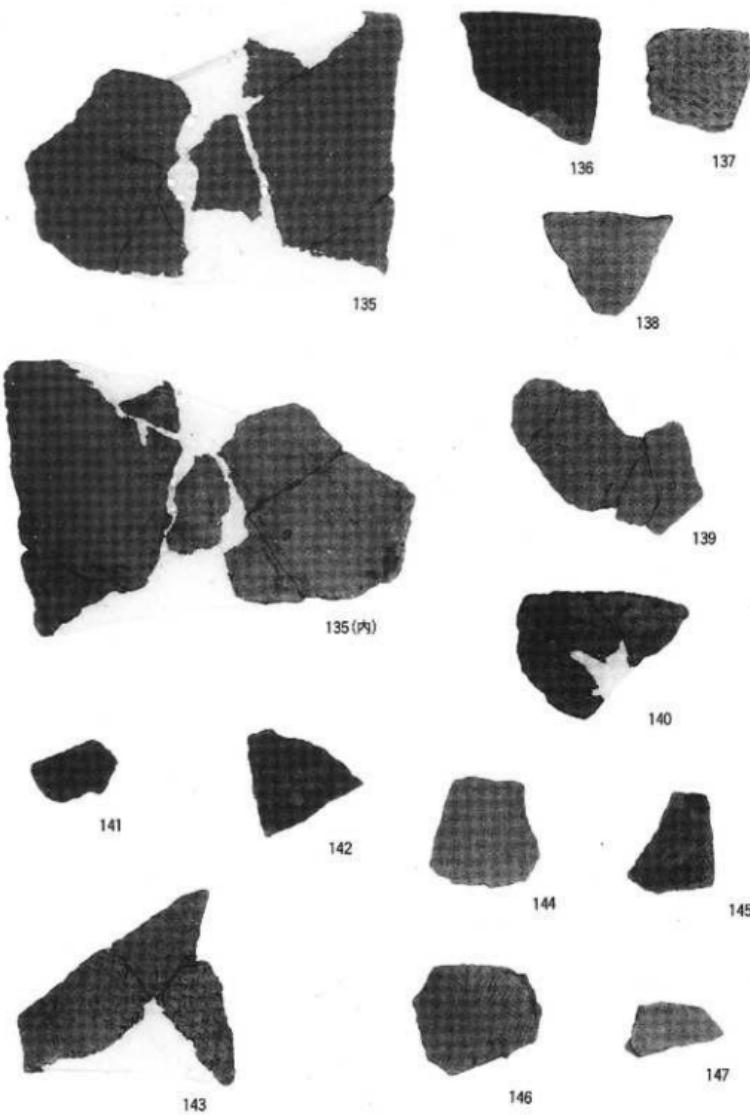


14 縄文土器

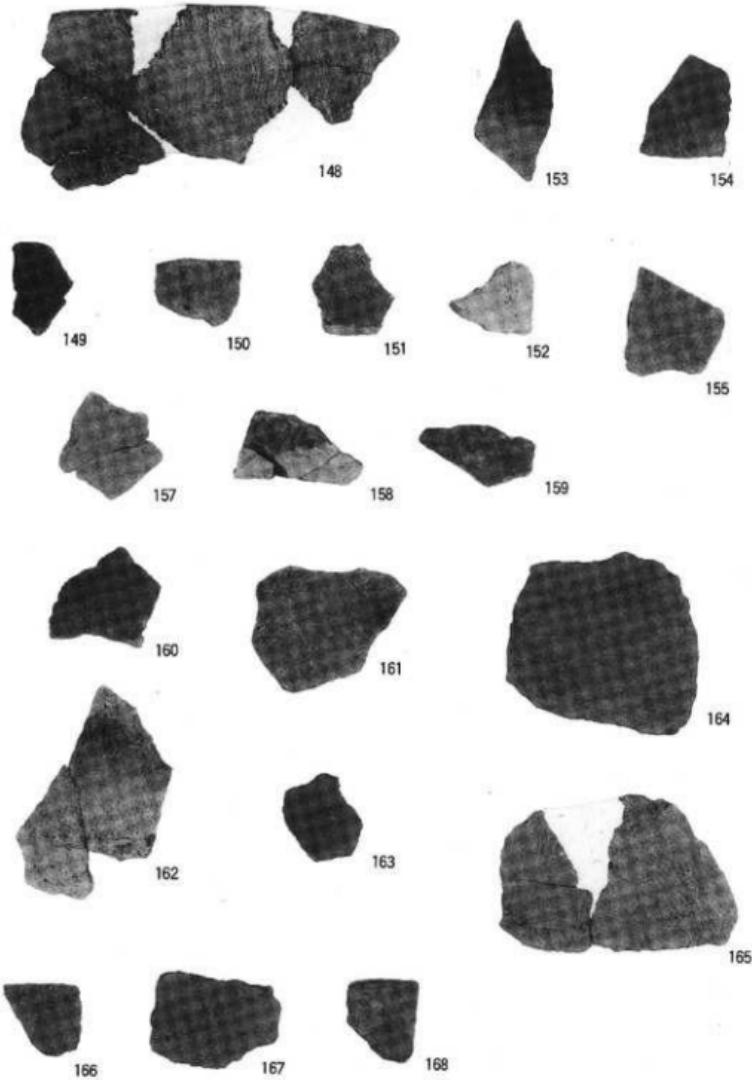


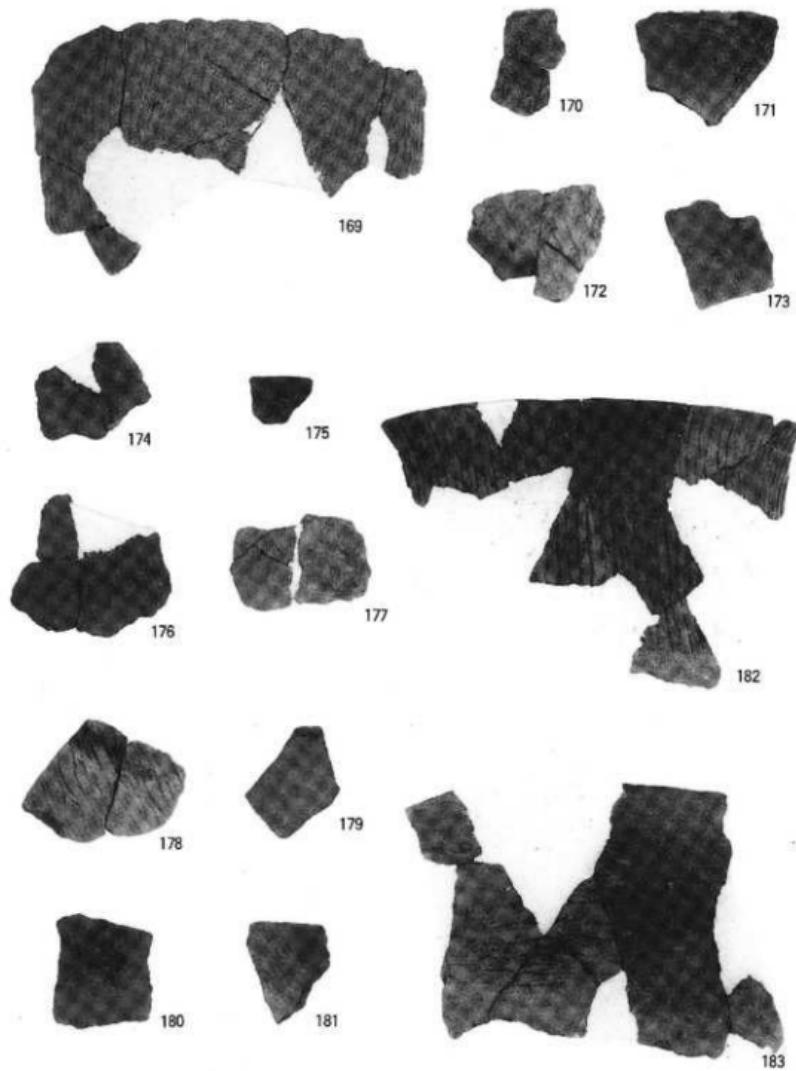
15 楊文土器



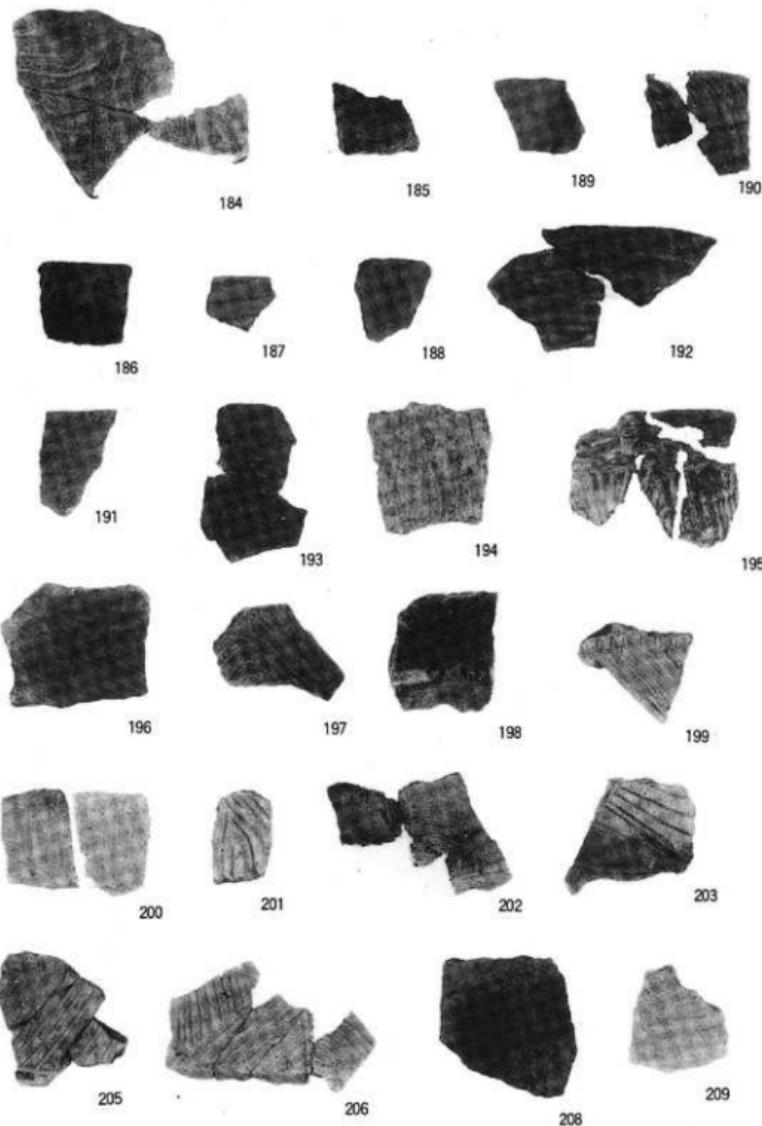


17 繩文土器

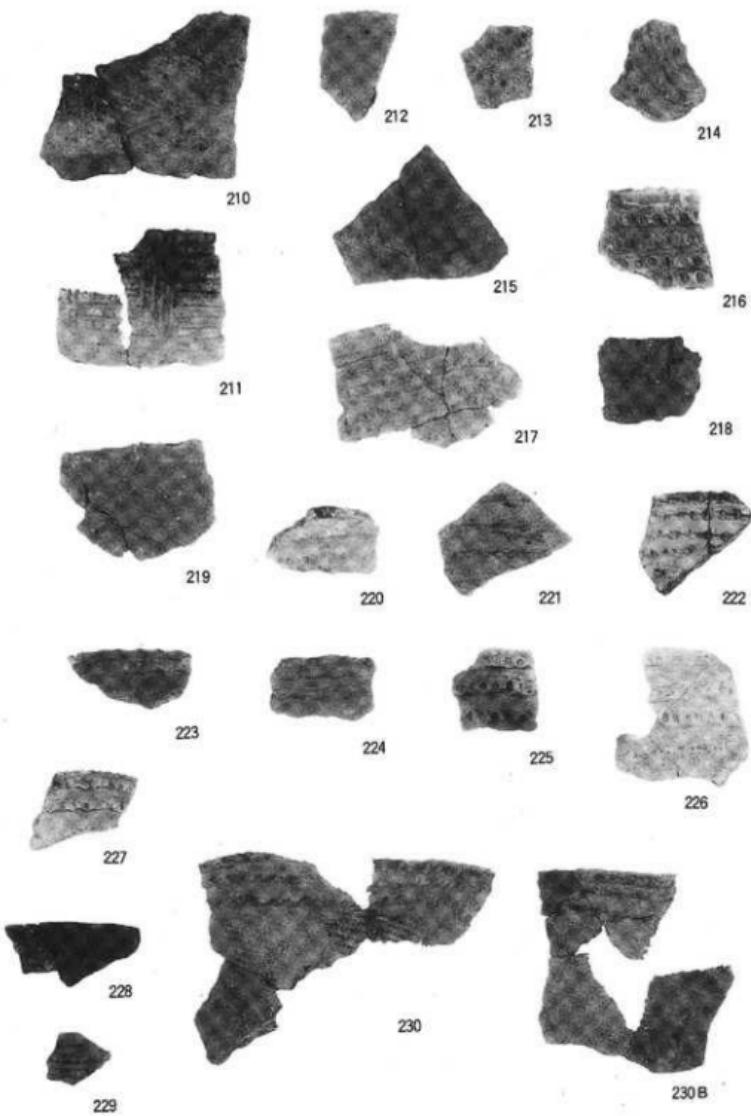




19 縄文土器



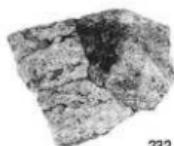
20 繩文土器



21 繩文土器



231



232



233



236



234



235



237



238



239



240



241



242



244



243



245



246



247



248



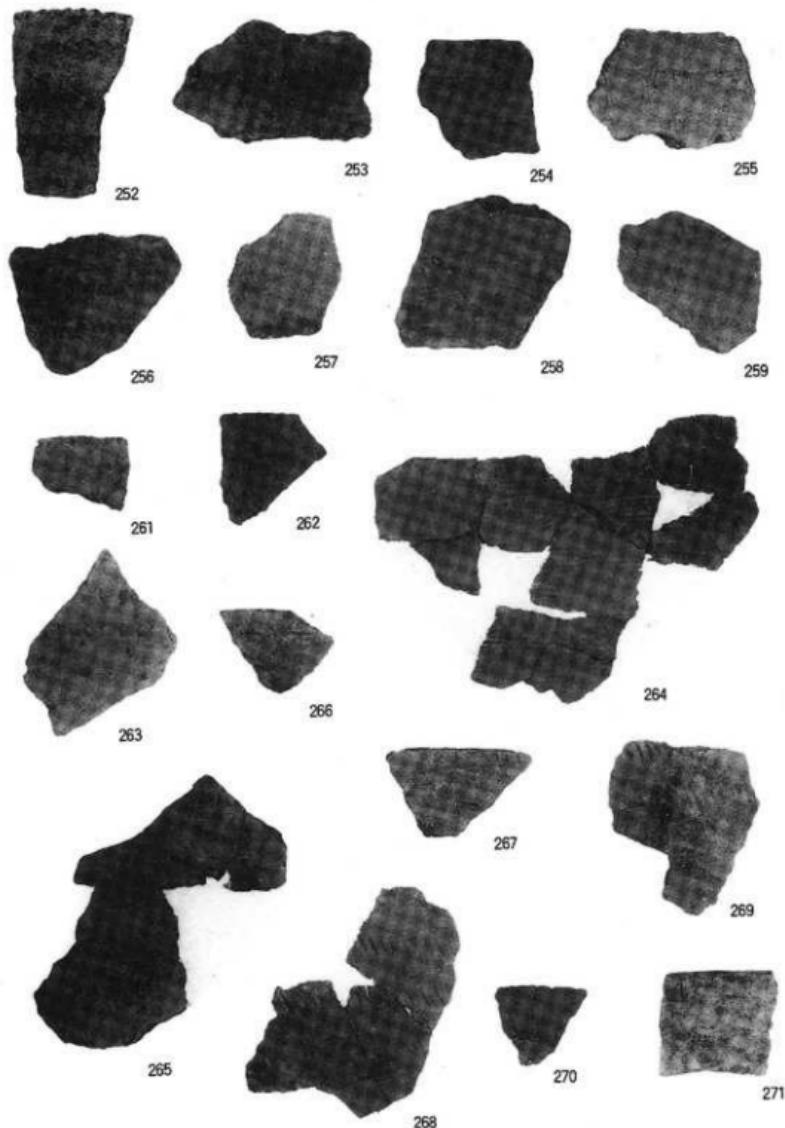
249



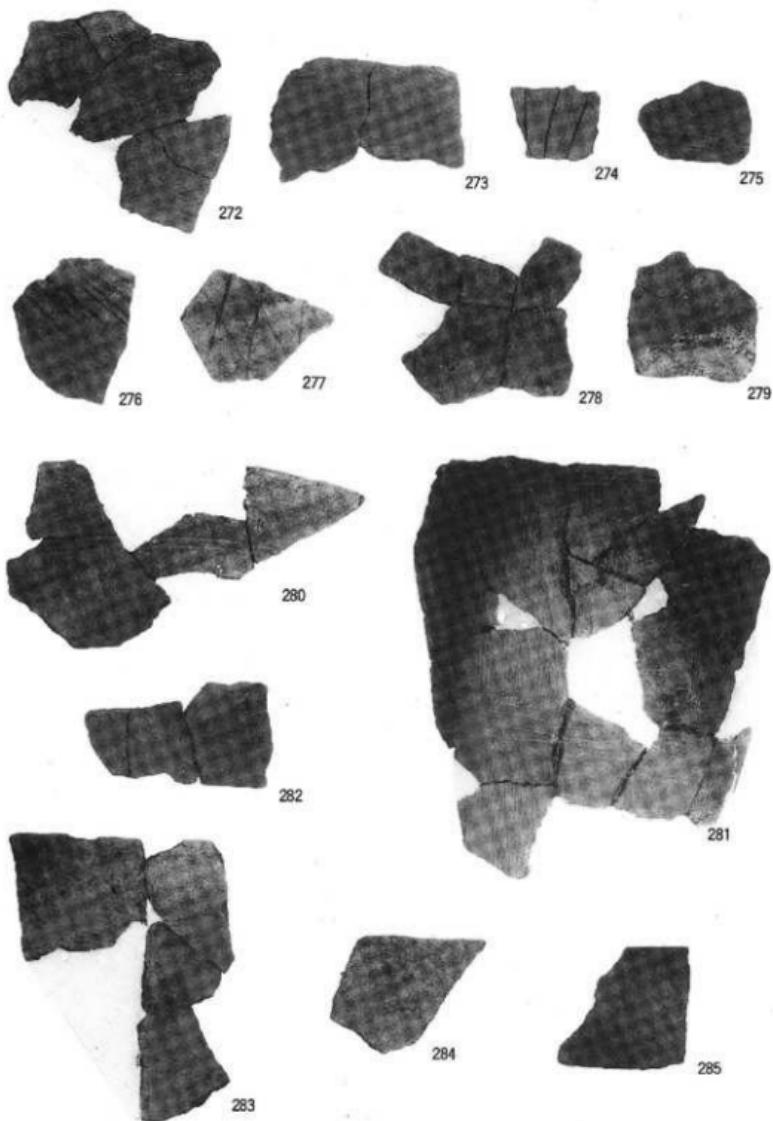
251

250

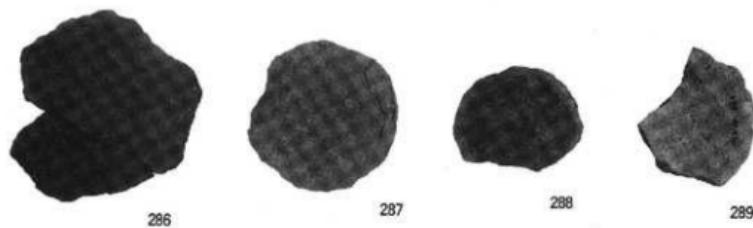
## 22 繩文土器



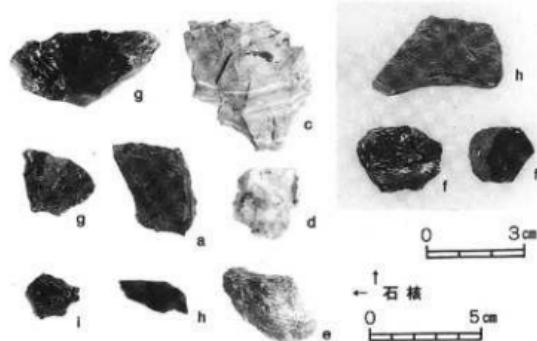
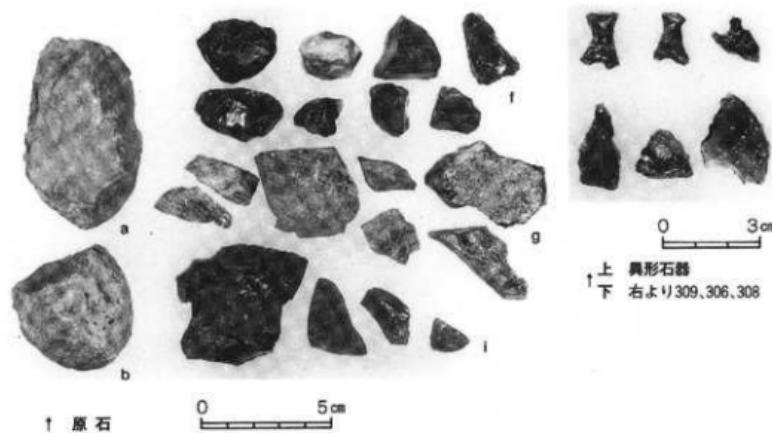
23 搞文土器



24 繩文土器

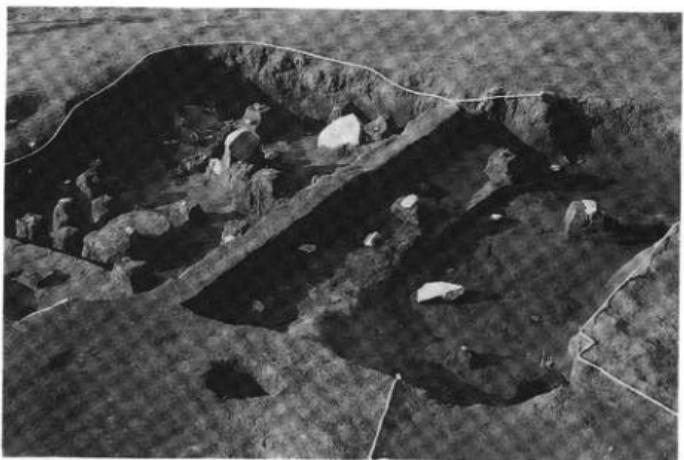


25 縄文土器



- 石材  
 a チャート  
 b 鉄石英  
 c  
 d  
 e  
 f~i 黒曜石  
 f 原石I類  
 g 原石II類  
 h 姫島産  
 i その他

26 縄文時代の石器



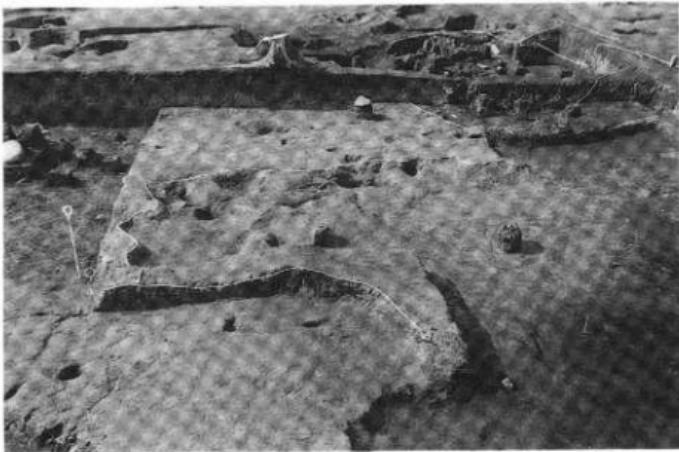
27 S A 2 (一次床面)



28 S A 3



29 S A 3 覆土



30 S A 4 - S A 14 (S A 8 - S A 9)



31 S A 5 • S A 6



32 S A 7